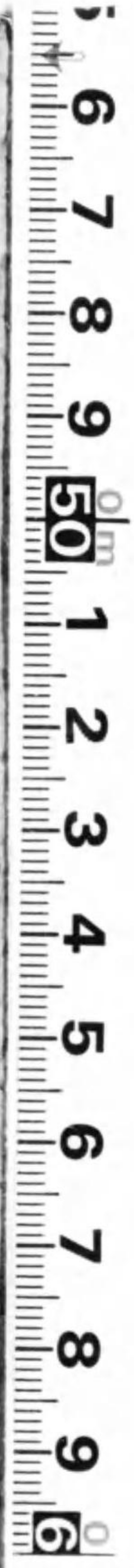


興亞の
理念論語新説

文學博士 市村瓚次郎題字
孔子學會長 西川光二郎序文
無相山人 原重治著

東京 自働道話社發行



始



特 232
135



文學博士 市村瓚次郎題字
孔子學會長 西川光二郎序文
無相山人 原重治著

論語新説



東京 自働道話社發行

秋志在千

贊題



序

本書の著者は十八年の間、教職にあつて、東京市内各公園や街頭に立ち、論語の信行を叫んで來た人である。

眞理は古くして常に新らしく、道は古今東西を通じて永遠に滅ぶるものでない。

刻下、我國內新體制及び日、滿、支一體融合の思想的基礎として、論語の弘通は最も急要であるというてよい。

非常時を乗切る平常心——不動の信念、人生觀を打ち建てるため、切に本書の精讀を大方諸賢にお奨めして止まない。

孔子學會長 西川光二郎

興亞の論語信説序

東亞新秩序建設は東亞に於ける道義的人類生活の創造を意味する。即ち人間の最も深き内省自覺に基づく理想と信念の確立によつて、近代文化を建直し、眞に平和幸福なる國家社會を築きあげるところに、所謂新秩序の意義はあり、目標はある。

今や世界人類は、あげて理想を失ひ信念を喪つて精神的饑餓の荒野にさまよふ状態に置かれてゐる。而して、これを濟ふためには、先づ人間最高の理念を打立てなければならぬ。内省思索の尺度標準を把握せねばならぬ。道德的信念を明確ならしめねばならぬ。聖賢の學問を研究體驗しなくてはならぬ。

吉田松陰は曰うた。「人、聖賢を師とせざれば則ち鄙夫のみ」と。所謂鄙夫とは營利功名の人間である。須らく聖賢の學問によつて鄙夫の境を脱して、人格價值の尊嚴に醒むべきである。脚下顧照を外にして、いたづらに大聲疾呼するも、そは東亞建設に

とつて何の効果をも齎さぬであらう。

聖賢の學問は論語一卷の中に藏められてゐる。

論語は孔夫子の思想及び教義であるが

應神天皇の御代我邦に傳來して以來、我が

皇道に合流し、國民信仰の思想的根幹となつて今日に至つたものである。

論語の内容は、政治、經濟、教育の根本原理と、其の具體的實踐方法とを指示する綜合思想——哲學、人生觀であつて、洵に現時我國民にとり内省及び批判の尺度として唯一の書籍であり、精神社會運動として、無二の信仰的經典であらねばならぬ。

古來論語に關する訓詁註解の著述は和漢を通じて有名無名を合すれば、實に數百千種に達するであらう。それらは價值の高下大小は姑く之を措き、皆それ／＼の時處に應じて世道人心を裨益したのであるが、刻下東亞建設の歴史的時局に直面して要求せらるゝ論語は、單に新註古註の異同を論じ、字句註釋の末節に拘はるべきでなく、直ち

に聖賢の精神殿堂に參して、絶對信仰の奥にまで超入するものでなくてはならぬ。

著者は少年より論語を讀むこと／＼に三十年。自ら省みて未だ論語の門口に達する能はざるを愧づるものであるが、論語の信順奉行が日滿支提携の精神的基礎であり、東亞新秩序建設への要道であることを信じ、微力を斯道に貢獻せんことを念願して此書を公にし、敢て大方君子の叱正鞭撻を冀ふ次第である。

皇紀二千六百年

昭和十五年十月二十五日

故荒川三郎君忌日

原 重 治 記

目次

學而	第一	一
爲政	第二	三
八佾	第三	四五
里仁	第四	六九
公冶長	第五	九〇
雍也	第六	一四
述而	第七	一四〇
泰伯	第八	一七〇
子罕	第九	一八八
鄉黨	第十	二二

先	進	第十一	二二五
顏	淵	第十二	二四九
子	路	第十三	二七〇
憲	問	第十四	二九四
衛	靈公	第十五	三三八
季	氏	第十六	三五二
陽	貨	第十七	三六五
微	子	第十八	三八六
子	張	第十九	三九七
堯	曰	第二十	四一五

學 而 第 一

子曰學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。

「子曰く學んで時に之を習ふ亦説はしからずや。朋あり遠方より來る、亦樂しからずや。人知らずして慍らず亦君子ならずや。」

大意。學習——修養向上の一步一步は、それ自らが、人間としての眞の喜びであり、楽しみであり、自我満足であり、幸福であるといふ感嘆を述べられたものである。——「子」は孔子。思索。「學習」とは詩、書、禮、樂、射、御等を學び習ふことである。詩は人情や天然の美をうたうたものであり、書は社會統制の理想を述べたものであり、禮は個人生活と社會生活との融合調和を教ふる法則と、その實習であり、樂は高尚の情操を養ふ音樂であり、射は弓を射る術、御は馬を御する術であつて、身心の鍛鍊と實用とを兼ねたものである。故に「學習」は人間の身心——知識と感情と意志の陶冶であつて、人間の本性から發する眞の欲求

を充たしていく努力向上そのものである。従つて、その一步一步が奮闘であると同時に、内心から湧き起る喜びでなければならぬ。すべての動物は與へられた本能以上に一步も發展することができないけれど、人間は知識に於て、技藝に於て、前人の教を承け、前社會の文明を繼いで不斷に進んで止まない。無限に向上發展していく。かくして今日の科學文明は築かれて來た。それは、すべて知識と技術とに於て先人の遺産を悉く信じ受けて、その上に繼ぎ足し蓄積した結果に外ならない。數、理、化學の研究と應用とは、皆此方法によつて進んでゐる。然るに、自己内省と生活批判の尺度標準——原理法則に至つては、近代人は、あまりにも無信仰であり懷疑的に陥つた。これが爲に知識と技藝とを正しく使用して、その眞の價値を發揮せしめる力を失つて却つて知識技藝を惡用し遂に文明の没落、世界戰爭の悲劇を生むやうになつた。即ち人類が生活を、より善くし、より幸福にするところの學習の本筋から脱線して無軌道状態になつたのが、現代社會である。それ故に現代の急務は學習を本筋に復し軌道に乗せるために、内省批判の尺度を握ること、言換れば聖賢の教典を信行することである。數、理、化學の法則を信するごとく、なほそれにもまして、それよりも根本的に自我反省の尺度として聖賢の教典を信することによつて、生活の指導原理を發見しなければならぬ。而して東亞新秩序建設の時局下にあつて、我日本國民の信行すべき唯一の教典は論語

である。皇道日本精神の訓解は論語である。道義の淵源、正義の標的は論語の研究を中軸とせねばならぬ。

「朋有り」とは思想を理解し、理想を同じくする同志同人のあることである。人々が論語を信行すれば、親戚一族相親しみ、郷黨、國民相和らぎ、東亞協同體が完成され、西洋遠方の民族も歸服するに至るであらう。人生の楽しみこれより大なるはなし。單に個人的の功利や享樂を追ふ民族は、やがて滅亡の外はない。天下の憂に先つて憂ひ、天下の楽しみに後れて楽しむというた古の政治家が待望される。東亞建設の聖業に参加し、苦難に直面して勇敢に奮闘するこの一日にまことの楽しみを創造する工夫が切要である。

「人知らずして慍らず」とは自己の功蹟や名譽心に束縛されないことである。道義世界建設といふ民族的使命を雙肩に負ふ日本國民にとつては個人的の成功や名聲は問題でない。聖戰を遂行する皇軍にあつては、司令官も一兵士も同列であり、銃後の護りとしては、大臣も一農民も同一列である。たゞ一筋に陛下の赤子として全心全力をさしげ盡すのみが、各々の本分であり、人間的價値である。古來唱へられた君子國日本の名は昭和の御代に至つて、其實を發揚する機會に達した。

「悦ばしからずや。樂しからずや。君子ならずや。」と三千年前に孔夫子が讃嘆された言葉は其の

まゝ現在わが日本國民の生活感情に移入されるものというてよい。

四

有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者其爲仁之本與。

「有子曰其人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好むものは鮮し、上を犯すことを好まずして亂を作すことを好むものは、未だこれあらざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟はそれ仁の本たるか。」

大意。孝行は至上の道徳であつて、人間百行の本である。教育も政治も孝弟の理想を高く掲げて民衆を指導することが緊要である。——有子は孔子の門人。孔子より少きこと三十六歳——

思索。「孝弟」は父母に事へて親愛と尊敬とを盡していく人情自然の修行であり、鍛錬道である。人間の本能に基づく權勢慾から起るもろくの争刻を社會から取除いて平和な生活を打建するには人々が父母に對する服従奉仕の實習を積まなければならぬ。自分の親を愛するものは必萬人を愛し、自分の親を敬ふものは必萬人を敬ふ。

神は愛であり、生命は愛である。つきつめていへば、天地間の一切の現象はすべて愛のはたらきに

外ならない。けれども、愛がたび本末先後の順序をあやまつて脱線すれば必ず怨みとなり争ひとなる。故にまことの愛とは、愛の本末順序を正しくすることに外ならない。此意味で愛の最も基本的なものが孝行である。

孝行は親子の間の真心の感應である。親心は人間愛の中で最も純なものであつて、日本民族は特に純眞な親心をもつてゐる。従つて子が親を愛する情も純眞である。孝行が國民道徳の核心として傳統的に尊ばれる所以はこれが爲めである。父母を敬ふ念は即ち祖先崇拜の禮となり、祖先の靈を神に祭る宗教的信仰となる。血族國家としての日本にあつて孝は即ち忠、忠は即ち孝となるの原理がここに見出される。吉田松陰が「忠孝一致たゞ我國を然りとす」と言はれた意味はこれである。支那では古來孝道至上の教訓は盛であつても、宣傳に流れ形式に流れて親子の間の純情が甚乏しかつた。孔子が孝道至上を強調されても之を實踐するものは少數に過ぎなかつた。西洋では個人の權利を尊重する思想からして孝道至上の教へさへ行はれてをらない。佛教も基督教も孝行を説くけれども、それは徳行の一部分であつて最上善ではない。日本の孝道は全的至上である。伊藤仁齋、中江藤樹、二宮尊徳はいふまでもなく古今の賢者哲人は悉く孝道の信行者である。

神武天皇の神勅に「大孝ヲ中ブベシ」と宣ひ、明治天皇の聖詔第一に「爾臣民父母ニ孝ニ」と宣

五

はせ給うた所以まことに意味深遠である。

「仁」の目標は道義世界の建設である。東亞の新秩序は道義世界の基礎である。元や清は武力を以て支那を征服し文化を以て征服された。皇軍の聖戦は攻略でなく征服でない。この超歴史的な崇高遠大な使命を支那に明かにすることは單なる聲明や策略をもつて速效を収めるわけにはいかならぬ。先づ日本に於て「義ハ君臣情ハ父子」の皇道を徹底せしめ、一國一家族の實體を顯さなければならぬ。私利私慾を以て對立することのない家族生活、無我の愛の親心、身をさしげ心を盡す孝弟の道。この道によつて、國に一人の飢民もなく一人の囚人も無いまでに到らしめねばならぬ。

六

子曰巧言令色鮮矣仁

「子曰く巧言令色鮮し仁。」

大意。言葉や顔色を取りつくろふものには真心が無い。

思索。明治天皇御製

聞くにまづ身にぞ沁みける誠より出づる言の葉多からねども

真心から發する言葉は簡潔で力が籠つてゐる。利己主義の長廣舌や、實行の伴はぬ宣傳は、美辭麗

句で綴られるけれども氣魄がない。魂から湧き出づる言葉のみが人の魂に響く。西洋ではローマの昔から雄辯術が研究されて宣傳に巧みであり、支那でも戰國時代から辯説家が輩出して談論に長じてゐる。日本は言あげせぬ國で不言實行を重んじ辯説を貴ばない。媚言美貌に引かれるは人情の弱點であるが、その向ふにある危険信號を見失つてはならぬ。

此訓へは人に接する用心であると共に自己省察のための警語である。内に真心と信念を養ふことによつて、虚飾宣傳に捕はれぬ工夫が肝要である。内に誠があれば言葉も顔色も、おのづから上品になり、美しくなる。けれども又内なる誠を養ふためには言語容貌を整へる禮儀作法を習はなければならぬ。巧言令色と禮儀作法とは似てゐて反對である。禮儀作法は上品であり、巧言令色は下品である。

曾子曰吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

「曾子曰く吾日々に三たび吾身を省みる。人の爲めに謀つて忠ならざるか。朋友と交つて信ならざるか。習はざるを傳ふるか」

大意。曾子は毎日、何度となく次の三點について自ら反省精進した。一、人の爲めに忠實に考へ且

七

つ働らいたか。二、朋友と交つて信義をつくしたか。三、自分の體驗と信念とをもつて後進の人を指導したか。——曾子は孔子の門人。孔子より少きこと四十六歳

思索。人間の價値は反省の程度で定まる。反省は自我を深め、自覺を高め、生活を自由解放へと導く。人間は一步反省を緩める時、忽ち利己心を生ずる。自己の全心全力をさゝげる「忠」は一生涯精進の目標でなければならぬ。心の底から朋友と信じ合ふことは容易の業でない。東亞新秩序の建設は「信を支那民衆の腹心におく」を以て究極の眼目とせねばならぬ。それには先づ日本國民相互の間に信賴の念を強めることが第一である。

國體の信念と道義の體驗とを以て指導の地位に立つことは刻下有識者の急務である。國民精神總動員の趣旨はこれによつて徹底されるであらう。吉田松陰は此章を愛して不斷に門人に朗誦せしめた。松陰先生にして眞に此章の深意を解せられたといへる。

子曰道ニ千乗之國ニ敬レ事而信。節レ用而愛レ人。使レ民以レ時。

「子曰く千乗の國を道むるに、事を敬して信に、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす」

大意。國家の政治を行ふには、敬虔の態度で政策を遂行して信を立て、自ら節約を守つて人を愛し、

人民を國事に使役するには、農業の隙を以てする心づかひと、思ひやりがなければならぬ。——千乗の國とは諸侯の國。

思索。政道の要は一旦立てた政策は必之を實行して國民の信賴を得ることである。單なる調査、立案、宣傳、聲明は、いたづらに國民を不安に陥れるに過ぎない。營利や權勢を超越した哲人にして、始めて政治に携はる資格がある。生涯國民生活の水準線以下の生活に甘んじて捨身で事に當る政治家の出現によつてのみ、内政改革も事變處理も可能である。

明治天皇御製

年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばん夏なかりけり

子曰弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛レ衆而親レ仁。行有ニ餘力ニ則用學レ文。

「子曰く弟子入ては則ち孝、出ては則ち弟、謹んで信。汎く衆を愛し仁に親づき行ひ餘力あれば則ちもつて文を學ぶ。」

大意。子弟たるもの、家にあつては孝行に、外に出ては和順であり、言語を慎しんで信實を旨とし、博く衆人を愛して殊に徳ある人に親しみ、かく實踐躬行を主とし、なほ力を極めて聖賢の遺文

を研究せねばならぬ。

思索。「入ては孝、出ては弟」は行住坐臥、不斷に孝行を怠らぬ意である。言語を慎しんで行ひを信にし、博く一般の人々を愛し、更に有徳の人に親近して、その教導を受ける。斯うした實行が學問の本筋であるといふ信念を強めることが必要である。これがためには、いさゝかの時間も空費せず、力を盡して古聖賢の經典遺文を熟讀精察することが最も必要である。學問と徳行とが別々になり、知識と人格とが離れ／＼になるところに、偏智教育の弊害が起り、科學文明の缺陷が生ずる。徳行即ち學問であるといふ思想を明かにして、知識を人格内容としての智慧にまで綜合統一する工夫が緊要である。

子夏曰賢^{トシテ}賢^{トシテ}易^ヘ色^ヲ事^ニ父母^ニ能^ク渴^シ其^ノ力^ヲ。事^レ君^ニ能^ク致^シ其^ノ身^ヲ。與^ニ朋友^ニ交^リ言^フ而^テ有^レ信^ヲ。雖^モ曰^フ未^ダ學^ズ吾^レ必^ズ謂^フ之^ヲ學^ニ矣^ト。

「子夏曰く賢を賢として色を易へ、父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致し、朋友と交り、言つて信あらば、未だ學ばずといふと雖も、吾は必之を學びたりと云はん。」

大意。賢者を尊崇して教を受け、父母に事へては力をつくし、君に事へては、身をさゝげ、朋友と交つて言行一致であつたならば、學術知識は乏しくても、人間としての學問に達したものであるといふ。——子夏は門人。孔子より少きこと四十四歳。

思索。賢人を尊敬し、自ら賢人たんとするは人間の願望であるが、賢者に對して感激が面に溢るるまでに至らなければ、まことの求道者といふことはできない。求道の熱誠をもつて父母に事へ、君に事へ、朋友と交れば、忠孝信義の徳を全うすることができる。學問の目標は人間の道を明かにするにあり、人間の道は忠孝信義の献身奉仕によつて究められる。すべての知識や才藝は献身奉仕の純情と人格とを透してのみ、人類の幸福と向上とに役立つところの力と價値とを發揮する。聖賢の教典に對して感嘆の瞳をかゞやかすやうな心境を開拓することが貴い。

子曰君子不^レ重^カ則^チ不^レ威^ク。學^ベ則^チ不^レ固^ク。主^ニ忠^ニ信^ニ。無^シ友^ニ不^レ如^ク己^者。過^レ則^チ勿^ク憚^ル改^ム。

「子曰く君子重からざれば則ち威あらず、學べば則ち固ならず、忠信を主とし、己れに如かざるものを友とすること勿れ。過つては則ち改むるに憚ること勿れ。」

大意。政治、教育、其他すべて指導的地位に立つた時の心得。

- 一、態度を重々しくして威儀あらしめること。
- 二、常に研究心を失はずして新知識を蓄へること。
- 三、忠實信義を以て行爲を一貫すること。
- 四、自己より勝れた人物を選んで親交すること。
- 五、過つたと知つたら、躊躇せず改めて正しく一步を踏出すこと。

思索。高尚な品性には、おのづから威厳がそなはつてゐる。高ぶらず氣どらないところに、侵すべからざる風格がある。威厳と風格とは無言にして人心を引きつける。不斷の研究心は固陋な質を脱して潑瀾たる元氣を充たしめる。そこに無限の精神力があらはれ、永遠の生命が見られる。但し、威厳も精神力も、その根原は忠信の一貫にあることを忘れてはならぬ。

自分より劣つたもの、自分に盲従するもの、自分に媚ぶるものを集めて得意で居つては、民族的使命の聖業は成就されない。己れに勝る人間、力強い人間、畏敬する人間の前に、拜跪する度量を持つた政治家、當局者が出るのが興亞日本の待望である。

吾々の過去を顧れば、多くは過ちの連続であつた。現在將來も同じく過ちの山、失敗の谷を乗り越えて最高峰の目標へ突進しなければならぬ。躊躇と回避とは後退であり轉落である。失敗を足場

として向上の一路に一步前進する勇氣が決勝の鍵である。

曾子曰慎終追遠民德歸厚矣。

「曾子曰く終りを慎しみ遠きを追へば民の徳厚きに歸す。」

大意。政治に當るものが、仕事の終りを慎しみ、又遠方の人々にまで情を盡すやうにすれば、人民の風俗が篤實になる。

思索。人間に貴ぶところは終始一貫である。終りを善くすることは難い。晩節を全うす人は少ない。殊に落寞たるものは政治家の末路である。明治、大正、昭和に互つて、眞に其晩節を全うした政治家が何人あるか。

凡そ新婚の度ましさを終生持続したならば、家庭に風波は起らない。近い姻戚の親しみを遠い一族にまで及ぼさうと心がけたならば、社會はおのづから純厚な風俗になる。生を皇國に享けたるを感謝し、祖宗の神靈を崇仰し、建國の精神に立還つて無窮の皇運を扶翼し奉るところに日本人の永遠生命がある。古今の歴史と世界の狀勢とを明らかにし、英雄の末路と征服者の轍を踏まないことが、日本國民の最も鑑戒とすべき點でなければならぬ。

子禽問^ニ於^テ子貢^ニ曰^ク夫子至^ニ於是邦^ニ也必聞^ク其政^ヲ。求^レ之與^ニ。抑與^レ之與^ニ。子貢曰^ク夫子温良恭儉讓以得^レ之。夫子之求^レ之也。其諸異^ニ乎人之求^レ之與^ニ。

「子禽が子貢に問うて曰く、夫子の是邦に至るや、必其政を聞く。之を求むるか、抑々之を與ふるか。子貢曰く、夫子は温良恭儉讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、それこれ人の之を求るに異なるか。」

大意。子禽が子貢に問うていふ「夫子（孔子）は到る處の國々に於て、必其位を得て政治の局に當られたけれど、これは夫子自ら其位を求めたのであるか。或は諸侯の方から位を與へたのであるか。」子貢は答へに「孔夫子は温、良、恭、儉、讓」といふ徳行を以て其位を得られた。夫子は道を社會に行ふために、位を求められたには違ひないが、外の人々が自分の權勢や名利のために、政治の位置を求めたのとは全く其動機を異にしてゐる。」——子貢は門人。孔子より少きこと三十一歳。子禽は子貢の門人。孔子より少きこと四十一歳。

思索。孔子は七十二君に遊説し、東西に奔走して席煖まるの追が無かつた。斯うした態度は一面から見れば、世事に没頭する野心家にも似てゐる、故に子貢の門人子禽が、この疑を子貢に質した。孔子は一身を守り世の誤解を恐れる餘裕なきまでに、道を弘め、仁を行はんとする熱情をもつてゐ

た。これがためには當時の社會狀勢にあつては、どうしても、先づ諸侯に事へて實地の國政に當らなければならぬ。三月の間、君に事へなければ、心が落つかぬといはれる孔子の生活が、一面に於て悠悠迫らず、温良恭儉讓の美德を失はなかつたのはこれによるのである。

子曰^ク父在^ニ觀^ニ其志^ヲ。父歿^{スレバ}觀^ニ其行^ヲ。三年無^レ改^ニ於^テ父之道^ヲ。可^レ謂^フ孝^ト矣。

「子曰く父在世せば其志を觀み、父歿すれば其行を觀る。三年父の道を改むることなきを孝といふべし」

大意。父の在世中は善に志しても、其行動は父の命令に服従し父が歿した後は自分の意志によつて善を行ひ、永く父を思ひ慕ふものを孝行といふべきである。

思索。父の志を繼ぎ父の善事善行を成し遂げることは子としての願ひであり、人間としての幸福である。父の業を子が繼いでいくことは遺傳の説から考へても、最も自然で發展性に富むわけである。けれども往々父と子と性質才能を異にした場合があり且つ複雑な社會に立つて、父と子と全く方面を異にした仕事に従へば精神的交渉が極めて乏しくなるを免れない。こゝから父子の相刻、家庭の崩壊といふやうな悲劇が生れる。親子の間の眞情を讚美する詩歌、文學、教育によつて社會的環境の缺陷を補ふことが肝要である。

有子曰禮之用、和爲貴。先王之道之爲美。小大由之、有所不行。知和而不知以禮節之、亦不可行也。

「有子曰禮はこれをもつて貴しとなす。先王の道これ美たれども、小大之に由らば行はれざるところあらん。和を知つて和するも禮を以て之を節せざれば亦行はるべからざるなり。」

大意。禮は人と人とを融和せしめるところに貴い目的をもつてゐる。この意味で傳統的の禮法といふものは、それぞれ重んずべきであるが、時代によつては、もとのまゝで行はれない場合のあることを知らねばならぬ。人と融和していけば禮法は要らぬと思ふものもあるが、矢張り禮法によつて形の上から節制しなければ、人間生活は圓滿に行はれないものである。

思索。人間の本能や慾望は極めて複雑であり、無限に増長するものであるから、之を節制しなければ、内には自我の分裂となり、外には人と争ひを生じて不幸な生活を送らねばならない。故に本能や慾望には、それ自身に節制と淨化を要求する性質をもつてゐる。この性質に本づいて、人間の日常動作に一つの型を定めたものが即ち禮儀作法である。そして禮儀作法の一面は社會の制度習慣となつて時代から時代へと傳はつていくものである。従つて禮法は傳統と形式とを重んずるから、固

苦しくなり人情の親しみを失ふやうにも考へられる。けれども「親しき仲には垣をせよ」といふ言葉の如く、形から入つて敬虔の念を養つていかなければ、長く人と親愛融和を保つていくことはできない。自然主義や自由主義の破綻は禮法を無視することから起る。家庭の如く愛情の濃かな間柄にあつては、殊に禮儀作法を重んずる必要がある。嚴格に過ぎるの弊は放任の害に比べて、はるかに少ない。

有子曰信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。

「有子曰信義に近づけば言復むべし。恭禮に近づけば恥辱に遠かる。因りて其親を失はざれば亦宗とすべきなり。」

大意。人と約束するに、利を離れて義に近づけば、實行ができる。人と交るに慎しみの心を以て禮法に従へば、恥を受けることがない。義に近づき禮に従ひ、なほ、よく人と親しみを失はない人は尊敬すべき人物というてよい。

思索。約信を果すことは貴いけれど、その結果が不義不正であつたならば、約言を履行することはできない。故に初めに義か否かを明らかにすることが大切である。義を明かにするには聖賢の經書

を研究せねばならぬ。人に對する態度の恭しきことは美德であるが、あまりに程度を過ぎると却つて人に不快な感を懷かせ悔りを受けるやうになる。故に禮法の實習によつて恭敬の心を最も適切に表現するやうにしなければならぬ。こゝに聖賢の教を充分に究める必要がある。義と禮とは、いづれも克己鍛鍊を主とするものであつて、往々人情自然の親しみと溫味とを失ふ恐れがある。仁者としての圓滿な人格を養ふには、此處に注意して一方に偏せぬやうにしなければならぬ。

子曰君子食無_レ求_レ飽_〇 居無_レ求_レ安_〇 敏_ニ於_レ事_一而慎_ニ於_レ言_一。就_ニ有_レ道_一而正_レ焉_〇 可_レ謂_レ好_レ學_也已_〇。

「子曰く君子は食飽くを求むることなく、居安きを求むることなく、事に敏にして言を慎しみ、有道に就いて正すを學を好むといふべきのみ。」

大意。君子は美食安逸を求めない。職事に敏捷であつて言語を慎しみ、有徳の人に就いて教を受け行ひを正すを學を好むといふべきである。」

思索。人間が競うて美衣美食を求め、享樂を追ふところに、もろくの苦しみ、悩み、怨み、争ひが生じ、遂には世界戦争といふやうな大悲劇が起つて来る。人々が自覺して職分を守り、義務を盡

し、行を勵み、言葉を慎しみ、有道の先輩に従つて過ちを改め身を修めたならば社會から一切の闘争と罪惡とが無くなるであらう。而してすべての人々が、ほんとうの喜びと樂しみを得る。有道の人に就いて行を正す求道心、好學心が盛なれば職事に勵み言語を慎しむ君子となることができる。そこに世俗の享樂を超越した高潔の生活が營まれる。しかし現代にあつては有道の人を得ることがむづかしい。故に先づ聖賢の經書を熟讀し、道義の信念を打建てることに急務である。

子貢曰貧_ニ而無_レ諂_レ富_ニ而無_レ驕_〇何如_〇 子曰可_レ也_〇 未_レ若_ニ貧_ニ而樂_レ富_ニ而好_レ禮_者也_〇 子貢曰詩_云如_レ切_ル磋_如琢_如磨_其斯_之謂_與。子曰賜也始_可與_言詩_已矣_〇 告_諸往_而知_來者_{ナリ}。

「子貢曰く貧しくして諂ふことなく富んで驕ることなきはいかん。子曰く可なり。未だ貧しくして樂しみ、富んで禮を好むものには如かざるなり。子貢曰く詩にいふ。切るが如く磋ぐが如く琢つが如く磨くが如しとは、それこれの謂か。子曰く賜や始めてともに詩をいふべきのみ。これに往を告げて來を知る者なり。」

大意。子貢が「貧しくても諂らふことがなく富んでも驕らないのは賞讃すべき行ひではありませんか」と問うたので、孔子は「それは賞讃に價するけれど、貧しくても生活を樂しみ富んで禮讓を好むものには及ばない」と答へられた。すると子貢が——古詩の中にある「切、磋、琢、磨——象牙

を切つて磋ぎ、璞を琢つて角を取り、それを磨く——とある句を引用して「道は無限の向上である」といふ意味に解釋したので、孔子は子貢が古詩の精神を覺り得たことを喜び「過去を聞いて未來を知るものである」と賞められた。

思索。金があれば何でもできる。金によつて、すべてが解決される。——一般の人間は斯うした觀念に生きてゐる。故に貧しければ意氣消沈し悲觀煩悶し、富めば得意満面で豪華な生活を始める。貧乏でも人に諂はず、富んでも人に驕らぬ人間は極めて少ない。子貢が「諂ふことなく、驕ることなきはいかに」と質問した意味はこゝにある。

まづ金に對する迷信を打破することが根本問題である。そして不義の富が無價値——むしろ禍であり、道義の貧生活が平和な心境の源であることを覺らしめなければならぬ。これによつて富が正義に支配せられる社會を築かなければならない。孔子が「水を飲み脰を曲げて枕とするも樂み其中にあり」といひ顔回を賞めて「賢なるかな。一椀の飯、一椀の汁、陋巷にあつて其樂みを改めず」と嘆じ、子路を評して「破れた綿衣を着て盛裝した人と並んで恥ぢぬものである」と讚へられたのはこれが爲である。

人生は向上の旅路である。至善を求むる無限の向上である。それは一面に於て生活を美化することであり、詩化することである。故に詩は生活と一體でなければならぬ。子貢の古詩を解する見方がこゝに達したので孔子が賞讃されたのである。

子曰不患_レ人之不知_レ己也。

「子曰く人の己れを知らざるを患へず。人を知らざるを患ふ」

大意。人に知られず、社會から認められないことを憂へずして、人を理解し時代を正しく認識することのできないことを憂ひとせよ。

思索。人に知られず、社會から認められずして悠々自己の爲すべきを爲して、怒らず、怨まず、いさゝかの不平をも懐かぬものは君子聖人のみである。才能あるものは名譽心強く、向上の氣力あるものは權勢慾も盛である。名譽心を否定するのではない。虚名を求めて自己宣傳に没頭するを卑しむのである。眞の名譽は德行にあり、人格にある。よく人を理解し人の才徳を顯すにつとめれば、我が徳おのづから積つて不朽の名聲も之に従ふであらう。

爲政 第二

子曰爲_レ政以_レ德譬_レ如_レ北辰居_レ其所_ニ而衆星共_レ之_ニ

「子曰く政を爲すに徳を以てす、譬へば北辰の其所に居て衆星の之に共ぶが如し。」

大意。 徳望を以て國民から信頼されてゐる政治家が、局に當つたならば、北極星が其位置に靜止してゐて、衆星が之に向つて運行するやうに、小智小策を用ひずして立派な政治が行はれる。

思索。 中庸に「其人存すれば其政舉り其人亡すれば其政息む。」とあり。制度も組織も、之を運用するは人間であり、人格であり、徳行である。政治は壇上から巧みに演説することなく、黨派を立て利害を以て團結することでない。家にあつては家人に信ぜられ外にあつては友人に信ぜられ、どんな場合にも、利己主義や野心の奴隷にならない人間を政府の中心に立たしめることである。王道政治の立前はこれであり、プラトンの哲人政治といふものも、これに類する。複雑な國家組織や國際關係の間にあつては、政治も特殊の技術を要し、事務の練達を要することいふまでもないが、高潔な人間として民衆から信頼されるのが、政治家たる第一條件でなければならぬことは、古今東西

に亘つて異なるところがない。身命を献げて國難に代らんと祈願する赤誠あり責任感あつて、始めて眞に國民の支持と信頼とが獲られるであらう。

子曰詩三百。一言以蔽_レ之。曰思無_レ邪。

「子曰く詩三百。一言以て之を蔽ふ。曰く思邪なし」

大意。 古詩三百篇の教へとするところは、人間の純情を高調して邪路に陥れない點にある。

思索。 孔子は古詩三千を削定して三百十一篇となし、詩經を編纂されたと傳へられる。「思邪なし」は詩經、魯頌の中にある駟篇の一句である。

西洋の哲學者は「我思ふ、故に我あり」というた。自我の本體は「思ひ」である。「思ひ」は感情、意念、思想のすべてを含んでゐる。「思ひ」は精神のはたらきとして自然に發生するものであるからそのまゝに天真爛漫であり、無邪氣であるともいへるけれど、それはまた邪まな方向へ脱線して邪念となり邪行となる傾きをもつてゐる。それ故に、感情、意念、思想を偽ることなしに之を正しく、強く、明朗に表現することのできるやうに洗練しなければならぬ。「大學」に「其身を修めんと欲するものは先づ、其心を正しくし、其心を正しくせんと欲するものは先づ其意を誠にす」とあるは、

この意味である。

正しき思ひは、正しき行爲となつて更に正しき思ひを深め、邪まな思ひは邪まな行爲となつて更に邪まな思ひを増長せしめる。哲人幾を知りて之を思ふに誠にし、志士行ひを勵ます、之を爲すに守る」とあるは名言である。古詩を誦し、之を味ひ、之を觀照すれば感情、意念思想を純眞にして、知らずく「思邪まなし」の境地に到達せしめる。こゝに詩の教へがあり、藝術の價値がある。

子曰道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有恥且格。

「子曰く之をまじひに通かくに政を以てし之をとどふるに刑を以てされば、民免れて恥なし。之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥有つて且つ格し。」

大意。法律を以て人民を治め、刑罰を以て人民を取締れば人民は法網をくゞり刑罰を免れて恥を知らぬやうになる。徳行を以て人民を治め禮儀を以て人民を指導すれば恥を知つて義に趣くやうになる。

思索。秦の始皇は嚴法嚴刑で失敗し、漢の高祖は法三章の寛大を以て成功した。法律刑罰は一時の効果はあつても、忽ちその反動が起つてくる。徳行の感化は速効を現さないが、永久に亘つて民心

を支配する。

政治には權力を要するから、法律刑罰を廢することはできないけれど「法は法無きに期し、刑は刑無きに期する」の精神を失つてはならぬ。道德を本として、時代人情に最も適合した制度法規の運用が即ち禮を以て齊ふるの意味である。

子曰吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。

「子曰く吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順しなふ七十にして心の欲するところに従つて矩のりを踰えず」

大意。孔子は十五歳にして聖賢の學に志し、三十歳にして道を得て社會に立ち、四十歳にして、あらゆる事件に處して迷はない識見と力とをそなへ、五十歳にして天から與へられた自己の使命を確信し、六十歳にしてすべての人々を自分の家族同様に考へられるやうになり、七十歳にして心の欲するまゝに行動して、それが人と衝突せず、自己の心に後悔もなく煩悶も無いやうになつた。

思索。此章は孔子が七十年の經歷に對する内省の心境を述べられたものである。孔子は聖人であり

天才であるが、孔子の心境は、また萬人の心境と相通するものでなければならぬ。才智技藝などの天才は、之を萬人に要求することはできないけれど、人情を基本とする向上生活——道徳に至つては聖人の心境も凡人の心境も異なるべきでない。人情は萬人共通であり、道徳修行は萬人に等しく要求すべきものである。もし道徳修行が萬人に要求して得られぬものとすれば、聖賢の聖賢たる意味はなく、孔子が東西に奔走して教を説き道を述べられた熱意も生れなかつたであらう。

凡そ普通の智能をそなへた人間は十五歳頃になり、青年期の第一階段に上れば、必人生の意義目的に就いて考へ、漠然ながら宇宙觀人生觀を立て、高遠なる理想を欲求するものである。此時期に於て聖賢の書を學び聖賢たらんと志し、十五年精進を續けて三十歳に到つたならば、必道徳的自覺を以て社會に立つことができるであらう。更に十年二十年、三十年の修行を積んだならば、惑はず、天命を知り、遂に自由、解放、超越の境地に達することは疑ひを容れない。求道生活は一時的の力や方便を以て一擧に飛躍を期すべきものでない。この一步一步に於ける不斷の實踐それ自らが前進であり向上であり、價値であり、天命であり、自由解放である。

故に自我自覺の發程たる青年期の第一階段にあつて先づ聖賢の學に志すことが根本であり、基礎であり而して一切である。

孟懿子問_レ孝。子曰無_レ違_{フコト}。樊遲御_{タリ}。子告_レ之曰孟孫問_ニ孝於我_ニ。我對曰無_レ違_{フコト}。樊遲曰何謂也。子曰生_{ケルニハフルニニテシ}事_ニ之_ヲ以_レ禮_ニ死_{スレバ}葬_ニ之_ヲ以_レ禮_ニ祭_{ルニ}之_ヲ以_レ禮_ニ。

「孟懿子孝を問ふ。子曰く違ふことなかれ。樊遲御なり。子之に告げて曰く孟孫孝を我に問ふ。我對へて曰く違ふこと勿れと。樊遲曰く何の謂ぞや。子曰く生けるには之に事ふるに禮を以てし、死すれば之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす」

大意。孟懿子が孝行の仕方を問ふと、孔子は「違ふなかれ」といふ簡単な答をされた。ある時孔子が外出した時、門人の樊遲が馬車の御者をつとめたので、孔子が樊遲に向つて、「此間孟懿子が孝を問うた時、私は違ふ勿れと答へたけれど、この意味をどう考へるか」と質問された。樊遲は「分りません。どういふ意味ですか」とたづねたので孔子は「父の在世中は禮を以て事へ、歿した時は禮を以て葬り祭りの時は禮を以て行ひ、いさゝかも禮に違うてはいけないといふ意味である」と答へられた。

思索。孟懿子は魯國の大夫として政治に參與する貴い身分である。孟懿子の父は孟僖子といふ賢者で幼少の懿子を孔子の門に學ばせた。孟懿子が父の職を繼ぎ大夫の禮を以て生時、葬祭之を一貫していくには、父に劣らない徳行精進を要する。孝行は父の志を繼ぎ父の業を成し、父を尊くし、家

名を耀かすを以て第一とする。故に孔子は「違ふ勿れ」の一言を以て孟懿子に訓へられた。「違ふ勿れ」の一言で孔子の心もちが完全に通ずるところに孔門特有の教育が見られる。

孟武伯問^フ孝。子曰父母唯其疾之憂^{ニハタノヲレヘヨ}。

「孟武伯孝を問ふ。子曰く父母にはたゞ其疾をこれ憂へよ」

大意。(一)父母が年老いて一朝病に臥した場合には心を盡して看護するが孝行である。

(二)父母は子の病を我病よりも憂へるから平常よく攝生して身體を健康にせねばならぬ。

(三)父母には病氣の爲めに心配かける以外、他の心配を絶対にかけないやうにしなければならぬ。

思索、孟武伯は孟懿子の子であつて、此時父孟懿子は既に老境に入つてゐたので、此章の本意は「大意の(一)」にあつたものと伊藤仁齋は解釋する。仁齋先生の母は臨終の病床から、我子仁齋に向ひ合掌拜禮して逝つた。仁齋の孝養、看護の至り極まれるを感泣されたのである。論語の行者仁齋の眞骨頭がこゝに見られる。

子游問^フ孝。子曰今之孝者是謂^レ能養^ニ至^ニ於犬馬^ニ皆能有^レ養^ニ不^レ敬何^ニ以^レ別^ニ乎^ニ。

「子游孝を問ふ。子曰く今の孝は、これ能く養ふをいふ。犬馬に至るまで皆よく養ふことあり。敬せずんば何を以て別たんや。」

大意。子游が孝行を問うたので、孔子は答へられた。今の人は物質的に父母を養ふことを孝行とするけれど、單に物質を以て養ふならば、家に飼うてある犬馬と異なるところはない。尊敬の念を以て禮儀正しく事へるでなければ、どうして眞の孝行といはれよう。

——子游は孔子の門人。孔子より少きこと四十六歳——

思索。物質の奉養によつて父母を喜ばせ樂しませることは勿論孝行ではあるが、それは孝行の一面に過ぎない。人間の生活にあつては愛と同時に敬がなければならぬ。敬を伴はぬ愛情は動物に近いものである。それは往々怨みとなり争ひとなるを免れない。眞に父母を愛するものは、必感謝奉恩の誠としての尊敬の念を持たなければならぬ。たとひ物質的の養ひが充分にできなくても、愛敬の眞情を以て父母に奉仕すれば孝行を全うしたというてよい。

子夏問^フ孝。子曰色難^シ。有^レ事弟子服^ニ其勞^ニ。有^レ酒食先生饌^ニ。曾是以爲^レ孝乎^ト。

「子夏孝を問ふ。子曰く色難し。事あれば弟子其勞に服し、酒食あれば、先生に饌す。すなはち、これを以て孝

とせんや。」

大意。子夏が孝行を問うた。孔子曰く「平生、温恭、柔和な顔色を以て父母に事へることは容易でない。業務の勞に服することや、美食を父母にすゝめることのみが、孝行であらうか。」
思索。一時的に人の前で顔色を慎しむことは容易であるが、日常不斷に父母に對し平和な、しかも希望に輝いた顔色を保つことは、むづかしい。此一事は孝行の根本である。根本が出来れば、その他は自らはれる。子の顔に表れるいさゝかの曇り、顔面筋肉のかすかな動きも、父母の神経には大きな刺戟である。自分の憂鬱な顔色が、どれだけ父母の心を憂鬱にするかを考へて、年少の子弟は深く反省を加ふべきである。内心情緒の動搖を外面に表はさないことは、古來東洋に於ける鍛練道の一特徴であつた。

子曰吾與^レ回言終日不^レ違^レ如^レ愚^{ナラ}。退而省^ニ其私^ヲ亦足^ニ以^テ發^一回也不^レ愚^{ナラ}。

「子曰く吾回と言ふこと終日違はず、愚なるが如し。退いて其私を省みれば、亦以て發するに足る。回や愚ならず」
大意。顔回は寡言であつて、孔子が終日語つても、黙々として肯づき聽くばかり、何の疑ひも異論も狭まない。愚人のやうに見える。しかし退いて彼の生活をしらべて見れば、實行に於て聖賢の道

を發揮してゐる。顔回は決して愚人でない。賢人である。と孔子が嘆賞された。——顔回は孔子の門人中の第一人者。孔子より少きこと三十一歳——

思索。顔回は帝王を輔佐する大任に當るべき人物である。孔子が「用ひられたならば、國政の局に立つて、道を天下に行ひ、棄てられたならば、草茅の中に起臥して身を修め徳を養ひ、教化の事に従ふ。善く之を行ふものは、吾と汝とのみ」と言はれたのを見ても、顔回の大人物であつたことがわかる。大賢は愚の如し。大人物は小智小才を表さず。大徳は功利權勢の中に居らない。しかし、智仁勇は孔子の道とするところの目標であつて、賢者は智仁勇が日常の態度に表れ、愚者は無智、不仁、卑怯の動作が人に知られる筈である。故に孔子が顔回を「愚の如し」といはれたのは、彼があまりに沈黙の性格であつたのを譬へたものと思はれる。僅かに三十歳の短生涯を以て斷然孔子から期待された顔回は、その人物德行、我が吉田松陰に比すべき豪傑であつたと想像される。孔子の門人顔路を父とする顔回は、生れながらにして既に孔子の道を體得してゐたものというてよからう。

子曰親^ニ其所^ヲ以^テ觀^ニ其所^ヲ由^ル。察^ニ其所^ヲ安^{スル}人焉^ニ度^サ哉[。]人焉^ニ度^サ哉[。]人焉^ニ度^サ哉[。]

「子曰く其以てする所を視、其由る所を觀、其安んずる所を察すれば人焉んぞ度さんや、人焉んぞ度さんや。」

大意。其人の行ひを見て、その動機を考へ、更にその行ひに安んじてをるか否かを察して見れば、その人の人物や性格は隠されない。はつきりと判る。

思索。人の品性や性格は、容貌や言語にあらはれる。人相を見れば人物がわかる。殊に人間の性格は眼にあらはれてゐる。性質の強弱、善悪は大抵眼の光りによつて判断することができる。キリストは「身の光りは眼なり。汝の眼明らかなれば、其心明らかに、汝の眼暗ければ其心暗し」といひ、孟子は「その言を聞いて、其眸子を見れば人いづくんぞ隠さんや」というてゐる。けれども、これはキリスト孟子の如き達人であれば、確實にあたるであらうが、一般の人々にあつては、さう簡單にいかない。鏡に曇りがあれば、物がはつきり映らない。身に慾があれば理智が正しく働かない。容貌や言葉だけで人を批判すると往々非常な間違ひを生ずる。故に人相や眼の色を以て人を判断するは正當な方法でない。最も安全確實な方法は其人の行ひを見て、その動機を考へ、その日常生活に安定があるか否かを察することである。人物批判の最も公正な尺度、標準は此外に求められない。

子曰温^{ホテ}故^{キナ}而知^{レバ}新^{キナシ}可^ニ以^テ爲^ル師^ト矣。

「子曰く故きを温ねて新らしきを知れば、以て師となるべし。」

大意。古聖賢の道を研究して新しき時代の指導精神を発見するものは人の師となることができる。思索。すべての新らしいものは古きものゝ充實から生れる。創造といひ、新發明といふは、必、前人の研究、前時代の遺産に對する忠實な検討から出來たものである。科學文明の進歩發展は皆前時代から遺された器械の運用と改良とに基くのである。思想や哲學の方面にあつても古聖先賢の遺文に對する徹底的信行が無ければ、新らしい文化を創造することはできない。故に復古精神は單なる歴史の回顧でなく民族的飛躍の脚場を固くするものであり、古聖賢への復歸は、單に個人的憧れでなく人類的向上の基礎となる信念を築く所以である。

子曰君子不^レ器^{ナラ}。

「子曰く君子は器ならず」

大意。君子は人の爲め世のために積極的に働らく人であつて、人に使はれてゐて、自分一人のことだけ考へる人間でない。

思索。君子は有徳の人であり、有位の人であり、指導的立場にある人である。器は一用に適するものゝことである。靴は帽子の用をなさず、帽子は靴の用に立たない。君子は小智小巧の人でなく、

事務的の才でないが、自分の職務には、どこまでも忠實である。孔子は嘗て乘田や委吏といふやうな小吏となつて、よく其職を盡した。君子はどんな地位にあつても、個人的の利害に捕はれず、大局を達観する見識を持ち大乘的の立場を失はない。

子貢問ニ君子。子曰先行ニ其言ニ而後從レ之。

「子貢君子を問ふ。子曰く先づ其言を行うて而して後之に従ふ。」

大意。君子は實行を先にして宣傳を後にする。

思索。議論のための議論。賣名、營利本位の著作。實行不可能の政策發表等は君子の爲さざるところである。「不言實行」といふは、不言を貴ぶのでなく、實行を貴ぶのである。信念を以て實行し且つ宣傳するは君子の行ひである。

子曰君子周而不レ比。小人比而不レ周。

「子曰く君子は周して比せず。小人は比して周せず。」

大意。君子は公正に人を待遇して偏頗な感情に捕はれることがなく、小人は利己的に人を偏愛して

公正な態度で人を待遇しない。

思索。君子は常に全體の立場から觀て人の位置に身を置いて考へる。故に公明正大であつて、利己的に黨派を作り偏頗な愛憎に捕はれることがない。小人は自己の利害を中心に生活するから、目前の結果を見て大局を考へない。故に小細工をして感情に走り、人を待遇することが不公平である。

子曰學而不レ思則罔。思而不レ學則殆。

「子曰く學んで思はざれば則ち罔し思うて學ばざれば則ち殆し。」

大意。聖賢の經典を研究しても、反省思索しなければ、明らかに其意味を悟ることはできない。反省思索しても、聖賢の經典を研究しなければ獨斷的になつて危険である。

思索。自然現象や社會現象を客觀的に研究する科學の進歩發達は、それ自らの價值は勿論あるに違ひないが、客觀的批判研究に没頭するために、内面生活に眼を向ける隙がなく、ために反省思索の力を失うたことは、人類生活にとつて大きな過ちであり、禍であつた。世界非常時は、この誤つた方向からの根本的轉向を全人類に要求してゐる。瞑想内觀に偏すれば、空想的虚無的になり、迷信に陥り過激行爲に走るやうになる。古來多くの宗教戰爭は皆此類の脱線に外ならない、横井小楠曰

く「功利に走らず禪に流れず、大丈夫の心聖賢を冀ふ」と。先づ聖賢の經典を師として不斷に内省思索、實踐體驗を積み、その上で科學の知識と器械の利用とを計つたならば眞に人生を意義あらしめることができるであらう。

子曰攻乎異端斯害也已。

「子曰く異端を攻むるはこれ害のみ。」

大意。根本を忘れて枝葉に走るは道を害し徳を損ふのみである。

思索。「異端」とは異説を立て奇論を唱へて萬人普遍の道義に悖るものである。新奇を好むは人間向上の一面であり亦人情の弱點でもある。日新創造の生活は萬人普遍の道を信行して一日も怠らないことによつて得られる。異説奇論を遂うて新と心得るは見當違ひである。人間の道は君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の間に備はつてゐる。この人倫の基本である忠孝、友愛、信義の實踐を外にして高遠隱微の説を立てるものは皆名利の徒に過ぎない。

子曰由誨ニ女知レ之乎。知レ之爲レ知レ之。不知爲レ不知知是知也。

「子曰く由よ汝に之を知るを誨へんか。之を知るを、之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲よ。これ知れるなり。」

大意。確實に自分の知ることを知るとし、知らぬことを知らぬとして、少しも偽り飾らぬのが、ほんとうの知識を得る道である。——由は門人子路の字。子路は孔子より少きこと九歳。性勇敢にして一切の知識を究め盡さんとしたので孔子が眞知への道を訓へられた。

思索。一人の頭脳には限りがあつて、萬人の知識には限りがない。人間の知識には限りがあつて、宇宙の眞理には限りがない。有限の人間を以て無限の宇宙を知り盡さんとするは徒勞である。故に自己の知るべき範圍を定めて確實に之を研究し、みだりに多智博識を求めてはならぬ。何を自分が確實に知つてをるかを精察すれば、必自己の知識の微少なるを覺つて、謙虚な心もちになる。ソクラテスは「汝自身を知れ」といひ又「自己の無知なるを知るものが眞の知者なり」というてゐる。ニュートンは「人間の知識は海邊に立つて掌の上に拾ひ集めた貝殻の量にも等しい」というた。訓詁註釋の寄集めや、斷片的知識の記憶は眞實の智慧でない。一つを中心に綜合された智慧。一の指導原理によつて貫かれた知識——哲學を持たなければならぬ。一經論語の修行を中軸とする博識が最も望ましく。

子張學^フ于^ム子^{コト}子^ナ。子曰多聞闕^レ疑^シ。慎言^ニ其^レ餘^ヲ。則^シ寡^シ。尤^モ多見闕^レ殆^シ。慎行^ニ其^レ餘^ヲ。則^シ寡^シ。悔^フ。言寡^シ。尤^モ行寡^シ。悔^フ。祿在^ニ其^レ中^ニ。

「子張祿を干むることを學ぶ。子曰く多く聞きて疑しきを闕き慎しんで其餘を言へば則ち尤め寡し。多く見て殆きを闕き慎しんで其餘を行へば則ち悔寡し。言尤め寡く行悔寡なければ祿其中にあり。」

大意。子張が仕官を求めものゝ心掛けを問うた時、孔子は答へられた。「常に見聞を廣め、識見を高め、疑はしいことを言はず、危いことを行はず、言葉に咎めがなく、行ひに悔がなければ、おのづから仕官の道が開けるものである。」——子張は門人。孔子より少きこと四十八歳——
 思索。人間は誰でも功利名譽の慾を持つてゐる。才氣溢れ、風采堂々といはれる年少有爲の子張にとつて、仕官の道は切實な問題であつた。故に此質問をなした。聖賢の道は、どこまでも自修、自覺、自得にある。自ら正しくして人に求めず、人知らずして慍らざるにある。故に孔子は子張に「見聞を廣め言行を慎しめば、求めずして祿其中にあり」と教へられた。仕官の道、就職の道はもとより知識技術の堪能を必要とするけれど、それよりも、根本なるは、識見徳行である。如何なる時代、如何なる場所にあつても、言行正しくして人の儀表となつたならば、必人の信頼を得て、失業、生

活難の患はないであらう。時に治亂があり、社會組織に缺陷があるから、一時、困窮に會ふ場合はないでないが、有道の士は決して長く經濟的苦惱を受けることはない。

哀公問曰何爲則民服。孔子對曰舉^レ直^ニ錯^ニ諸^ノ枉^ニ則^シ民服。舉^レ枉^ニ錯^ニ諸^ノ直^ニ則^シ民不^レ服。

「哀公問うて曰く何を爲さば則ち民服せん。孔子對へて曰く直きを舉げて諸の枉れるを錯けば則ち民服す。枉れるを舉げて諸の直きを錯けば則ち民服せず。」

大意。魯の哀公が政令行はれざるを嘆き、人民を心服せしめる方法を孔子に問うた。孔子は對へられた。「公直な人物を拔擢して私曲を行ふ人間を下に置けば人民は心服する。私曲な人間を擧げて公直な人物を下に置けば人民は心服しません」

思索。私曲をなす人間は必ず巧言令色を以て上に取り入るものである。上の人々に迷うて、その人間を登用し遂に大衆の支持を失うて事を敗るに至る。剛正公明な君主は必甘言をしりぞけて公直な人物を擧げる。龍は雲を呼び虎は風に從ふといふ。物は類を以て集る。

明治天皇御製

ひとり身を省るかな政助くる人はあまたあれども

季康子問使_フ民敬_{ニシテ}忠_{ニシテ}以_テ勸_ム如_レ之_ヲ何_ヲ。子曰臨_ム之_ニ以_レ莊_ニ則_レ敬_ス。孝慈則_レ忠_ス。舉_{ゲテ}善_ヲ教_フ不能_ニ則_レ勸_ム。

「季康子問ふ民をして敬忠にして以て勸ましむる之を如何。子曰く之に臨むに莊を以てすれば則ち敬、孝慈なれば則ち忠、居を擧げて不能を教ふれば則ち勸む。」

大意。爲政者として上に立つものが、莊重な態度を以て民に臨めば、民は上を尊敬し、孝行慈愛の徳を以て指導すれば、民は忠誠を盡し、有能なものを擧げ用ひて能力無きものを教へてやれば民は其の業に勵むやうになる。

思索。魯國の民衆が下剋上で遊惰に流れてをつたので、大夫（執政）の季康子が綱紀肅正の方策を問うたのである。孔子は之に對して具體的に訓へられた。

王道仁政の要は「敬天愛民」の四字に盡されてゐる。「莊」は禮儀あつて重々しきことである。威と愛とが並び行はれて政道は全きを得る。爲政者が徳行高く民衆の信望厚ければ、もとより問題は無いが、徳行未だ及ばぬ場合にあつては、先づ威を立てるでなければ政は行はれない。神を祭り天に事ふる敬虔の態度を以て民衆に臨むの用意が第一に必要なのである。

或謂_ニ孔子_ニ曰_ク子奚_ノ不_レ爲_レ政_ヲ。子曰書_ニ云_ク孝_乎惟_レ孝_{。友_ニ于_レ兄弟_ニ施_ニ於_レ有_レ政_ニ是_亦爲_レ政_{。奚_ノ其_レ爲_レ爲_レ政_。}}

「或人孔子に謂て曰く子奚ぞ政を爲さざる。子曰く書に云ふ。孝かこれ孝、兄弟に友に有政に施す。これ亦政を爲すなり。奚ぞ、それ政を爲すとせん。」

大意。孔子が當時家に居て、諸侯に事へられなかつたので。ある人が「政に携つて世を濟ひ人を救はれることが急務ではありませんか」と孔子に問うた。そこで孔子は答へられた。「書の中に『家に在つて孝行友愛を盡すが政治の道である』と記されてある。こゝに政治の原動力があるではないか。必しも國政に携ることのみが政治ではない」

思索。「書」は古代に於ける王道政治の記録である。王道は民衆の安居樂業を目標とする。農業本位の家族制度を社會單位とする當時の支那にあつては、民衆の安居樂業は孝弟友愛の家族道德の目ざめと實踐以外何ものでもない。これは古代支那のみならず、今日の支那にあつても、工場労働者や浮浪民の集中する都會を除いては社會單位は依然として家族生活である。支那のみならず、日本にあつては殊に社會單位は家族生活である。いふまでもなく、日本は國そのものが一家族である。個

人主義、功利主義、社會主義などの西洋思想——机上の理論に捕はれて法律學や經濟學に没頭したのが誤りであつた。政治革新の思想は此處から出直さねばならぬ。

子曰人而無_レ信不_レ知_ニ其可_一也。大車無_レ輓。小車無_レ軌其何以行_レ之哉。

「子曰く人として信なくんば、その可なるを知らざるなり。大車輓なく、小車軌なくんばそれ何を以て之を行らんや。」

大意。人と人と相信することが無かつたならば、車に心棒の無いやうなもので社會生活を圓滑にすることはできない。

思索。大車は牛車。小車は馬車である。「輓、軌」は牛及馬を車に接続するところである。

人間は思想的にも、感情的にも、社會と密接に連つてゐる。池の面へ小石を投げたやうに、自分の一言一行が全社會に波及していく。一言の不信、一行の詐偽も、それは全體への疑惑と不安の原因になる。人間社會が兎に角ある程度まで平和安寧を保つてゐるのは、人間相互に信があるからである。人間の性が善であるといふのは人間に信のあることを意味する。

より高き善の生活へ。より深き信の社會へ。こゝに人間の本願がある。相互信頼の一つがあれば經

濟も政治も極めて單純な事務で間に合ふ。原則は常に簡單明瞭平凡である。

子張問十世可_レ知也。子曰殷因_ニ於夏禮_一所_ニ損益_一可_レ知也。周因_ニ於殷禮_一所_ニ損益_一可_レ知也。其或繼_レ周者雖_ニ百世_一可_レ知也。

「子張問ふ。十世知るべきか。子曰く殷は夏の禮に因る。損益する所知るべきなり。周は殷の禮による。損益するところ知るべきなり。それ或は周に繼ぐもの百世と雖も知るべきなり。」

大意。子張が「十世の後の社會を豫知することができまスカ」と問うたので孔子は答へられた。「殷はその前の夏の時代の禮儀制度を取捨して國を建て、周はその前の殷の時代の禮儀制度を取捨して國を建てた。この意味で周に繼いで起る時代は百世の後といへども知ることができ」

思索。人間の運命や社會の變遷は豫め測り知ることができない。此意味で一年後の出來ごと、十年後の社會狀勢を前知するといふやうなことは、むしろ奇怪に屬する。けれども過去の歴史によつて將來の社會を想像することは人間の要求であり、理想である。青年にして才識あるものは高遠な理想を持ち想像力が豊かであつて、往々奇怪な憶測斷定に耽り易い。故に孔子は人情道德に本づく國家社會の制度組織が大體に於て永久に變らないものであることを言うて歴史的事實を根據とする堅

實な觀方を子張に諭された。

子曰非^ズ甚^ク鬼^ニ而祭^ル之^ヲ諂^ニ也。見^テ義^ヲ不^レ爲^ス無^レ勇^キ也。

「子曰く其鬼に非ずして之を祭るは諂なり。義を見て爲さざるは勇無きなり。」

大意。妄りに神を祭つて福利を求めるは卑劣な心もちであり、爲すべき事を知りながら、之を爲さないのは卑怯な態度である。

思索。「其鬼」とは祖先の靈である。神に祈つて禍を攘ひ、病氣を癒すやうなことは、一種の迷信で淫祠邪教に屬するものというてよい。信仰は福利を目的とすべきでない。心の奥の願ひとして生活の淨化を祈り、精神の平安を希ふのである。しかし信仰の副産物として幸福利益が得られることは亦當然でなければならぬ。人間から功利の慾を取除くことはできない。たゞ爲すべきを爲し、行ふべきを行ふ勇氣を不斷に繼續して倦まず撓まざるところに一切に打勝つ光明正大の信念と氣象とが養はれる。こゝに眞の功利があり、幸福があるのである。

八佾 第三

孔子謂^フ季氏^ヲ八佾舞^ニ於^テ庭^ニ。是^ヲ可^ク忍^ブ也。孰^シ不^レ可^ク忍^ブ也。

「孔子季氏を謂ふ。八佾庭に舞す。これをも忍ぶべくんば、いづれをか忍ぶべからざらん。」

大意。魯の大夫季氏が天子の舞樂の八佾を自分の家廟で舞はせたので、孔子は「これをしも忍んで行ふことができるならば、どんな惡逆でも爲しかねまい」というて痛く季氏の僭越を非難された。思索。「八佾」は八人八列にて舞ふ天子宗廟の舞樂である。當時魯の執政として權勢を振つてゐた季氏は、自分の家廟でこの舞樂を行ふまでに僭越を極めた。大義に暗く禮法亂れた社會にあつて、孔子が一人敢然として權勢に屈せず、堂々と季氏を攻撃されたところに、烈々たる氣魄が見られる。

三家者以^テ雍徹^ス。子曰相維辟^ク公。天子穆^ク穆^ク。奚取^ニ於^テ三家之堂^ニ。

「三家者雍を以て徹す。子曰く相くるこれ辟公。天子は穆々たり。奚ぞ三家の堂に取らん。」

大意。魯の大夫の三家者どもが、家廟の祭りの終りにあつて、天子宗廟の祭りに歌ふ「雍」の詩

を歌つた。孔子が之を非難して「雍の詩には、祭りを助ける諸侯を見るも、天子の恩徳の深遠なのが知られる」とあるではないか。此詩を三家の祭りに歌ふとは何といふ事か」と慨嘆された。

思索。「三家」は季孫、叔孫、孟孫の三家老である。いづれも魯の執政として權勢に燃え叛亂を企てるやうな輩である。孔子は魯の襄公二十二年（我綏靖天皇の御代）十一月、魯の昌平郷に生れ、年少くして、仕へて會計、牧畜等の小官となつたが、年三十五の時、去つて齊に仕へた。魯の定公元年孔子年四十三にして魯に歸り、年五十三の時、中都の宰になり、司空より大司空（宰相）となつた。魯は孔子によつて一時はよく治まつたが、季氏のやうな小人どもが追々跋扈したために、年五十六の時魯を去つた。そして衛、宋、陳、蔡、楚の諸國に遊事し、年六十八に至るまで魯に歸られなかつた。

孔子の大徳を以てして季氏を斥け魯を治めることができなかつたのは、天命といふべきである。けれども孔子が定公の信任を得て、生涯魯の政治家であつたならば、或は齊の晏子、鄭の子産と比べられる大政治家として終つたかも知れぬ。孔子が魯を去つて十年間天下を周遊し、遂に、その理想を現世に實現する機會を得なかつたことは萬世の木鐸として道義を永遠に傳へられる結果となつた。これ亦天道の然らしむるところといふべきであらう。

子曰人而不仁如禮何。人而不仁如樂何。

「子曰く人として仁ならずんば禮をいかに。人として仁ならずんば樂を如何。」

大意。仁の理想をもつて人の爲め社會の爲めに献身的に働かぬ人間であつたならば、たとひ禮儀作法に通じ音樂の藝術にすぐれてゐても、それは形式や技巧だけであつて、價値はない。

思索。仁に志して人間最高の理想を追求するものは純情で献身的である。故にその人の動作態度が高雅であり上品である。禮と音樂とは人間を純情にし高雅にするための修行に外ならぬから、仁を理想とするものは當然禮樂にも通することになる。仁の一面は禮であり、禮の一面は仁である。仁と禮とは一體不離のものであるが、當時一般の人間が形式的の禮樂を偏重して仁を求める純情に缺けてゐたので、孔子が斯く警告された。如何なる時代でも形式に流れ枝葉に走りて内容が貧弱になり根本精神を失ひ易いものである。識者、指導者の深く留意すべき點である。

林放問禮之本。子曰大哉問。禮與其奢也。寧儉。喪與其易也。寧戚。

「林放禮の本を問ふ。子曰く大なるかな問ふこと。禮はその奢らんよりは寧ろ儉せよ。喪は其易めんよりは寧ろ

威いためよ。」

大意。林放りんぱうが禮の根本精神を問うたので、孔子は「それは實に大問題である」と賞めて答へられた。「禮は奢つて飾るのが目的でなく、寧ろ儉にして讓るのが、本來の精神である。従つて葬式の場合にあつても、外觀の壯麗よりも中心の威いたみ悲しみが貴いのである。」

思索。禮儀萬能の世の中にあつて、禮の根本精神を考へたところが大に偉とするに足りる。人間の慾望は無限に増長するから、禮儀を修めて克己節制しなければ、自ら我を滅ぼす結果になつてしまふ。社會としても、制度、法律を設けて統制しなければ、平和を保つことはできない。自己節制も社會統制も要するに儉と讓と純との三つに歸着する。

子曰夷狄之有君。不レ如レ諸夏之亡レ也。

「子曰く夷狄の君あるは諸夏の亡きが如くならざるなり」

大意。未開の國でも君主があつて統治されてゐれば、開化の國に君主がなくて混亂するよりも人民は幸福である。

思索。「夷狄」は文化の低い邊境の民族であり、「諸夏」は漢民族の領する中國である。孔子の時代（春秋時代）にあつて、周の王室が衰へ、王道が廢れ、大義名分が明かならず、臣は君を弑し、子は父を弑し、上下混亂して統一するところなく、夷狄が屢々中國に侵入して人民は一日も其生を安んずることができない有様である。こゝに於て孔子は周室を尊び王道を明かにし、君臣の大義を確立するを以て急務と考へられた。即ち文化の程度が低くても、一定不易の君主を戴くことが國家の生命であり、民族の幸福であるといふのが孔子の思想であつた。

季氏旅ニ於泰山。子謂ニ冉有ニ曰ク女不レ能レ救與。對曰不レ能。子曰嗚呼曾謂下泰山不レ如ニ林放乎。

「季氏泰山に旅す。子冉有に謂て曰く汝救ふこと能はざるか。對て曰く能はずと。子曰くあゝ曾ち泰山は林放に如かずと謂へるか。」

大意。季氏が諸侯の家臣でありながら、僭して泰山の山祭（諸侯の禮）を行つた。孔子の弟子冉有が當時季氏に事へてゐたので、孔子は「汝は季氏の過つた行爲を諫止することができなかつたか」と責められた。冉有が「できませんでした」というたので孔子は「嗚呼、泰山の神が季氏の祭りを享け給ふものならば、林放にも及ばぬ神であると申さねばならぬ」といはれた。——冉有は門人、孔

子より少きこと廿九歳——

五〇

思索。冉有は孔子の門人中にあつて、政治の才に秀でてゐて季氏に事へた。季氏は魯の政權を専らにして八佾を舞はし、泰山に旅するやうな僭越な行ひをしたけれど冉有は之を止めることができなかつた。彼は曾て民に重税を課して季氏の富を増したので、孔子の叱責を蒙つた。これらのことを以て觀れば、冉有が季氏に事へたことは、全く祿を竊むものゝやうであるが、當時、專横なる季氏の野望を抑へて魯で反亂を起さしめなかつたのは冉有や子路が仕へてゐたためであることを思へば孔子が郷國の爲めに謀られた深意が理解できる。

子曰君子無所爭。必也射乎。揖讓而升。下而飲。其爭也君子。

「子曰く君子は争ふところなし。必ずや射か。揖讓して升り、下りて飲ましむ、その争や君子。」

大意。君子は、利害や權勢のために人と争ふことはない。弓術で矢を的に射中てるやうな技を以て競争する場合にも、其動作は禮儀に合してゐる。

思索。君子は目標極めて大に、理想高遠であるから、目前の利害や權勢を以て人と争ふ心もちが起らない。射禮は二人が挨拶し譲り合うて堂上に升り、的を射て、外れたものが堂を降つて罰の酒を

飲む儀式である。眞剣な態度を以て勝敗を争ふけれど、それは自我の反省と修練とを目標とするものであつて、單に人に勝ち、技に誇るのでない。君子は己れに克つを力めて人に勝つを好まない。争心と勝心とを去つて向上の一路に邁進する。けれども、義を論じ道を明かにするに至つては亦人と争ふことを辭するものでない。

子夏問曰巧笑倩兮、美目盼兮素以爲絢兮何謂也子曰繪事後素曰禮後手子曰起予者商也。始可與言詩已矣。

「子夏問うて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を爲すとは何の謂ぞや。子曰く繪の事は素を後にす。曰く禮は後か。子曰く予を起すものは商なり。始めてともに詩を言ふべきのみ。」

大意。子夏が「巧笑倩たり（愛嬌あり）美目盼たり（眼黑白明らか）素以て絢をなす（白粉を塗つて色彩をなす）」といふ詩の意味を孔子に問うた。孔子は「素以て絢をなすといふことは繪を書くに各種の色彩を施しその間に白粉を塗つて鮮明にするのである」と答へた。子夏がこれによつて、禮法が人情を本として、その上に制定されたものであることを覺つたので孔子は子夏の頭のよいのに感心して「共に詩を語るに足りる」と賞められた。

五一

思索。子夏が質問した詩の要點は「素以て絢をなす」の一句にあつたので孔子はこの點に就て答へられた。禮は人情、慾望、本能の融和と調和とを役目とするものであるから、あまりに形式的束縛に流れると繁文縟禮となつて、禮の精神を失ふに至る。當時の社會は、この弊に陥つて、人々が、よく禮の意味を知らぬ状態であつた。しかも年少の子夏がよく禮の意味を最も適切に解釋し得たので孔子が大いに喜ばれた。「禮は後か」といふ「後」は先後の意味でなく、虚文虚禮に流れてはならぬことをいうたのである。詩は人情のまことを詠つたものである。詩によつて人間生活の眞に觸れることができれば、そこに禮の生命が認識されるわけである。詩の中に禮があり禮の中に詩がある。詩と禮とは共に生活を美化し藝術化するを役目とする。生活の美化、藝術化は即ち道德の向上に外ならない。

子曰夏禮吾能言_レ之_ヲ。杞不_レ足_レ徵_{トスルニ}也。殷禮吾能言_レ之_ヲ。宋不_レ足_レ徵_{トスルニ}也。文献不_レ足_レ故也。足_{ラバ}則_ク吾能徵_ク之_{トセンヲ}。

「子曰く夏の禮は吾能く之を言ふ。杞徵とするに足らざるなり。殷の禮は吾能く之を言ふ。宋徵とするに足らざるなり。文献足らざるが故なり。足らば則ち吾能く之を徵とせん。」

大意。孔子は夏の時代の禮法制度を研究し、杞（夏亡びて後、杞に封ぜらるる）に往いて調査されたが、正確な文献を獲られなかつた。又殷の時代の禮法制度を研究し、宋（殷亡びて後、宋に封ぜらるる）に行いて調査されたが、矢張り正確な文献を獲られなかつた。それ故に孔子は遂に夏殷の禮法を説述されなかつた。

思索。其時代に最も適應する制度組織を建てることは安居樂業を立前とする王道の緊切な仕事である。これが即ち禮である。故に孔子は禮の研究に於て最も意を用ひ力を注がれた。杞に行き宋に行つて調査されたことは、その熱意の尋常ならぬを示すものである。所謂社會正義とは最も適切な制度組織の正しき運用の上に行はれる倫理的標準に外ならない。禮は傳統を重んずる。傳統を基本として止むを得ぬ範圍に於て自然的な改革を行ふが禮の精神である。急激な變動や不自然な改革は必ず不幸な反動によつて争亂を起すものである。

子曰禘自_ニ既灌_{ニシテ}而往者吾不_レ欲_セ觀_{ルヲ}之_ヲ矣。

「子曰く禘既に灌してより後は、吾之を觀るを欲せず。」

大意。孔子が帝王の大祭たる禘の祭りの廢れて空虚になつたのを慨かれたものである。

思索。禘は帝王が誠敬を盡して天地祖先を祭るところの大祭である。それを魯の國が諸侯でありながら僭して行うたので、孔子が之を觀るを欲せずと嘆ぜられたのである。「灌」とは神前に供へた香酒を地にそゞいで神靈を降す儀式である。「灌」より以前は本祭でない。灌して後に本祭が始まる。孔子は魯の禘祭が全く空虚な形式に墮してゐるので斯く評せられたのである。

或問^フ禘之說^ヲ。子曰^ル不^レ知^ラ也。知^ル其說^ヲ者之於^ニ天下^ニ也。其如^レ示^ル諸斯^ニ乎。指^ス其掌^ヲ。

「或人禘の説を問ふ。子曰く知らざるなり。其説を知るもの、天下に於けるや、それこれをこゝに示るが如きかと其掌を指す。」

大意。或人が禘祭の説を問うた。孔子は禘祭の眞意を知るものは、天下を統治すること掌上の物を動かすよりも容易であると答へられた。

思索。王道は祭政一致であり、祭（マツリ）即ち政（マツリゴト）の建前である。そこに禘の重大な意義が見出される。魯が禘祭を行ふことは僭越の極である。故に孔子は始めに「知らざるなり」と答へこれについて禘祭の眞意を知るものは天下を治めること掌を指すが如しと述べられたのである。

祭^ル如^ク在^ス。祭^ル神^ト如^シ神^在。子曰^ク吾不^レ與^レ祭^ル如^ク不^レ祭^ラ。

「祭ること在于すが如く、神を祭ること神の在于すが如し。子曰く吾祭りに與からざれば祭らざるが如し。」

大意。祖先を祭るには、祖先の在于すが如く、神を祭るには神靈の在于すが如くに度しまねばならない。孔子は祭りの時支障りがあつて、人を代りにやれば、我心満たざるところあつて、祭らぬ如くに感ずるといはれた。

思索。祖先の靈は永久に子孫の生命を守護して滅びない。故に祖先を崇拜し祖先の靈を祭るは人間の眞情である。利益や方便の爲めにするのでない。天地の神靈も永遠に人類の生命を見護つて眞の幸福へと導いて下さる。國家社會に功德があつて、神に祭られた人々の靈も永く民衆の意識を支配して滅することはない。斯の如き自覺と信念とを強める儀式と禮法とが即ち祭りである。

王孫賈問曰^ク與^ニ其媚^ニ於^ニ奧^ニ、寧^媚於^ニ竈^ニ。何謂^也。子曰^ク不^レ然^ラ。獲^ニ罪^於天^ニ無^レ所^ニ禱^ル也。

「王孫賈問うて曰く、その奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよとは何の謂ぞや。子曰く然らず、罪を天に獲れば禱るところなし。」

大意。孔子が衛の國に行つた時、權勢ある家臣の王孫賈が孔子に向つて「奥の神に媚びるよりも竈の神に媚びよ」といふ俚諺を引いて、「國王に事へを求むるならば我（王孫賈）門に來れ」といふ意味をほのめかした。孔子は「罪を天に獲れば祈るところなし」と答へて、神にも人にも媚びず、たと天意に従ひ道に由つて進退すべきことを諭された。

思索。信すべきものを信じ、頼るべきものを頼るは人間として最も正しき道である。人間は弱いものであるから、祖先に祈り、神に禱つて其助けを求めるとも必要である。又人に對して謝禮の意味で物を贈る如く神に献げ物を奉ることも利己主義とはいはれない。

たゞ物が過ぎて誠が缺ければ媚びとなり、尊敬の念が無くて利用意識で爲せば、利己主義となる。天は誠そのものであつて、偽りもなく謬りもない。天の心を繼げ承ぐものは聖人である。故に聖人の教典を信行するは天心に従ふものといへる。

子曰周鑑_ニ於二代_ニ郁郁乎文哉吾從_レ周_ニ。

「子曰く周は二代に鑑みて郁々乎として文なるかな。吾は周に従はん。」

大意。周の禮制は夏殷二代を參酌して、よく完備されたものである。故に孔子は周禮の復興を以て

畢生の任とした。

思索。殷は夏の禮に基づいて制度組織を立て、周は夏殷二代に鑑みて禮法を制定した。故に周の制度は古來傳統の精粹というてよい。孔子が周室を尊び周道の興復を以て自ら任ぜられた意味はこゝにある。歴史は常に繰返す。舊いものは廢れて新らしいものが之に代り、新らしいものも、やがて舊くなつて更に新らしいものによつて置換へられる。而してその新らしいものは皆舊きもの、廢れたものゝ再生であり復活である。根本原理は古今一貫して永遠不變である。

子入_ニ大廟_ニ每_レ事問_フ。或曰孰謂_ニ鄒人之子知_レ禮乎_一。入_ニ大廟_ニ每_レ事問_フ。子聞_レ之曰是禮也。

「子大廟に入て事毎に問ふ。或人曰く孰か鄒人の子を禮を知るといふか。大廟に入つて事毎に問ふ。子之を聞いて曰くこれ禮なり。」

大意。孔子が魯の大廟の祭りに當つて、事毎に人に問うて行つた。或人が之を見て孔子が禮法に通じてゐるといふ評判に似合はしからぬことゝして誹つた。孔子は自分の行爲を「これが禮である」と肯定された。

思索。禮の精神は謙讓にある。儀式作法を習得することは禮の末節というてよい。孔子が大廟の祭りに事毎に先輩に問うたのは作法を知らないのではなく、謙讓の心もちが然らしめたのである。「これ禮なり」といはれたところに、禮に對する孔子の確信が見られる。

子曰射不主皮爲力不同科。古之道也。

「子曰く射は皮を主とせず。力科を同じくせざるがため古の道なり」

大意。射は矢が的に中ればよいのである。今の人が的の皮を貫くことの多少を競ふのは古の射法に反してゐる。

思索。「力科を同じくせず」——人の力には生れながらの差があつて、他人と比較して競争すべきものでない。たゞ自分に與へられた力を最も正しく出しきるのが人生の目標である。言換れば各人の個性天分を眞に生かし發揮させるところに、もろくの技藝があり、職業があり、修養向上の道がある。こゝに幸福の人生があり、理想の社會があるのである。現實の世の中はクダらぬ虚榮や不自然な競争に追はれて、個性は虐げられ、生活は壓迫されてゐる。「古の道」に復つて、人生を再検討する必要が急である。

子貢欲去告朔之餼羊。子曰賜也爾愛其年。我愛其禮。

「子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く賜や爾は其羊を愛しむ我は其の禮を愛しむ。」

大意。子貢が告朔の氣羊——毎歳の末に翌年十二月分の曆を神に献げおき、毎月一日に犠牲の羊を神前に供へて曆を受ける。此羊が告朔の餼羊である。當時、曆を神に献げず。たゞ羊のみ供へて祭禮を行つた——を廢めようと考へた。孔子は告朔の禮の復興を大切に思つて子貢の説に賛成されなかつた。

思索。曆を失つた告朔の禮は虚禮である。子貢が餼羊を去らうとしたのは正しい考である。けれども孔子は更に大きな立場から考へて、一日も早く告朔の禮の實質を復興しなくてはならぬ。それが爲めには形式としての餼羊を存しておくことが必要な道であると思はれたのである。

現實の問題を解決するには常に一步高い立場に立つて考へることが肝要である。眼前の利害や經濟問題に没頭したり局部的な同情に捕はれると、大局を謬り大謀を敗ることを免れない。

子曰事君盡禮人以爲諂也。

「子曰く君に事へて禮を盡せば人^{ひと}以て詔^{しと}へりと爲す。」

大意。君に事へて禮儀を盡せば、人はそれを見て詔ひだとする。——それほどまでに、風俗が衰へて利己主義者が多くなつた。

思索。風俗の變化と流行の勢力は不思議なものである。東京音頭——東京市街の辻々に櫓を立て其周圍に老少男女、小學生までが集團となつて、レコードに合せて、ヤアト／＼ヨイ／＼といふ調子の俗謡を歌ひながら、踊り廻る狂態——が晝夜到る處で演ぜられた。それが忽ち日本全國津々浦々にまで流行した。その瞬間に滿洲事變は勃發して世界非常時が展開された。事變以來、東京音頭は全く跡を絶つて、軍歌と詩吟の流行がこれに代つた。

マルクスの資本論を讀まなければ、現代の人間でないやうに見られてゐたが、今日では悉く轉向して皇道日本學に歸依する有様となつた。けれども風俗におもねり流行に溺れて東京音頭を踊つたり階級闘争を叫んだりする人間の心理は少しも改まつてゐないとすれば、憂ふべく、恐るべきであるといはなければならぬ。風俗流行の中に立つて毅然として己れを曲げない人間、千萬人之を非とするも、終始一貫して變らない人間の存在のみが國家社會にとつて永遠の支柱となるであらう。

定公問君使^レ臣^ヲ。臣事^レ君如^レ之何^ヲ。孔子對曰君使^レ臣以^レ禮^ヲ。臣事^レ君以^レ忠^ヲ。

「定公問ふ。君臣を使ひ臣君に事ふる之を如何。孔子對へて曰く、君臣を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てす。」

大意。定公が君臣の道を問うたので、孔子は對へた。「君は禮儀を以て臣を使ひ、臣は忠義を以て君に事へよ」

思索。禮は敬ひの態度である。君として臣を使ふ場合に、最も失ひ易いものは禮儀である。忠は身を献げる覺悟である。臣として君に事へるには、献身の覺悟が最も大切である。禮も忠も眞心を主とし敬虔を本とする點に於ては同じである。

子曰關雎^ハ樂^シ而^{シテ}不^レ淫^セ哀^シ不^レ傷^ラ。

「子曰く關雎は楽しんで淫せず、哀しんで傷らず。」

大意。關雎の詩は楽しんで、それに溺れることなく、哀しんでも、身體を傷ふことがない。感情の中和を得た高尚な詩である。

思索。關雎は詩經の卷首に掲げられた詩であつて、君子に配するに淑女を以てする戀愛を詠つたものである。美しい品性から發する美しい愛慕の情、そこに美しい戀があり、詩がある。詩は人情を歌つたものであり、人情の中心は戀愛である。詩歌文學が多く戀愛から取材されるのは、これが爲めである。萬葉集にも詩經にも戀愛が多く詠はれてゐる。戀愛は人情の最も微妙な強烈な動きというてよい。小説が人間——青年に好まれるのは、これが爲めである。青年の頭から戀愛問題を切離することはできない。性教育とか戀愛觀とかいふ問題が論ぜられるのは斯うした要求から來るのである。けれども戀愛は必然に性慾に連なり、結婚に連なるものであつて、極めて複雑な問題であり、理論や言説を超越した範圍にまで入りこんでゐる。それ故に人生論や思想問題として長々と戀愛を説くことは無價値、否有害である。むしろ道德的信念によつて美しい品性と高尚な人格を養ふやうにすれば、おのづから戀愛問題は會得され解決される筈である。美しい品性の人だけが美しい戀愛を経験する機會を持つ。

哀公問社於宰我。宰我对曰。夏后氏以松。殷人以柏。周人以栗。曰使民戰栗。子聞之曰成事不說。遂事不諫。既往不咎。

「哀公社を宰我に向ふ。宰我对へて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。曰く民をして戰栗せしむと。子之を聞て曰く、成事は説かず遂事は諫めず既往は咎めず。」

大意。哀公が社（始めて國を建て土地の神を祠る社）の前に植ゑられた樹木の種類を宰我に問うたので、宰我は答へて「夏の時には松を植ゑ、殷の時には柏を植ゑ、周の時には栗を植ゑた。栗は慄と通じ社前で罪人を刑する場合慄然と懼れしむる目的であつた」と説明した。孔子は之を聞いて、ひどく宰我の失言を責められた。——宰我は門人。孔子より少きこと三十歳。

思索。王道は愛民を以て主眼とする。宰我が人民を威嚇するやうな説をなしたのは、他日或は哀公が桀紂の如き暴政を施す導火線とならぬとも限らない。故に一言の過失も償ふべからざる大問題であるとして、いたく之を咎められたのである。「遂事は諫めず既往は咎めず」とは叱責することの極めて切なる意味を強調された言葉である。

子曰管仲之器小哉。或人曰管仲儉乎。曰管氏有三歸。官事不攝焉得儉。然則管仲知禮乎。曰邦君樹塞門。管氏亦樹塞門。邦君爲二兩君之好。有反坫。管氏亦有反坫。管氏而知禮孰不知禮。

「子曰く管仲の器小なるかな。或人曰く管仲儉なりや。曰く管氏三歸あり官の事は攝ねず。焉んぞ儉を得ん。然らば則ち管仲禮を知るか。曰く邦君樹して門を塞ぐ。管氏亦樹して門を塞ぐ。邦君兩君の好みをなすに反坫あり、管氏亦反坫あり。管氏にして禮を知らば孰か禮を知らざらん。」

大意。孔子が管仲の政策を「小細工」と評した。或人が問うた「管仲は儉約でありますか」孔子「管仲は家に三歸臺（諸侯の制に僭して）を置き家臣の官職も一人一官であつた。どうして儉約といはれよう」それでは管仲は禮法に通じてをりましたか」孔子「諸侯が家に屏を設ければ管仲も亦それを設け、諸侯が兩君の會合に反坫（台の名）を備へれば、管仲も亦それを備へた。もし管仲が禮に通ずるとすれば禮に通ぜぬものは一人も無いであらう。」

思索。管仲は齊の桓公の大臣として天下に覇を成した人物である。戰亂爭覇の當時にあつては管仲は理想的豪傑として崇拜されてゐた。孔子が管仲を「器小なり」と評せられたのは、彼が桓公に相として天下に王道を行ふこと容易なる立場にありながら、徒らに富強經濟の政策に没頭して、聖賢を以て期する大信念の無かつたのを惜まれたためである。

或人は「小細工」とは物事の處分の細密なことと解して「管仲は儉約か」と質問した。又孔子が「三歸臺を置き、一人一管であつた」といはれたのを聞いて、管仲が禮法制度に通じて、正しくそれを守るであらうかと考へた。これに對する孔子の答は「管仲は儉約でなく亦禮を知らない」といふのであつた。一世翹望の理想の人豪が小細工で驕奢で禮法を知らぬとあつては相當の酷評といはなければならぬ。孔子は政治家としての管仲の手腕功績を、ある程度まで高く評價されてゐる一面に於て、その思想人格の缺陷を遠慮なく指摘することを忘れなかつた。

子語ニ魯大師樂ニ曰樂其可レ知也。始作翁如也。從レ之純如也。皦如也。釋如也以成。

「子魯の大師に樂を語つて曰く、樂はそれ知るべきなり、始め作すに翁如たり、之を從つて純如たり、皦如たり、釋如たり以て成る。」

大意。孔子が魯の大師（樂官の長）に音樂の節律を語られた。音樂は初めに五音が集つて起り、それが各よく調和して、しかも各音の音色が分明であり、終りに餘韻が綿々として連続する。かくして一つの節律は成立つのである。

思索。五音は宮、商、角、徵、羽の五つであつて、五色、五味、五行、五常、五官、等と相對する自然の原音と見られる。五音が集り發して融合調和し、其間に各音の個性を失はず、餘韻連続として一つの節奏を終るのは、あたかも、自然の春夏秋冬、人生の少、青、壯、老より、天地萬物、内

外一切の現象の變化、消長、生成に一貫合流すべき原則であると考へてよい。

六六

儀封人請見曰君子之至於斯也。吾未嘗不_レ得見也。從者見_レ之。出曰二三子何患_レ於喪_ニ乎。天下之無_レ道也久矣。天將_ニ以_レ夫子_一爲_レ木鐸_上。

「儀の封人見えんことを請うて曰く、君子の斯に至るや、吾未だ嘗て見ゆることを得ずんばあらざるなり。從者之に見えしむ。出て曰く、二三子何ぞ喪へるを患へんや、天下の道無きこと久し。天將に夫子を以て木鐸となさんとす。」

大意。儀の封人（國境を守る役人）が孔子に面會を願うて「君子が此地に來られた場合、私はいつも面會を許されてゐましたから」と申出した。從者の紹介を得て孔子に面會した後、封人が弟子等に向うていうた「諸君は先生が地位を失うて流浪されるのを慨くには及びません。天下は久しく混亂して道義の標準が失はれてゐます。天は將に先生を以て萬世道德の先覺者たらしめんとするのであります。」

思索。君子——世の指導者、先覺者は、たとへば磁石である。磁石はすべての鐵を吸ひつける。それは鐵がすべて磁石の性質をもつてゐるからである。磁石に吸ひつけられた鐵は或は永久に磁石となり、或は一時的に磁石となる。鐵のみならず、萬物が悉く磁性を帯びてゐる。地球は一大磁石である。人間は皆徳性をそなへてゐる道を求め善を好むの心は人間の本性である。君子は到る處、人の善性を引き出し人々を自覺に導びく。

子謂_レ韶。盡_レ美矣。又盡_レ善也。謂_レ武盡_レ美矣。未_レ盡_レ善也。

「子韶をいふ。美を盡せり。又善を盡せり。武を謂ふ。美を盡せり。未だ善を盡さざるなり。」

大意。孔子は韶（舜の音樂）を評して、美と善とを盡してをるといひ、武（周の武王の音樂）を評して美を盡してをるが、未だ善を盡さないと言はれた。

思索。音樂は其徳を表はし、其時代をあらはす。舜は堯の譲りを受けて平和の間に天下を治め、武王は殷紂を討つて天下を統一した。故にこの兩者の音樂について異つた評價をされたものであらう。

美と善とは外觀に於ては同じでないけれど、其本質に於ては合致すべきものである。高尚な藝術は必美しい性格品性から生れて來る。美の至上なるものは感覺的なものでなく、精神的なところにある。それは至上善の境地と合一する。美も善も無限の向上であるが、その間に或る完成された美と

六七

善とは存在する。母の愛は完成された善の一つであり、山水花鳥の美は完成された美の一つと見られる。けれども、人間が内心の要求として義務責任の感を伴ふ目的の對象は善であつて、美は副次的の目標——善の一面であると考へるが妥當である。善を求めて道徳的に向上すれば、利害觀念や低級な慾情から離れて内外一切の生活がおのづから美化されるであらう。

子曰居^テ上^ニ不^レ寛^{ナラ}。爲^{シテ}禮^ヲ不^レ敬^セ。臨^{シテ}喪^ニ不^レ哀^{シマ}。吾^ヲ以^テ觀^レ之^ヲ哉。

「子曰く上に居て寛ならず、禮を爲して敬せず、喪に臨んで哀しまずんば、吾何を以て之を觀んや。」

大意。人の上に立つて寛大の徳がなく、禮拜を行つて心に尊敬の念がなく、葬式の場所にあつて、哀しみの情を持たないやうなものは立派な人間とは見られない。

思索。寛大の徳は克己から生れる。己れに克つものは一切に勝つ。私慾を制御する人は人を統御することができる。禮拜は敬虔の念の表れでなければならぬ。形式に流れて精神を失へば虚偽になる。虚偽が源となつて、一切の罪惡は起つて来る。葬式も外觀の飾りに没頭すれば、哀しみの情を失ふものである。人の哀しみを中心哀しむ純情は最も貴い。

里 仁 第 四

子曰里^ハ仁^ニ爲^シ美^{シト}。擇^シ不^レ處^レ仁^ニ。焉^ソ得^レ知^ナ。

「子曰く里は仁を美しとなす。擇んで仁に處らざんば焉んぞ知を得ん。」

大意。純良な風俗の地に住まなければ平和な生活は得られない。仁の理想をしつかりと持つてゐなければ、正しい思想——智慧を得ることはできない。

思索。人間は安穩な生活を欲する。それ故に混亂した社會を喜んだり、近隣に暴漢の居るところを好んで住むものはない。然るに人が精神の平和を願ひながら、仁の理想を信行しなかつたならばそれは無智といはねばならぬ。形に捕はれ枝葉に拘泥して根本の問題を忘れるところに人生の錯覺が生ずる。仁は究極に於ては道義世界の建設であり、人類、平和の實現であり、従つて國にあつては國に行はれ、郷にあつては郷に行はれ、家にあつては、家に行はれる實踐的理念である。それは一言で言へば心と心の合一であり、魂と魂との融合である。紙と紙とを合一するに糊を要し、板と板とを合一するに釘を要し、石と石とを合一するにセメントを要するが如く、人間の相互信賴、精神

の合一には經典の媒介が必要である。古聖の教典に對する信行によつてのみ、二つの魂は眞に一體となることが出来る。此の根本を忘れて組織や制度の末節に汲々として國家の使命を説き世界政策を論ずるは無意味である。

子曰不仁者不可^{カラ}以^テ久^{シク}處^ル約^ニ。不可^{カラ}以^テ長^ク處^ル樂^ニ。仁者安^レ仁知者利^レ仁。

「子曰く不仁者は以て久しく約に處るべからず、以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す。」

大意。不仁者——經典を信行せぬもの——は逆境にあれば自暴自棄になり、順境にあれば享樂に耽り、いづれにしても、安心平和な生活はできない。仁者は經典を信じて心の平靜を保ち、經典を行じて順逆二つながら幸福な生活を打建てゆく。

思索。船に乗れば海を渡ることができる。飛行機に乗れば大空を旅することができる。ラヂオを設ければ、東京とベルリンでつながりながら話ができる。電燈を灯せば闇の夜も明るく、時計を見れば時間が正確にわかり、衡りを用ひ、モノサシを用ひれば、重量や長さを確實に知ることができる。聖賢の教典は人間を眞の幸福と自由とに導びく唯一のモノサシでありトモシ火である。

子曰唯仁者能好^シ人能惡^シ人。

「子曰く唯だ仁者はよく人を好し、よく人を惡む。」

大意。仁者は感情が正しく強く働らく。故に正しいものを好愛し不正なものを憎惡する。

思索。仁者は人類を熱愛するがゆゑに人類の敵を惡まずにはをられない。不仁者は常に氣まぐれの感情を以て人を好み憎むからして、不義を愛したり、正義を惡んだりして、全く出鱈目である。

子曰苟志^{クモセバ}於^ニ仁^ニ矣無^シ惡^ム。

「子曰く苟も仁に志せば、惡まるゝことなし。」

大意。仁に志して修養すれば何處にあつても、人に惡まれ排斥されることはない。

思索。愛は人間の最も深い要求であるが、愛が秩序を失つて脱線する場合は、忽ち怨みとなり、憎みとなり争ひとなる。故に愛の本末順序を正しくして之を深め強めていくことが肝要である。仁は最も正しい秩序に於ける愛のはたきであつて、聖賢の道は、これを教へるものである。故に聖賢の道に志すものは必ずよく人を愛し、人から愛される。

子曰富與_レ貴是人之所_レ欲也。不_レ以_二其道_一得_レ之不_レ處也。貧與_レ賤是人之所_レ惡也。不_レ以_二其道_一得_レ之不_レ去也。君子去_レ仁惡乎成_レ名。君子無_二終_一食之間違_レ仁。造次必於_レ是。顛沛必於_レ是。

「子曰く富と貴きとは、これ人の欲するところなり。其道を以てせざれば、之を得るも處らざるなり。貧と賤とはこれ人の惡むところなり。其道を以てせざれば之を得るも去らざるなり。君子は仁を去つて、いづくにか名を成さん。君子は食を終るの間も仁に違ふことなく、造次にも必こゝに於てし、顛沛にも必こゝに於てす。」

大意。富貴は人情の願ふところであり、貧賤は人情の嫌ふところである。けれども君子は正道を外にして富貴を求めることなく、正道であれば、どんな貧賤の中にも安んじてゐるのである。君子といふ名は仁を求めることの純一なるを意味してゐる。君子は食事の間にも仁に違はぬやうに心がけ匆卒の間にも、急難の場合にも仁を求めることを忘れない。

思索。人間は身長や體重では甲が乙に二倍する場合は極めて例外に過ぎぬけれど、智能の天分に於ては、十倍、百倍、千萬倍する場合が少なくない。又向上心の強いものは權勢慾も強く、知識慾の盛なもの貯蓄慾も盛なものである。従つて人間の社會生活に貧富貴賤の差別の出来ることは一面

に於て自然の現象であると思ふべきではない。天分の勝れたものが正しい行爲によつて富を貯へ貴き地位に立つことは、協同生活としての社會を害ふものでなく却つて之を幸福に導く力となるものである。しかし向上の道程にある人間社會には多くの缺陷があつて、往々賢者が貧賤で一生を終り不賢者が富貴權勢の位置にあることを免れない。これは有形無形の複雑な因果關係に於ける運命でもある。故に君子は富貴を惡み貧賤を欲するのでないが、常に富貴に遠ざかり、貧賤に安んずる態度を正しとしてゐる。貧富貴賤に超越することは一切の環境と運命に打勝つことである。仁を求めることは、因果と運命の束縛から自己を解放することである。

子曰我未_レ是_下好_レ仁者惡_二不仁_一者好_レ仁者無_二以_レ尙_レ之_一。惡_二不仁_一者其爲_レ仁矣。不_レ使_三不仁者_一加_二乎其身_一。有_三能_一一日用_二其力於仁_一矣乎。我未_レ見_二力不足者_一。蓋有_レ之矣。我未_レ之見_一也。

「子曰く我未だ仁を好むもの、不仁を惡むものを見ず。仁を好むものは以て之に尙ふるなし。不仁を惡むものはそれ仁をなす。不仁者をして其身に尙へしめず。よく一日も其力を仁に用ふることあらんや。我未だ力足らざるものを見ず。蓋しこれあらん。吾未だこれを見ざるなり。」

大意。仁を好み、不仁を惡むものは、中々見られない。仁を好むものは最上の人である。不仁を惡むものは自然に仁を行ひ仁を好むやうになる。人々は果して一日でも、自分の力を仁に集中してゐるかどうか。それが問題である。孔子は「仁を行ふ力の足らぬものを見たことがない。或はあるかも知れぬが、自分はまだそれを見ない」といはれてゐる。

思索。仁は善である。善を好めば、すべての善は皆我に集り、すべての善人は皆我を支持するであらう。人間これより強いものはなく、これより美しいものはない。不善を惡むものは必ず善を爲し善を好むやうになる。人間は善を見ては行ふべきを知り、不善を見ては之を避け之を惡むことを知つてゐる。けれども同時に、不善には近づき易く、善には遠ざかり易いのが人情の一面である。故に善の行ふべきを知りながら、それに徹底せず、自己の全力を之に集中することができない。この一日に於て、眞に善を行ひ仁を求むるに徹したならば、遂に仁を好むに至るであらう。不仁はたとへば病氣である。病氣は療養に力をつくせば必ず癒る。しかし病氣の中には不治の病もあるが、不仁には力を盡して仁に至るを得ないといふ場合がない。病氣そのものに治癒の力が内在するやうに、不仁そのものには仁を爲す能力が存在してゐる。故に孔子は仁を爲す力の足らぬものを見ないといはれたのである。不仁不善を全く自覺しない人間も極めて稀にはあるが、それは白痴か狂人かであつ

て、人間とは見られない。

子曰人之過也各於其黨。觀過斯知仁矣。

「子曰く人の過ちや各其黨に於てす。過ちを觀て斯に仁を知る。」

大意。人の過ちは皆親戚や知友の爲めに生ずるものである。過ちを見れば、人間の本性の愛がわかる。

思索。若い母が生後六ヶ月の女兒を懐いて百貨店へ買物に行つた。そして見知らぬ一婦人の甘言に欺かれて女兒を盗み去られ、數十日搜索したが遂に知れない。煩問の結果、五歳と三歳の子供を遺し夫を置いて自殺した。母であり妻である責任を忘れて死を急いだのは、大きな過ちであるが、そこには最も偉大なる人間愛のひらめきが見られる。理性で打勝つことのできない人情の流れを導いて、身心を傷ふやうな過ちに陥らしめぬためには、どうしても教典の信行が肝要である。

子曰朝聞道夕死可矣。

「子曰く朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。」

大意。この一日に永遠生命を現はすところに道の極がある。この自覺に達すれば、生死を超越することができる。

思索。死を恐れ、死を悲しむは人情の自然であるが、また、恐れず、あわてず、従容として死に就くことは人間の願ひである。人間は卑怯未練な死に方を醜しとして、平静な死に方、悲壯な死に方、美しい死に方を尊敬する。生きたいのは本能である。それは最も強い本能であつて、何の理由もない。けれども單に生きたいといふ本能で生きてゐるとすれば、動物と同じである。人間は時としては、生を捨て、死を擇ぶ。「天皇陛下萬歳」を叫んで戦死する。いくら生きようと願つても、生には限りがある。百年三萬六千日。死は刻々と迫つて来る。死は恐ろしいけれど、逃れることはできない。死は悲しいけれど、避けられない事實である。こゝに於て人間は死を超越する方法を創造した。生きたいといふ本能の中から「爲さねばならぬ」といふ目的を自覺して理想を築きあげた。これが即ち「道」である。つきつめて觀れば、生も自然であり、死も自然である、人間の作爲でない。死を悲しむも自然であり、死を超越するも自然である。自然に従ひ自然に徹底せしめようとするのが人間の道であり聖賢の教へである。

辭世の歌

貝原益軒

來し方は一夜ばかりの心ちして、八十路あまりの夢を見しかな

平田篤胤

思ふこと一つも神につとめ終へず、今日やまかるかあたらこの世を

乃木希典

うつし世を神去りまし、大君のみあと慕ひて我は行くなり

久保田俊彦

隣室にふみよむ子らの聲聞けば心に沁みて生きたかりけり

子曰士志^{シテ}於道^ニ而恥^{ツル}惡衣惡食^ヲ者未^ダ足^ラ與議^ス也。

「子曰く士、道に志して惡衣惡食を恥づるものは、未だ與に議るに足らざるなり。」

大意。指導者として道に志しながら、惡衣惡食を恥づるやうな人間は、共に語るに足らない。

思索。高遠の理想を追ふものは、脚下の一步を忽がせにしてはならぬ。求道精進の人は惡衣惡食を恥ぢてはならない。自ら世の指導を以て任ずる人であつて、省みて其日常生活に惡衣惡食を恥ぢないものが、どれだけあるか。美衣美食を誇りとする物質文明の社會に立つて、超然惡衣惡食に甘ん

するだけの操守があつて、始めて求道の士といふことができる。

七八

子曰君子之於天下也。無適無莫也。義之與比。

「子曰く君子の天下に於けるや、適もなく莫もなし、義にこれとみに比ぶ。」

大意。君子の此世に處していく態度は一つの型に束縛されることがなく、またすべての束縛から遁れようとするのではない。たゞ利己を去つて正義に従ふ一筋道を進んで行く。

思索。人の性格はそれ／＼一方に偏した傾向を持つてゐる。これがために一つの思想、一つの主義といふやうな型に捕はれ、或は全く型破りとなつて、社會から超然として自分一人の城廓に立籠るやうになる。君子はこの二つの極端に走ることがなく、實生活の中にあつて、公正な標準をもつて利己を克服して「義」の一路に向ひ悠々と前進して惰らない。

子曰君子懷德。小人懷土。君子懷刑。小人懷惠。

「子曰く君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ。君子は刑を懐ひ、小人は恵を懐ふ。」

大意。君子の慕ひ向ふところは道德と禮法であり、小人の慕ひ向ふところは財産と恩恵である。

思索。大局に立ち根本を養ふものは君子であり、小事を目的とし枝葉に没頭するものは小人である。根幹を養へば枝葉はおのづから繁茂する。民心が道德に向へば財政、經濟の問題は自然に解決される。「徳」は愛であり「刑」は敬である。「土」は資源であり「恵」は物貨である。愛敬は國民の融和協力となり融和協力は資源の開発となつて物貨を豊富ならしめる。豊富な物貨が愛敬の念を以て公正に分配され、消費されることによつて國民の融和協力は一層強化せられ、愛敬の情操は更に高度に達する。貨幣は物貨交換の仲介者である。故に貨幣が道義的に使用される時、物貨は最も公正に分配され、消費される。拜金の迷信を打破して道義の正信を打建ることが、現代人の急務である。

子曰放於利而行多怨。

「子曰く利によりて行へば怨み多し。」

大意。利益のみを目的として行ふ仕事の結果は、怨みとなる場合が多い。

思索。人間から利己の觀念を除くことはできない。けれども利己の觀念は、それが直ちに自他共に利するの觀念となり、己れを損して人を利するの觀念となり、己れを犠牲にして社會を益するの理想となつて發展する性質をもつてゐる、もしそれが利己だけに止まつたならば、必そこに怨みが生

七九

じ争ひが起つて己れの利を失ふ結果に終らざるを得ない。國民民福を圖るところまで自利の念を向上せしめて行くことによつてのみ、利己意識は満足される。これ即ち義であり公正である。義を以て事に當れば、たとへ人に物質的損失を與へても怨まれることがない。

子曰能以禮讓爲國乎。何有。不能以禮讓爲國如禮何。

「子曰く能く禮讓を以て國を爲めば何かあらん。禮讓を以て國を爲むる能はずんば、禮をいかん。」

大意。爲政者が禮儀謙讓の實徳によつて國を治めたならば、何の譯もないことである。もし禮讓の實行が伴はなかつたならば、禮法制度が、いかに整つても、役に立たないであらう。

思索。禮讓を行ひ禮讓の風を興すことが政治の要務である。單に禮拜の儀式だけで謙讓の精神を養ふことを知らない政治家や、財政經濟だけを以て政治と心得る政治家は必ず失敗するであらう。

子曰不患無位。患所以立。不患莫己知。求爲可知也。

「子曰く位無きを患へず、立たん所以を患へよ己れの知らるゝなきを患へず、知らるべきを爲すことを求めよ。」
大意。地位の無いことを憂へずして地位に立つべき才徳の無いことを患へとせよ。名聲の世に知ら

れないことを憂へずして、世に知らるべき功業の立たないことを患ひとせよ。

思索。其位置を與へられれば大概の人間なら、其職を務めることができる。大臣も參議も、さう、むづかしいことは無い。今日では縣知事が務められる人物であつたら誰でも大臣になれる。町村長が完全に務められる人物なら縣知事の職が務められるであらう。けれども、ほんとうに町村民の信頼の的となつて、町村長の任を全うすことのできるのは容易でない。況や一國民衆の信望を負うて國務大臣となり、輔弼の使命を果し得る人物は中々得られない。大臣になつたら第一等の大臣、職工になつたら第一等の職工。農夫になつたら第一等の農夫に目標を置くべきである。新聞や雜誌の上の有名は金で買つた名であり、金に買はれた名である。斯やうな名は流れに浮ぶ泡の如く忽ち消えて跡方も無い。眞の名聲、不朽の名譽は、その人間の至誠と徳行とに基づく功業を外にして求められるものでない。

子曰參乎吾道一以貫之。曾子曰唯。子出門人問曰何謂也。曾子曰夫子之道忠恕而已矣。

「子曰く參よ。吾道一以て之を貫く。曾子曰く唯、子出づ。門人問うて曰く何の謂ぞや。曾子曰く夫子の道は忠恕

大意。孔子が曾子に向ひ「吾道は一を以て之を貫く」と語られた。曾子は直に其旨を了して「唯（よ）く解りました」と答へた。孔子の出られた後で門人が曾子に、その意味を問うたので、曾子は答へた「先生の道は忠恕一貫に外ならない。」と

思索。「忠」は心を盡し力を盡して人の爲めに謀り且つ働らくことであり、「恕」は自分の情を省みて人の情を察し、人の立場に身を置いて人をゆるし思ひやることである。「忠」の徹底は無限の深さをもつてをり、「恕」の擴充は無限の廣さをもつてゐる。「忠恕」を以て一貫し徹底していけば、人と我との隔てがなくなり、物と我との隔てがなくなり、即ち人我融合、萬物一體の境に達する。これ仁の至り、聖の功である。「忠」は親切であり「恕」は同情である。親切と同情は平易簡單の實徳であつて、常識で誰にもわかる日常の善行であるが、安價な親切や同情は却つて自他を損ふことになる恐れがある。同情に溺れ、老婆親切に捕はれた結果が不幸となり禍を招くことは少なくない。故に忠——親切と、恕——同情とは、その内容として透徹した智見——洗練された理性が肝要である。「忠恕」の推進力として、ぜひとも聖經論語の精讀研究が不斷に続けられなければならない。

子曰君子ハ喻ニ於ニ義ニ。小人ハ喻ニ於ニ利ニ。

「子曰く君子は義に喻り、小人は利に喻る。」

大意。君子は道義に對して敏感であり、小人は營利に對して敏感である。

思索。道義の理想を以て精進するものは、不斷に道義の標準に照して行爲するから、義に精しくなり、理想がなくて利害の觀念だけで生活するものは、事毎に利益を漁つて利己意識が鋭くなる。利害の觀念は、生死の問題と連なるものである。故に人間が全く利害觀念を超越することはできない。たゞ利を見た瞬間に義を思ひ、義に向つて進むのが君子である。義とは利を人と共にし、樂しみを人と共にし、更に人の利を先にし人の樂しみを先にし、己れを捨て人に從ひ、國家社會へ身を捧げるはたらきである。

子曰見テ賢ヲ思ヒ。見テ不レ賢ニ而モ内ニ自省ス也。

「子曰く賢を見ては賢しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みよ。」

大意。自分より賢れた人を見たら、自分もその人のやうにならんと思ひ、自分より劣つた人を見た

ら、自分の行ひを反省して缺點を改めるべきである。

思索。人の功をねたみ、人の善を誹り、人の長所を傷つけやうとするは人間の弱點であり、人の愚を侮り、人の過ちをあばき、人の短所を嘲けるは人間の劣情である。深く省み、強く撻つて人の善を成し、人の美を顯はす高尚な情操を養はなければならぬ。

子曰事^{ヘテハ}父母^ニ幾^{セヨ}諫^ヲ。見^{テハ}志^ノ不^レ從^ハ。又^{シテ}敬^{シテ}不^レ違^ハ。勞^{シテ}而^{シテ}不^レ怨^ム。

「子曰く父母に事へては幾諫せよ。志の從はざるを見ては又敬して違はず、勞して怨みず。」

大意。父母に大なる過ちがあつたならば、心を落ちつけ、言葉を靜かにして諫めるがよい。もし父母が諫めを納れられぬ場合にも、尊敬してさからはず、よく働らいて怨むやうなことがあつてはならぬ。

思索。親心の愛は神の愛である。此意味に於ては、子が父母に對しては絶対服從の覺悟を以て事へて間違ひない。批評的に父母を眺めて小過を非難する如きことは斷じて子たるの道でない。けれども萬一父母が大過を侵し、社會から非難攻撃されるやうな事態に當つて、子が之に默從するは、もとより忍びざるところである。たゞ之を諫めるに聲荒らげて反抗するは却つて父母の情を激し親子

の情を害ふのみで効果を收めることはできない。どこまでも父母の過ち即ち我過ちと心得、父子一體の信念に立つて自己の行爲を以て父母の過ちを償ふ覺悟を持つことが肝要である。

子曰父母在不^{セバ}遠^ク遊^ハ。遊^ハ必^ズ有^レ方^{ナリ}。

「子曰く父母在せば遠く遊ばず、遊ぶこと必ず方あり。」

大意。父母在世中は遠方に旅行して父母に憂ひを抱かせぬやうにし、旅行する場合には、行先を明かにして父母の心を安んずるやう心がけよ。

思索。子が父母の心を心とし父母と一體の境に達するは孝の至り、人道の最高處というてよい。父母の心境に體達するは易きに似て難事である。けれども、常住坐臥の間に人間最大の慈愛に觸れ、之を目標として努力精進する孝行の道は、萬人自然の修行道として一日も廢すべからざるは言ふまでもない。

子曰三年無^{キテ}改^{ムル}於^テ父^ノ之^ノ道^{ナリ}。可^シ謂^フ孝^ト矣^ト。

「子曰く三年父の道を改むるなきを孝と謂ふべし。」

大意。父の亡き後、永く父の行ひ來つた善き家風を改めないものは孝行である。

思索。孝は生前の奉養のみでなく、死後に於て父母の志を繼ぎ道を行ふことによつて成し遂げられるのである。功利を離れた純情は死後に對する行ひによつて光りを放つ。

子曰父母之年不可不知也。一則以喜。一則以懼。

「子曰く父母の年は知らざるべからざるなり。一は則ち以て喜び一は則ち以て懼る。」

大意。子は老いてゆく父母の年を記憶してゐて、一にはその高齢を喜び、一つにはその終りに近づくを懼れるやうにありたいものである。

思索。父母が長命して高齢に達するやうになれば、子は次第々々に親の存在を意識する心が薄くなり、遂には、いつとなく父母の年をも忘れがちになる。斯様な際に、よく父母の年を知つてゐて、しかも一には喜び一には懼れるといふ位に眞情を働かすのが子たるの道である。

子曰古者言之不出恥躬之不逮也。

「子曰く古は言を出さざりしは躬の逮ばざるを恥ぢてなり。」

大意。古人が議論をしなかつたのは、實行の及ばないことを恥ぢたからである。

思索。「天下の大亂は虚文勝つて實行衰ふるによる」と王陽明がいうてゐる。「實行」とは聖賢の教に對する信行であり「虚文」とは訓詁、註釋、巧文、麗辭であり、更にその生活に擴大された虚禮、虚飾、奢侈を意味する。所謂、科學の行き詰り、文明の没落とはこれである。これ皆聖賢教典の信行を失うたところにその根本原因がある。

子曰以約失之者鮮矣。

「子曰く約を以て之を失ふものは鮮し。」

大意。節約緊張をもつて失敗するものはない。

思索。危険は得意の中に發生し禍は驕慢の心から起つて來る。易に「謙は貴くして光りあり、卑くして踰ゆべからず。君子の終りなり」とある語、大いに味ふべきである。

子曰君子欲讷於言而敏於行

「子曰く君子は言に讷にして行に敏ならんことを欲す。」

大意。君子は言語鈍重にして實行敏捷ならんことを願つてゐる。

思索。言は過ぎ易く行は及ばないことが多い。故に君子は言葉を謹しんで實行を勵むやうにする。教へを説き道を述べるは實行の大なるものであるから、君子は言語そのものを輕んずるわけではない。たゞ言の巧みなものは必ず言葉を飾つて實行を忽がせにするから、修道の關門としては、言葉をつゝしむが最も肝要である。

子曰徳不^{ナラ}レ孤^{ゾリ}。必有^{ゾリ}レ隣。

「子曰く徳孤ならず必ず隣あり。」

大意。徳行は孤立に陥るものでなく、必ず人の共鳴があり、天の祐けがある。

思索。正しいものは常に孤立の地位におかれるやうに見えるけれど、それは、一時の現れであつて、人間の本心は正しいものに引きつけられ、正しいものゝ味方になる。それは人が美味美食に引きつけられると同じである。人類は正しいものゝ成長を希つて止まない。故に天は必ず徳行に味方をす。正義には必ず天祐が伴ふといふ信念を持つことが貴い。

子游曰事^{ヘテ}レ君^ニ數^シバスレバ^ニメラル[○]。朋友^ニ數^スレバ^ニニゼラル[○]。

大意。君に事へて屢々諫めれば辱めを受け、朋友と交つて屢々忠告すれば却つて疎んぜられるやうになる。

思索。君を諫めることは忠であり、朋友に忠告することは信であるが、その間に眞情と謙遜と禮儀とを失ひ、單に口舌の形式に流れたならば、相互の感情を傷ふのみで効果はない。「親しき仲には垣。」君に信任され、朋友と親密であれば、更に一層禮儀を重んずることが大切である。

公治長第五

子謂ニ公治長ニ可レ妻也。雖レ在ニ縲紲之中ニ非ニ其罪也。以テ其子ヲ妻レ之。子謂ニ南容ニ邦有レ道不レ廢。邦無レ道免ニ於刑戮ニ以ニ其兄之子ニ妻レ之。

「子公治長を謂ふ。妻すべきなり。縲紲の中にありと雖も其罪にあらざるなり。と其子を以て之に妻す。子南容を謂ふ。邦道あれば廢られず、邦道無ければ刑戮を免れんと。其兄の子を以て之に妻す。」

大意。孔子は門人公治長を評して「彼は獄中にあるが自分の罪ではない」と言はれ其娘を娶せた。又門人南容を評して「有道の時代には用ひられ無道の時代には刑罰を免れる」といはれ其兄の娘を以て之に娶せた。

思索。自分の娘のために良婿を選ぶは親心の切なる思ひである。孔子が獄中にある青年に娘を妻せたのは、非人情に似てをるが、子の幸福を願ふ心は聖人も人と異らない。孔子の娘が公治長を理解し、父の心を知つてゐた結果が此の結婚となつたのはいふまでもない。孔子の家庭教育と結婚觀とがこゝに見られる。

公治長は熱血兒であり、慷慨家であつた。故に自己の犯罪でなくて牢獄につながれる身となつた。南容は温厚明敏な人物であつた。彼は平和な社會には地位を得て活躍し混亂した世に處しては隠れて一身を潔く保つた。此二人の人物には各長短があつて、優劣を斷定しがたい。孔子が公治長に自分の子を妻せ、南容に兄の子を妻せたのは、年齢性質等の點を考慮されたものと思はれる。

子謂ニ子賤ニ君子哉若人。魯無ニ君子者。斯焉取レ斯。

「子子賤を謂ふ。君子なるかな若人の如き人。魯に君子者なくんば、これいづくんぞ斯を取らん。」

大意。孔子が弟子子賤を賞めていはれた。「彼は君子と稱すべき人物である。しかし、もしも魯に立派な先輩が無かつたならば、彼はどこに斯の道を求めることができたであらう」
思索。郷國に偉大な先輩を有することは、雄大なる自然を有するよりも貴い。吉田松陰曰く「正氣を留め得て、山水の色を添へん」と。意味深長である。

子貢問曰賜也何如。子曰女器也。曰何器也曰瑚璉也。

「子貢問うて曰く、賜や何如。子曰く女は器なり。曰く何の器ぞや。曰く瑚璉なり。」

大意。子貢が自分の人物についての批評を孔子に請うた。「私は如何ですか」「汝は器である」「何の器ですか」「瑚璉」。——瑚璉は食物を盛つて宗廟に供へる器——

思索。瑚璉は宗廟の祭器として貴重な器ではあるが、日常實用の器でない。子貢は才識高く貴族的で一見人から尊敬される人間であるが、君子の徳に於てはなほ缺くるところあるを免れない。君子は知識技能に勝れたものでなく、すべての人を包容する仁愛の眞情をもつ人である。

或曰雍也仁而不佞。子曰焉用佞。禦人以口給。屢憎於人。不知其仁。焉用佞。

「或人曰く雍や仁にして佞ならず。子曰く焉んぞ佞を用ひん。人に禦るに口給を以てして屢々人に憎まる。其仁を知らず。焉んぞ佞を用ひん。」

大意。或人が孔子に對ひ「弟子の雍は仁徳はあるが、辯説の才なきは惜しむべきである」というた。孔子がいはるゝに「どうして辯説の必要があらう辯舌を以て人に對すれば屢々人に憎まれるのみである。雍の仁徳は充分とはいへないけれど、辯説の如きはどうでもよいではないか」——雍は字は仲弓孔子の弟子、孔子より少きこと廿九歳。

思索。辯才は外に現れて世俗に貴ばれ、實徳は内に潛んで人に知られることが少ない。或人が「雍

は仁なれども辯才がない」というた言葉はよく世俗の心理を表はすものである。功利虚榮の外観を棄て、眞に内面的價値に醒めるところに君子の道がある。

子使漆彫開仕。對曰吾斯之未能信。子說。

「子漆彫開をして仕へしむ。對へて曰く吾斯をこれ未だ信する能はず。子說ぶ。」

大意。孔子が弟子漆彫開を仕官せしめようとされた。すると、漆彫開は「まだ自分には仕官するだけの自信がありません」と辭退した。孔子はその理想高遠にして謙虚な心もちを悦ばれた。

思索。霸氣と巧名心は青年心理の特徴である。自己の力量を過大に視て地位名聲を求めるに急なのは青年の通性である。漆彫開が孔子に許されて、しかも、なほ、仕官を欲しなかつたところに孔子の悦ばれた意味がある。

子曰道不行。乘桴浮于海。從於我者其由與。子路聞之喜。子曰由也好勇過我。無所取材。

「子曰く道行はれず桴に乗りて海に浮ばん。我に從ふものはそれ由か。子路之を聞いて喜ぶ。子曰く由や勇を好

むこと我に過ぎたり。材を取る所無し。」

大意。孔子が世の非なるを憤り「道が行はれないから、桴に乗つて海外に出かけよう。我に従つて行くものは由(子路)であらう」といはれた。子路は自分一人が孔子に選ばれたので得意であつた。孔子は子路を諷して「由は勇氣では誰も及ばないけれど、桴を作る知識を持ち合せてゐるかどうかと笑はれた。」

思索。「古聖の道、我身にあり」といふ信念を以て此社會を覺醒せんとして東奔西走、席暖かなるの遠なき熱情生活の孔子も、時には狂瀾の回すべからざるを思つて寂寥哀愁の感慨に打たれた。「桴にのりて海に浮ばん」の嘆息が斯くしく漏された。孔子は滿身に漲る子路の勇氣を頼もしく思はれた。同時に勇氣に富むものゝ智謀に缺けてゐる矛盾を惜んだ。又そうした矛盾に充たされた人間生活が憐れでもあり、それが面白くも感ぜられた。孔子は無邪氣な微笑をされた。

孟武伯問子路仁乎。子曰不知也。又問。子曰由也千乘之國可使治其賦也。不知其仁也。求也何如。子曰求也千室之邑百乘之家可使爲之宰也。不知其仁也。赤

也何如。子曰赤也東帶立於朝。可使與賓客言也。不知其仁也。

「孟武伯問ふ。子路仁なりや。子曰く知らざるなり。又問ふ。子曰く由や千乘の國其賦を治めしむべし。其仁を知らざるなり。求や何如。子曰く求や千室の邑百乘の家之が宰たらしむべし。其仁を知らざるなり。赤や何如。子曰く赤や東帶して朝に立つて賓客と言はしむべし。其仁を知らざるなり。」

大意。孟武伯が子路、冉有、公西赤の三人の門人の仁德について質問したので、孔子は答へられた。「子路は諸侯の國の軍隊を統率する力量がある。冉有は公卿の領土の長官となる才能がある。公西赤は朝廷に立つて外國の使臣と應對する器識がある。けれども三人の者の仁德については、まだ之を許すことはできない。」

思索。一國の軍隊を統率する力量があつても、それだけで仁德を許すことはできない。一國の内政を處理する器量があつても、それだけで仁德を許すことはできない。一國の外交を司る才幹があつても、それだけで仁德を許すことはできない。仁はさうした才能、知識、手腕といふやうな標準を離れた人間性の奥底に根ざすところの誠實、眞情、慈愛、敬虔、信念の渾然融合された人格のはたらきそのものをいふのである。

子謂ニ子貢曰女與レ回也孰愈。對曰賜也何敢望レ回。回也聞レ一以知レ十。賜也聞レ一以知レ二。子曰弗レ如也。吾與ニ女弗レ如也。

「子貢に謂て曰く汝と回と孰れか愈れる。對へて曰く賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞いて以て十を知る。賜や一を聞いて以て二を知る。子曰く如かざるなり、吾汝の如かずとするを與す。」

大意。孔子が子貢に「汝と顔回とどちらが賢つてをるか」と試問された。すると子貢は「私はどうして顔回に及びませう。顔回は一を聞いて十を知るけれど、私は一を聞いて二を知るばかりです。どうして顔回に及びませう」と對へたので、孔子は子貢が自己を知り、又賢友に心服する態度を賞められた。

思索。子貢は貴族的な風格で辯才あり、世人からは孔子よりも偉いと見られてゐた。顔回は黙々として陋巷に起臥し、一見愚者のやうに思はれた。そこで孔子は子貢がどの程度に自己を知り顔回を理解してゐるかを試問された。子貢がよく顔回の偉なるを知り、中心之に推服してゐるのを認めて孔子は満足された。

一を聞いて十を知るは、道を體得した仁者であり、一を聞いて二を知るは道を覺つた知者である。

天に二日なく、眞理に二道はない。一に通じて萬に明かなるは聖賢の道である。斯の道を外にして、多智博識を求める時は、枝葉の千百を知つて、根本中心の一を忘れる結果となつて、遂に人生の意義と價値とを失ふに至る。科學偏重の悲劇がこゝに發生する。

宰予晝寢。子曰朽木不可レ彫也。糞土之牆不可レ朽也。於レ予與何誅。子曰始吾於レ人也。聽ニ其言ニ而信ニ其行。今吾於レ人也。聽ニ其言ニ而觀ニ其行。於レ予與改レ是。

「宰予晝寢ねたり。子曰く朽ちたる木は雕るべからざるなり。糞土の牆は朽るべからざるなり。予に於てか何ぞ誅めん。子曰く始め吾人に於けるや、其言を聽いて其行を信ぜり。今吾人に於けるや、其言を聽いて其行を觀る。予に於てか之を改む。」

大意。門人の宰予がダラシない行爲をした。孔子は之を叱責していふ「朽ちた木には彫刻はできない。泥土は壁に塗ることはできない。宰予の如きは、最早や叱るだけの價値もない」と。更に言葉をつがれていふ「始め私は人の言葉を聞いて其行を信じたけれど、今より後は人の言葉を聞いて其行を觀ることにした。宰予の行動によつて之を改めた。」——宰我は門人。孔子より少きこと三十歳思索。宰我の晝寢は單に睡眠不足のための晝寢でなく、それ以上の脱線であつたであらう。それで

なければ孔子が斯くまでに叱責されるわけではない。言を慎しみ言行一致を貴ぶは聖教の根本である。然るに宰我が辯舌にまかせて言行相反したのを發見されたために、ひどく戒められたのである。けれども宰我はこれが爲めに孔子の門から放逐されたのではなく「言語には宰我子貢」といはれて彼の才を認められたのを見ると、孔子の教育法は一面非常に嚴格なると同時に、一面非常に寛大であつたことが思はれる。

人の言を聞いて、素直に、これを信ずることは、むづかしい。しかし、それだけの大度量を持つことが指導的立場にある人としては必要である。と同時に又人の言を聞いてその行爲を觀察するだけの用意を有することが大切である。この二つは矛盾に似てゐて兩立すべきであらう。修養の過程としては先づ人の言葉を信じ、人の爲に盡し、おのれの誠を充たす工夫を積み重ねばならぬ。我心が至誠なれば、おのづから、人の誠偽が分明になるであらう。人を信じすぎて人に欺かれたのは、己れの徳を傷けないけれど、人を疑うて人の誠意を汲むことのできないのは己れの罪である。

子曰吾未^レ見^レ剛者^一。或對曰申根^ト。子曰根也^{ナリ}。馮得^レ剛^ヲ。

「子曰く吾未だ剛者を見ず。或人對へ曰く申根と。子曰く根や慾なり。馮んぞ剛を得ん。」

大意。孔子が世に剛者無きを嘆じた。すると、或人が「門人の申根は剛者ではありませんか」というたので、孔子は「申根は情慾を節制することができないから、眞の剛者とは申されぬ」と答へられた。

思索。どんな場合でも、自分の主義主張を一貫して枉げないのが剛者である。人間の元氣は情慾のために消耗され、眞の勇氣は克己から生れる。外貌は剛勇に見えても、克己鍛練の足りないものはイザといふ場合に必ず挫折する。平生柔和であつて、寡慾の人がほんとうの剛者である。

子貢曰我不^レ欲^レ人之加^レ諸我^一也。吾亦欲^レ無^レ加^レ諸人^一。子曰賜也非^レ爾所^レ及也。

「子貢曰く我人のこれを我に加ふるを欲せざるや、吾も亦之を人に加ふる無きを欲すと。子曰く賜や爾の及ぶところにあらざるなり。」

大意。子貢が「私は自分から施されて不快だと思ふことは、之を人に對して施さぬやうに致さうと思ひます」というたら、孔子は「それは汝の及ぶところでない」と答へられた。

思索。かつて子貢が「一言にして終身之行ふべきものあるか」と問うた時、孔子は「それ恕か。己れの欲せざるところ、人に施すこと勿れ」と訓へた。即ち、人の心を推しはかり、人の立場に身

を聞いて考へ且つ行ふことは容易な業でない。人間一生かゝつて喘ぎ／＼登るべき山路である。それを子貢が何の苦もなく出来るやうに言うたので、孔子が之を否定されたのである。子貢は才智がすぐれてゐて、眞情に缺くところがあつたので、孔子は特に此點に注意されたのであらう。「おちぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ」順境にあつて才能のある人間は人の眞情を察することができない。ために上すべりの自己陶醉に陥りやすい。何心なく爲したことが人の迷惑になり人に不愉快な感を抱かせる場合もある。しかし、單に人の機嫌を取り人を悦ばすのが道ではない。要は、どこまでも聖學の信念に基づいて人の心もちを察し人の境遇を考へることが大切である。

子貢曰夫子之文章可_レ得_レ而聞_レ也。夫子之言_レ性與_レ天道不可_レ得_レ而聞_レ也。

「子曰く夫子の文章は得て聞くべし。夫子の性と天道とをいへるは得て聞くべからざるなり。」

大意。孔子の説かれる禮儀、制度、音楽、詩、政治、經濟などは、理解することが出来るけれど、人の性と天道とに關することは容易に理解することができない。

思索。孔子は人の性や天道について特に説明されなかつた。けれども、人間の本性が善に向つて進むものであり、善そのものが、人間性の自然の動向に外ならぬ以上、人間性の根源としての天道が

善に福を與へ、これに逆ふところの惡に禍を降すことは必然の定理である。所謂、因果應報といふことは人間の常識の奥に植ゑられた信仰であつて聖賢の道は、この信仰を固くし強くすることに外ならないともいへる。これは幸福を求めるために善を行ふ功利主義とは異つてをるが、天道因果の理を信じなければ人道は成立たない。然るに人々は人の性と天道とについて多くは懷疑的であり、半信半疑である。これは人間が功利主義であり、物質本位であるためである。たゞ聖賢の教典を信じて實徳を積むものゝみが、天道を確信することができる。子貢が「得て聞くべからず」というたのは、この意味であると思ふ。

子路有_レ聞_レ未_レ之能_レ行_レ唯恐_レ有_レ聞_レ

「子路聞くことあり、未だこれを行ふこと能はざれば、たゞ聞くことあらんことを恐る。」

大意。子路は孔子から一つの訓へを聞いて、それを實行しないうちに、更に他の訓へを聞くことを恐れた。

思索。聖賢の訓へを聞いて感激するものは多いが、實行するものは少ない。實行するものは、あつても生涯怠らないものは稀である。聖賢の道は萬人が萬世に亘つて誰でも行ひ得る道である。たゞ

此訓へを實行して一日も倦まず怠らぬところに眞の偉大があるのである。顔回は「一善を得れば拳々服膺して之を失はなかつた」ので孔子の一番弟子と仰がれた。單に教訓を聞いて感心し人に説いて喜ぶのは修養を趣味とする人である。子路を見て大に反省せねばならぬ。

子貢問曰孔文子何以謂之文也。子曰敏而好學不恥下問。是以謂之文也。

「子貢問うて曰く孔文子何を以て之を文と謂ふ。子曰く敏にして學を好み、下問を恥ぢず、是を以て之を文といふなり。」

大意。子貢が「衛の孔文子は何を以て死んだ後で文といふ立派な諡を得たのですか」と問ふと、孔子は「彼は頭が鋭敏で學問を好み、下役のものにも道を問ひ教を受けることを恥ぢなかつた。それ故に「文」の諡を受けたのである」と答へられた。

思索。才の敏なものは、勤勞の性格を缺いてをり、自ら高しとして人の教を受けることを好まないものである。殊に年長であつて年少者に問ひ、上官であつて下僚に教を請ふことは求道の志篤く謙虚寛厚の人間でなければできない。孔子は此意味で孔文子を稱揚された。

子謂子産有君子之道四焉。其行己也恭。其事上也敬。其養民也惠。其使民也義。

「子、子産を謂ふ。君子の道四つあり。其己れを行ふや恭。其上に事ふるや敬。其民を養ふや惠。其民を使ふや義。」

大意。孔子が鄭の大政治家子産を評していふ「彼には君子の道が四つある。己れを持すること恭儉であり、上に事へては敬虔であり、民を養ふには恩恵を施し、民を使ふのは正義を以てした。」

思索。恭は心に侮慢がなく敬は禮儀に合し、惠は節儉にして人に施し、義は正直にして勇斷である。この四徳があれば、政治家の資格は備はる。孔子は鄭に行き子産と交ること兄弟の如くであつた。東亞の再建は子産の再來を望むこと急である。

子曰晏平仲善與人交。久而敬之。

「子曰く晏平仲善く人と交る。久しくして之を敬す。」

大意。齊の宰相晏平仲は人と交際することが久しき年月を経ても、なほ初對面の時のやうな尊敬の態度を失はなかつた。

思案。晏平仲は齊國の總理大臣として、一着の禮服を三十年使用した。そしてその節約した餘裕を以て七十家族の生活を助けた。初對面の態度を以て終始一貫せる精神は萬事に通じて大衆の信賴と支持とを受ける。初一念を反省し、初志を貫徹することが極めて貴とい。

子曰臧文仲居蔡。山節藻稅。何如其知也。

「子曰く臧文仲蔡を居けり。節を山にし、稅に藻す。何如ぞそれ知ならん。」

大意。魯の大臣臧文仲は家に大龜を置き、柱頭を山形に彫刻し、梁上の短柱に水藻を畫いた。これらのことは、皆諸侯や天子の家廟に爲される制度である。臧文仲は諸侯の臣でありながら、斯ういふ僭越を行つてゐる、世人は彼を稱して智者であるといふけれど、それは間違ひだ。

思索。小巧は大智なく多藝は逸技なし。小智小才を働かせて目前の功利に得意なものを世俗は智者として稱讚するけれど、これは却つて大謀をあやまるものである。虚榮と事功に超越して永遠の道義に立脚するのが眞の智慧である。大賢は愚の如し。大石良雄が晝行燈と呼ばれた如きはこれに近い。

子張問曰令尹子文三仕爲令尹無喜色。三已之無愠色。舊令尹之政必以告新令尹。何如。子曰忠矣。曰仁矣乎。曰未可知焉得仁。崔子弑齊君陳文子有馬十乘。棄而違之。至於他邦則曰猶吾大夫崔子也。違之之一邦則又曰猶吾大夫崔子也。違之何如。子曰清矣。曰仁矣乎曰未可知焉得仁。

「子張問うて曰く、令尹子文三たび仕へて令尹となりて善べる色なく、三たび之を已められて愠れる色なし。舊令尹の政必以て新令尹に告ぐ何如。子曰く忠なり。曰く仁なりや。曰く未だ知らず焉んぞ仁を得ん。崔子齊君を弑す。陳文子馬十乘あり、棄てて之を違る。他邦に至れば則ち曰く猶ほ吾大夫崔子の如しと之を違る。一邦に之ければ則ち又曰く猶ほ吾大夫崔子の如しと、之を違る何如。子曰く清し。曰く仁なりや。曰く未だ知らず焉んぞ仁を得ん。」

大意。子張が問うて、楚の令尹(都長)子文は三たび令尹に任官されて喜ぶ顔色がなく、三たび免官されて不平な顔色が無かつた。そして自分が職を去る場合には丁寧な事務の引譲りを行つた。斯様な態度は仁といへますか。孔子は之に答へられた。「それは忠とはいへるけれど、まだ仁とは申されない」子張が又問うた「齊の大臣崔子が其君莊公を弑した、齊の大臣陳文子は馬十乘といふ家祿を捨て、齊を逃げ出した。そしてある一つの國に行つて見れば、亦崔子の如き人間が政治をして居る。

そこを逃げて又他の國に行けば、こゝにも崔子同様の小人が頑張つてゐるので逃げ出してしまふ。斯様な行爲は仁といへますか。」孔子は答へられた。「それは清とはいへるけれど、まだ〳〵仁とは申されない。」

思索。仁は己れを清くし、己れ一人の安心を求めるよりも、人を善くし、人を幸福にする實行を主とする。故に克己節慾は貴ぶけれど、單に消極的に無慾を行するので爲く、積極的に人を愛する熱情から發して私情享樂を忘れる態度を目標とするのである。孔子が三度令尹に任免されて官位の外に超然としてゐた子文を評して「忠」というて「仁」を許されなかつたのは、子文が令尹といふやうな高官に任ぜられたならば、更に一層の熱意を以て職責を果すことを望まれたゝめであらう。陳文子が齊を遁れて他國に走り又其處を遁れて他に行つた態度もこれと同じで、一身を清くし一己を守るに急であつて、身を殺して仁を爲すの積極的行動に出でなかつたところを飽きたらず思はれたものであらう。

季文子三思而後行。子聞之曰再斯可矣。

「季文子三たび思うて而る後に行ふ。子之を聞いて曰く再びせば斯れ可なり。」

大意。魯の大臣季文子は事毎に三度考へて後に行ふことにしてゐた。孔子が之を聞いて、二度考へて正しいと信じたならば直ちに實行するがよいといはれた。

思索。一度考へて其動機が正しく、二度考へて、その方法が正しかつたならば、之を實行に移すべきである。三度も四度も考へ〳〵してをれば、遂には思案だほれになつて實行力が鈍るやうになる。季文子が國政の局に立つて事毎に三思するといふやうな杓子定規に拘はるのは大きな謬りである。政治は機宜に應じて果斷決行することが最も大切でなければならぬ。

子曰甯武子邦有道則知。邦無道則愚。其知可及也。其愚不可及也。

「子曰く甯武子、邦道有れば則ち知。邦道無ければ則愚。其知には及ぶべし。其愚には及ぶべからざるなり。」

大意。衛の大臣甯武子は邦に正しい秩序のある時代には智を現して道を世に弘め、邦に秩序がなく混亂してゐる場合には智を隠して道を後世に傳へる。智を出してはたらくは誰にもできるけれど、自ら晦まして道に殉ずるは常人の及ぶところでない。

思索。君主専制、君權絶對の社會にあつて、賢明の君主が上にあれば、仕へて智を出し才を働らせることは極めて容易な業である。若し暗愚の君主が權力をほしいまゝにする時代に當り、才を現

して禍を蒙らず、また超然世を遁れて一身の安逸を計らず、己れを直くし人と融和して悠々自得の生活を打建てることは、なか／＼難かしい。

子在陳曰歸與歸與。吾黨之小子狂簡斐然成章。不知其所裁之。

「子陳に在して曰く歸らんか歸らんか、吾黨の小子狂簡にして斐然として章を成せども、之を裁する所以を知らず。」

大意。孔子が陳の國に在して遙かに郷國の魯に懷を寄せられ「吾郷里の青年輩は理想高く、志粗大であつて、中正不偏の指導原理を持たない」と嘆じた。かくて孔子は魯を出で、十年諸侯を遊説された後、六十八歳の老青年として故山に歸つて子弟の教育に身をさゝげることゝなつた。

思索。孔子は五十七歳の時魯國を去つて、天下を流浪し仁の理想を實現せんとする熱意に燃えて諸侯の國政に携はつた。けれども、其志竟に成らざるを覺つて晩年に至り郷里に歸られた。それは勿論、老衰のための隠居でもなく、失望のための退却でもない。道の後世に傳へんとする積極的光明を懷いて勇ましく父母の國に凱旋されたのである。門下の高弟である顔回が孔子より少きこと三十歳、曾子、子夏、子張等に至つては、四十歳乃至四十五歳の年少者であつたことを見れば、孔子の

魂が、いかに若き血潮を漲らせてゐたか、想はれる。

子曰伯夷叔齊不念舊惡。怨是以希。

「子曰く伯夷叔齊は舊惡を懷はず。怨み是を以て希なり。」

大意。伯夷叔齊は人の舊惡を忘れて新善を稱揚したから人を怨まず、人から怨まれることが無かつた。

思索。清廉潔白な人間は人の不義不信を悪んで遂には之と絶交するやうになるものである。伯夷叔齊は清廉であつて、しかも、よく人の舊惡を思はず、人を包容して人の善に入ることを喜んだ。孟子が「伯夷は聖の清なるもの」と評した意味はこゝにある。所謂「清濁合せ呑む」といふ態度は大抵は八方美人の妥協功利主義になるものである。伯夷の立場は之と異ひ純然たる人格主義であつて功利主義でないことを見失つてはならぬ。

子曰執謂之微生高直。或乞醯焉。乞諸其鄰而與之。

「子曰く執か微生高を直といふ。或人醯を乞ふ。之を其隣に乞うて之を與ふ。」

大意。孔子がいふ。「世間では微生高を『直』なる人物であると評判してゐるけれど、私は信じない。或人が彼の家へ醴を貰ひに来た時、隣の家から貰つて来て、自分のものゝやうな顔をして與へてやつた。此行は彼の不直をあらはすものである。」

思索。無いものを、有るやうに飾る自己宣傳や虚榮からして、すべての邪曲な行爲が生れる。微生高の態度は事極めて小であるが、之を修道の標準から観れば不直として許せない問題である。故に孔子は強く之を責められた。

子曰巧言令色足恭。左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人。左丘明恥之。丘亦恥之。

「子曰く巧言令色足恭なる左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。怨みを隠して其人を友とす。左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。」

大意。言葉や顔色を飾つたり、心にもなき恭敬をつくろうて人の心に取入らうとすることを左丘明は恥ぢた。自分もそれを恥づる。内心の怨みを隠して相手の人と親しくすることを左丘明は恥ぢた。自分もそれを恥づる。

思索。人間が社會に立つて仕事をする場合、知らず／＼容貌言語を飾り、度を越えた恭敬をなして人の好意を買はうとする心もちが起るものである。無反省で功利に熱中すれば、それが日常普通の社交術となつて、遂には虚偽な性格を作つてしまふ。左丘明が之を恥ぢ、孔子も之を恥づるといはれたところに、不斷に深く自己を見つめてゆく求道の貴さが思はれる。

顔淵季路侍。子曰盍各言爾志。子路曰願車馬衣輕裘與朋友共敝之而無憾。顔淵曰願無伐善。無施勞。子路曰願聞子之志。子曰老者安之。朋友信之。少者懷之。
「顔淵季路侍す。子曰く盍ぞ各爾の志を言はざる。子路曰く願くば車馬衣輕裘、朋友と共に之を敝りて憾みなけん。顔淵曰く願くば善に伐ることなく、勞を施すこと無けん。子路曰く願くば子の志を聞かん。子曰く老者は之を安んじ、朋友は之を信にし、少者は之を懐かしめん。」

大意。顔淵と季路の二人が侍してゐた。孔子は二人に「各々自分の志すところを語つて見よ」といはれた。子路は言うた。「願くば車馬輕裘のやうな貴重品を朋友と共有に使用して惜しまない心になりたい。」顔淵は言うた。「自分の行つた善事を誇りとせず、勞役を人に推しつけることなくして、先づ自ら行ひたい。」子路が孔子の志を問うた。孔子は答へられた。「老人をば安心させ、朋友は互に信

じ合ひ、年少者からは懐かれるやうにありたいものである」

思索。子路の志は朋友と財物を共通にして惜しまず、いさゝかも、物質に捕はれない心境であつた。「破れた綿衣をまとうて美服を着た人間と並んで恥ぢない」と孔子に賞められた子路にも、此願ひがあつたことを見れば、人間が物質の所有慾から脱するは中々容易でないことが知られる。顔淵の志は自己の善を善とせず、自己の勞を勞としない心境である。顔淵は赤貧空乏の中にあつて悠々道を楽しむ境地にあるから物質慾は既に問題でない。子路と比べて其願ふところ一段高いといふてよい。孔子の願ひは、老人を安んじ同僚は相信じ、年少者には慕はれる心境即ち社會を一家とし、すべての人々を自己の親子兄弟と見る生活である。孔子の志は顔淵に比べ更に深くして高遠である。

子曰已矣乎。吾未^レ見^レ能^レ見^レ其^レ過^レ而^レ内^レ自^レ訟^レ者^上也。

「子曰く已ぬるか。吾未だ能く其過ちを見て内に自ら訟むるものを見ざるなり。」

大意。孔子は嘆ぜられた。「アアモウ終りである。私はまだ自分の過ちを深く自ら責め咎めて見逃さないやうな眞剣な求道者に逢うたことがない。」

思索。人間生活の高下は内省の深淺によつて定まるといふてよい。如何に外的生活が器械化されて

も、内面生活が深められなければ、それは意味ある人生でも幸福な人生でもあり得ない。嚴肅な氣分を以て自己の生活を省察し検討し、深め淨めていくところに人生の眞の價値が創造される。内省は單なる思索でなく、實踐に徹する敬虔、悔悟、改過、遷善の一步一步である。すべてによつて生かされつゝ、すべてを生かしてゆく永遠の前進である。

子曰十室之邑^ズ必有^ニ忠^信如^レ丘^者焉。不^レ如^ニ丘^之好^レ學^也。

「子曰く十室の邑必ず忠信丘が如きものあらん。丘の學を好むに如かざるなり。」

大意。孔子はいはれた。「家十戸位の小村でも、その中には必ず忠信な性格で私に劣らない人はあるであらう。けれども、私が古聖賢の道を篤く信じて好み學ぶのに負けないといふ人があるかどうか」**思索。**孔子の道は忠信を主本とする。學問の要は忠信を極めるにある。けれども、單に忠信に凝り固まつて聖賢の經典を究めなければ、亦忠信の本旨を失ふことを免れない。天性の忠信を貴ばずして學問の修行を重んぜられたのである。

雍也第六

子曰雍也可使南面。仲弓問子桑伯子。子曰可也簡。仲弓曰居敬而行簡以臨其民。不亦可乎。居簡而行簡無乃大簡乎。子曰雍之言然。

「子曰く雍や南面せしむべし。仲弓子桑伯子を問ふ。子曰く可なり簡なり。仲弓曰く敬に居て簡を行ひ以て其民に臨まば亦可ならずや。簡に居て簡を行はば、乃ち大簡なること無からんや。子曰く雍の言然り。」

大意。仲弓名は雍。德行器量衆人の長たるに足る。故に孔子は、その人物を賞揚して「南面（帝王の位に上る）せしむべし」といはれた。仲弓が子桑伯子といふものゝ人物を問ふと、孔子は「まづ／＼立派な人物といつてよい。彼は政を行ふに簡略を主とする」と答へられた。仲弓が再び問うた「敬虔の態度を以て身を持ち、事を處するに簡略を旨として政治を行つたならば宜しきを得るでありませう。もし身を持つること簡略であり、事を處すること亦簡略であつたならば簡に過ぎて政道を失ふものではありませんか」孔子は仲弓の言を「然」りと同意された。仲弓は弟子。孔子より少きこと二十九歳。

思索。政治は簡易平明を貴んで繁雜小細工を避けなければならぬ。法網密にして吞舟の魚を逸する。秦は嚴刑を以て倒れ、漢は法三章を以て興つた。自ら責むること嚴にして人を待つこと寛なるは、あらゆる統御の原則である。眞に敬虔に徹した人であつて始めて國政に任ずることができる。

哀公問。弟子孰爲好學。孔子對曰有顔回者。好學不遷。怒。不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。

「哀公問ふ。弟子孰か學を好むと爲す。孔子對へて曰く顔回といふものあり。學を好み怒りを遷さず。過ちを貳びせず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ學を好むものを聞かざるなり。」

大意。魯の哀公が「弟子の中で誰が學を好むか」と問うたので孔子は對へた「顔回といふものがあつて、學を好み、よく怒りを制して人に不快な感を與へることがなく、過ちを改めて再び繰返さなかつた。けれども、不幸短命にして死し、今は居りません。未だ顔回の如く學を好むものを見たことがありません」

思索。「學を好む」は机に向つて讀書するのではなく聖賢の教典を信行して倦まず怠らぬことである。即ち道德の實踐、人格の修養を好むの謂である。哀公の問に對して孔子が顔回を挙げ且つ怒りを制

し過ちを改むるといふ美德を以て答へられたのは、この二ヶ條の修行について哀公の反省を促すためであつたと思はれる。學は智仁勇の三方面に於て無限の深さを目標としてゐる。單に怒りを遷さず過ちを再びせずの二項目にとゞまるものでない。けれども、修養の過程として怒りを制することは最も重要であり、過ちを改めることが人間向上の契機であり關門であることは極めて明らかである。故にこの二つを外にして求道の法なく學問の階梯なしといふこともできる。

子華使_ニ於_ニ齊_ニ。冉子爲_ニ其母_ニ請_レ粟。子曰與_ニ之_ニ釜_ニ。請_レ益。曰與_ニ之_ニ度_ニ。冉子與_ニ之_ニ粟五乘。子曰赤之適_レ齊也。乘_ニ肥馬_ニ衣_ニ輕裘_ニ。吾聞_レ之也。君子周_レ急不_レ繼_レ富。原思爲_ニ之宰。與_ニ之粟九百_ニ辭。子曰毋。以與_ニ爾鄰里鄉黨_ニ乎。

「子華齊に使す。冉子其母のために粟を請ふ。子曰く之に釜を與へよ。益を請ふ。曰く之に度_{（一石六斗）}を與へよ。冉子之に粟五乘を與ふ。子曰く赤の齊に適くや、肥馬に乗り輕裘を衣たり。吾之を聞く。君子は急を周うて富めるに繼がず。原思之が宰たり、之に粟九百を與へらる。辭す。子曰く、毋れ。以て爾が隣里鄉黨に與へんか。」

大意。孔子の門人子華が孔子の使として齊に行く時、門人冉有が子華の母に留守手當として粟を與へることを願うた。孔子は「釜（六斗四升）を與へよ」というた。冉有が増額を請うたので孔子は「度

（一石六斗）を與へよ」と命ぜられた。然るに冉有は孔子の命に従はず、之に粟五乘（乘は十六石）を與へた。そこで孔子は冉有を戒め諭された。「赤（子華の名）は齊に行く時、肥馬に乗り立派な服装で出立した。彼の生活は相當餘裕がある。君子は貧者を救ふには物を吝まないけれど富者に澤山な物を與へることをしない。」

孔子の弟子原思が曾て孔子の領邑の長官に任ぜられた時、粟九百斗の祿を與へられた。原思は寡慾な性質で、それを辭して受けなかつたので、孔子は諭された。「當然受くべき俸祿は辭するに及ばない。もし餘りあらば鄰家郷人の貧しいものに分け與へるがよからう」——子華は門人、孔子より少きこと四十二歳。冉有は同じく孔子より少きこと二十九歳。原思は同じく三十六歳。

思索。物を使ふと人を使ふと其道は同じである。よく物を使ふは、よく人を使ふことであり、よく人を使ふことは、よく人を愛することである。與ふべきに與へ、取るべきに取るは義である。取與、義に合すれば、物によつて人を生かし、之に反する時は物の爲めに人を傷つける。金よりも物が貴く、物よりも人の生命が貴く、生命よりも精神が貴い。精神とは道義の理想である。道義とは、物の價値を最も公正に、最も高度に發揮する人生を意味する。それは各人が最底限の生活によつて社會に奉仕する誠意と實踐とによりて得られる。

子曰「仲弓曰：『犁牛之子騂且角，雖欲勿用，山川其舍諸？』」

「子仲弓を謂て曰く犁牛の子騂くして且つ角あらば、用ふること勿らんと欲すと雖も山川それ之を舍てんや。」

大意。仲弓の父は不良の評判があつた。孔子は「斑牛（不良の牛）の子であつても、赤色で角のある牛（良牛）ならば、山川の神も喜んで犠牲に供へさせるであらう」というて、父の悪が子の善を妨げるものでないことを論された。

思索。父が善なれば子も善であり、父が不善なれば子も不善なるは當然であるが、父が不善であつて子が善なる場合には、子の善が割引されることは止むを得ぬ事實である。けれども父が不善で子が眞に善なれば、その善は一層偉大といはねばならぬ。帝舜の父は不善人であつた。歴史の記載が必ずしも事實とはいはれないけれど、父の不善を償うて餘りあるほどの善行があれば、萬人を感化する力があるといふことはできる。世間の評判となる善悪も、一層深く検討して見れば、様々である。外觀だけで人間の生活は断定できない。人間の天賦性格は決して偶然なものでない。そこに嚴肅な因果關係のあることも考へなければならぬ。

子曰「回也其心三月不違仁，其餘則日月至焉而已矣。」

「子曰く回や其心三月仁に違はざれば、其餘は則ち日月に至らんのみ。」

大意。孔子が顔回に言はれた。「道に志して其心が三月の間、仁に違はぬやうに努めたならば、政治、經濟、藝術の如きは日に月に發達していくであらう」

思索。仁は人間最高の理想である。どんな立場にあつても、人の向上と幸福との爲めに身をさゝげる生活が仁である。三月の長い間、心が此念願に充たされたならば、政治、經濟、藝術、科學、一切の部面が進歩向上することは當然である。何となれば、政治も、經濟も、仁の内容であり仁の一部面に外ならない。よく利己主義を去つて奉仕献身の精神に生きれば、人生の百事皆眞の向上發展に趣くべきは明らかである。仁に違はずとは聖賢の教典に反かない意味である。孟子が「學問の道他なし。其放心を求むるのみ」というてゐる如く、外物に放散する意識を攝收して教典の思索と體驗とに集注すれば、即ち仁に至るのである。凡そ「三」の數は全數を意味してをる。「三たび省る」とは何回となく反省するの意であり、「三日」は毎日であり、「三年」は永久の謂である。「三月」は日と年との中間にあつて、幾月も幾月もといふ意味と解してよい。

季康子問仲由可_レ使_レ從_レ政也與。子曰由也果於_レ從_レ政乎何有。曰賜也可_レ使_レ從_レ政也與。曰賜也達於_レ從_レ政乎何有。曰求也可_レ使_レ從_レ政也與。曰求也藝於_レ從_レ政乎何有。

「季康子問ふ。仲由は政に従はしむべきか。子曰く由や果なり。政に従ふに於てか何かあらん。曰く賜や政に従はしむべきか。曰く賜や達なり。政に従ふに於てか何かあらん。曰く求や政に従はしむべきか。曰く求や藝あり。政に従ふに於てか何かあらん。」

大意。季康子が「仲由(子路)は政治に従はせることができますか」と問ふと、孔子は「由は果決斷行の才があるから、政治家たるの資格がある」と答へられた。「賜(子貢)は政治に従はせることができますか」「賜は事理に通じてゐるから、政治家たるの資格がある」「求(冉有)は政治に従ふことができますか」「求は才藝があるから、政治に従ふ資格がある」

思索。政治の要は適材を適所に置くことである。一藝一能も其位置を得れば、よく人を指導することができる。完全を人に要求すれば、一人も指導者たる資格あるものはない。各人の個性を發揮せしめ長短相補うて共存共榮の生活を營むところに社會生活の意味があり、又そこに政治の目標がある。

季氏使_レ閔子騫爲_レ費宰。閔子騫曰善爲_レ我辭焉。如有_レ復_レ吾者。則吾必在_レ汶上_レ矣。

「季氏閔子騫をして費の宰たらしむ。閔子騫曰く、能く吾爲めに辭せよ。もし吾を復するものあらば則ち吾は必ず汶の上りにあらん。」

大意。季氏が閔子騫を費の長官に任命しやうとした。閔子騫は固く之を辭していうた。「もし再び強いて任命しやうとするならば自分は此地を去つて遠く汶水の邊りに逃れるであらう」と。

思索。季氏は魯の政權を握つて野望を逞くしてゐた。閔子騫が季氏の配下に屬するを潔しとせず、斷然之を拒絶したのは痛快である。孟子が「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず威武も屈する能はず、之を大丈夫といふ」というたのは、此の如き人のことであらう。しかも閔子騫は資性溫厚、繼母に仕へて孝順の道を盡した。混亂した時代に處して毅然として清節を全うす、高風仰ぐべきである。

伯牛有_レ疾子問_レ之。自_レ牖執_レ其手。曰亡_レ之命矣夫。斯人也而有_レ斯疾_レ也。斯人而有_レ斯疾_レ也。

「伯牛疾あり子之を問ふ。牖より其手を執りて曰く、之を失はん、命なるかな。斯人にして斯疾あり。斯人にし

て斯疾あり。」

大意。門人伯牛が病氣の時、孔子は之を訪問され窓から其手を握つて嘆いた。「斯の人にして斯の疾に斃れるとは、まことに運命といふ外はない」

思索。伯牛の疾は悪疾であつた。そして危篤であつた。孔子は伯牛の手をとつて之と永訣された。伯牛の疾は或は遺傳であつたであらう。彼の不攝生によつて招いたものでない。因縁であり運命である。故に孔子は「命なるかな」と嘆かれた。運命は即ち因果應報であつて、人間の力を以て直ちに之を左右することはできない。けれども運命を自覺し、因果の理を確信すれば運命を超越し因果の網から解放されることが出来る。運命の自覺には不斷の精進と相當の年月を要する。運命を知るものは達人である。伯牛は疾によつて、自己の運命を達観することができたに違ひない。故に孔子は特に快癒を祈らず、亦甚しく悲しまれなかつた。

子曰賢哉回也。一簞之食。一瓢之飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。賢哉回也。

「子曰く賢なるかな回や、一簞の食一瓢の飲。陋巷にあり。人は其憂に堪へず。回は其樂みを改めず賢なるかな

回や。」

大意。孔子が顔回を稱揚された「賢なるかな顔回は。一椀の飯、一椀の汁に甘んじて最低限の生活をしてゐる。人々は富を求め、地位を求めて憂へるけれど、顔回は悠々其生活を楽しんで他の樂しみを羨望するやうなことがない。顔回は賢者である。

思索。最低限の貧生活にあつて、悠然として樂しむことができれば、一切の問題は解決できる。すべての罪惡は物質慾から起り、奢侈贅澤から始まる。我内心に樂しみがあれば、外に向つて享樂を求める必要がない、富貴を厭ひ、貧賤を願ふわけではない。貧富の境を超越するのである。

「これあつて之をよるこび、これなくて悲しみのなきものを求めよ。」一たび原始生活に立還つて出發しなければならぬ。世界大戰は、人類內的革命への曉鐘である。

冉求曰非不說子之道。力不足也。子曰力不足者中道而發。今女畫。

「冉求曰く子の道を説ばざるに非ず。力足らざればなり。子曰く、力足らざるものは中道にして廢す。今女畫れり。」

大意。門人冉有が「先生の道がありがたく思はないのではありません。自分の力が乏しくて従つて行けぬのであります。」というたので、孔子は言はれた「力の足らぬものは途中で落伍する。今汝は初めから、自分の力を見限つて出發しないのだ」

思索。道は萬人の行くべき道路であり、従つて萬人の行き得る安全道である。それ故に力の有無多少を問ふわけではない。才智や藝能の方面では人々各天分に相違があつて、天才者に追隨することは萬人の能くするところでないが、道徳は萬人平等に要求し萬人に同じく責むべきものである。知識才藝及び、それに附隨する富とか地位とかいふものは、天才と常人と、非凡人と凡人とは比較にならない差異があるやうに見えるけれど、それは人間生活としてはむしろ枝葉のことである。人間の眞の價値、眞の幸福は、知識才藝の多少によるものでない。西郷南洲も二宮尊徳も知識や技術に於ては今日の小學教員や工場の技手にも及ばなかつた。人間の眞價は道徳の程度によつて決定される。道徳は愛、敬、信の三つである。人々による知識や技藝の相違は、いかに大なるものも、それは相對的であるが、愛、敬、信は人間の本性であり根本的要求である。この本性に基づきこの要求を充たすところに人生の眞意義があり、眞目的がある。聖賢の道はこの眞目的への指針である。先づ第一に聖教の信行によつて愛と敬とを充實し、純粹ならしめ、その上に知識と技藝とを善用して人生

の眞意義を發揮せねばならぬ。

子謂^テ子夏^ト曰^ク。女爲^レ君子^ノ儒^ト。無^レ爲^ル小人^ノ儒^ト。

「子、子夏に謂て曰く。汝君子儒となれ。小人儒となること勿れ。」

大意。孔子が子夏に向つて言はれた「汝は身を修め人を治むる君子の儒を學べ。文字文章に没頭する小人の儒を學んではならぬ」

思索。子夏は文學の才に秀でゝゐた。故に孔子は彼が文字章句の研究や發表に拘はつて、反省實徳を忽がせにしないやうに訓誡された。王陽明は言うてゐる「天下の大亂は虚文勝つて實行衰ふるによる」と。知識技巧に没頭して修身誠意の内省と實行とを失つた教育、學問の結果は小人儒のみに止まらず、實に世界大亂である。

子游爲^レ武城宰^ト。子曰^ク。女得^レ人焉^ヤ爾乎^ト。曰^ク。有^リ澹臺滅明^ト者^ト。行^ク不^レ由^レ徑^ニ。非^ニ公事^ニ未^ダ嘗^テ至^ラ於^レ偃之室^ト也^ト。

「子游武城の宰たり。子曰く汝人を得たりや。曰く澹臺滅明といふ者あり。行くに徑に由らず。公事に非れば未

だ皆て偃の室に至らざるなり。」

大意。子游が武城の地方長官となつた時、孔子は「政治は人物にある。どんな人物を登用したか」と問はれた。子游は答へた「澹臺滅明といふ人物を挙げました。彼は道を行くにも小路を歩まず、公用でなければ、長官の室に入らないやうな剛直な人間です。」

思索。暮夜権門をくゞつて地位を求めたり、官長の髯の塵を拂つて待遇の向上を計るやうな人間は政治家としては落第である。斯やうなものは、いかに才智、藝能があつても、人の上に立つ指導者たるの資格はない。清廉の徳と、最低限生活の信なくして人の上に立つは罪惡である。

子曰孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬曰非敢後也。馬不進也。

「子曰く孟之反伐らず。奔つて殿たり。將に門に入らんとす。其馬に策つて曰く敢て後れたるに非るなり。馬進まざればなり。」

大意。孟之反は功に誇らぬ人物である。曾て戦に敗れて味方の最後方から殿（シンガリ）をして城門に入らうとした時、其馬に鞭をあてながら、「自分は殿をする目的ではなかつた。馬が進まなかつたために、後れたのである」と正直に告白した。

思索。殿をするは剛者でなければならぬ。進む時の先登よりも退く時の殿は大勇を要する。孟之反は馬が進まなかつた爲めに偶然殿をすることになつた。人は認めて殿としてゐるけれど、自分の心はすまない。それ故に正直に告白した。もし心に少しでも功に誇るところがあれば必ず黙つて殿したことにするであらう。功に誇らぬ人間はまことに貴い。故に孔子は之を賞揚された。

子曰不有祝鮀之佞而有宋朝之美。難乎免於今之世矣。

「子曰く祝鮀の佞ありて、宋朝の美あらざれば、難いかな、今の世に免れんこと。」

大意。「祝鮀（衛の宗廟の役人である鮀）のやうな辯舌がなく宋朝（宋の公子朝）のやうな美貌が無ければ今の時代を取残されずに立身することはむづかしい」と孔子は風俗の浮薄に流れたのを嘆かれた。思索。俗人が辯舌と風采とを以て人を評價するは昔も今も異ひはない。巧辯の中には必ず偽りがあり、美貌の影には必ず真情が缺けてゐる。西洋人はギリシヤの昔から雄辯術が行はれて演説が巧みであり、支那人も古來誇張した修辭に巧みであつた。日本は「言あげせぬ國」として實行の伴はぬ空論を賤しみ、又「言靈のさきはふ國」として言葉を寶玉の如く魂の如く尊重する傳統をもつてゐる。國民の三省すべき點である。

子曰誰能出不由戶。何莫由斯道也。

「子曰く誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯道に由ることなき。」

大意。家の出入に戸からしないものはない。何故に人として人道を歩まないのか。

思索。家の出入を戸口からすることは、最も自然な安全な方法である。塀を乗り越えたり、壁へ穴をあけて出入するものは盗賊である。人道は明白であり、平坦であつて、萬人が安心して歩けるところである。それを棄て、危険な崖道や荆棘の中を通るものゝ多いのは、まことになさけない。孟子が「仁は人の安宅なり。義は人の正路なり」といひ、禪宗の法語に「所謂坐禪は修禪にあらず、ただこれ安樂の法門なり」とある如くに萬人が皆この安全自然の大道に向つて一步を踏み出せば一切は解決である。しかし萬人が迷へる時に一人を覺すことは容易でない。そこには理知と實踐と犠牲とが要求される。聖經の信行が是非とも必要である。

子曰質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬然後君子。

「子曰く質文に勝てば則野なり。文質に勝てば則史なり。文質彬彬々として然る後に君子なり。」

大意。質實が勝つて禮節が足らなければ野人となり、禮節が勝つて質實が足らなければ虚飾に流れる。質實と禮節とが均齋を得て、ほんとうの君子といふことができる。

思索。性質の純朴なものは粗野に陥りやすく、禮法を貴ぶものは誠實を失ふ恐れがある。しかし虚飾よりも粗野の方がよい。純朴な性をみかくに禮法の修練を以てするが君子の道である。西郷南洲は人と對坐して膝を崩さず年少の下僚に向つても、言葉使ひを粗略にしなかつた。聖雄と稱せらるる所以である。

子曰人之生也直。罔之生也幸而免。

「子曰く人の生けるや直し。之を罔いて生けるは幸にして免れたるなり。」

大意。人の生命は本來直である。「直」を失へば死するが當然である。故に不直にして生きてをるは僥倖に過ぎない。

思索。直は生命の眞の要求、眞のすがたを其まゝに現はすことであり、不直はこれに反くことである。水が低きに向つて流れるは直である。水の直は一直線の進行ではない。穴があれば、それを充たして進み、岩があれば、それを廻つて流れる。そこに水の直がある。

うつには従ひながら岩がねも通すは水の力なりけり

子曰知^ル之者不^レ如^カ好^ム之者。好^ム之者不^レ如^カ樂^ム之者。

「子曰く之を知るものは之を好む者に如かず、之を好むものは之を樂しむものに如かず。」

大意。善を知るものは善を好むものに及ばない。善を好むものは善を樂しむものに及ばない。

思索。善——何を爲すべきか——をはつきりと知ることはむづかしい。明かに善を知るものは之を行ふ。之を行うて止まなければ、之を好むやうになる。之を好むの至りは之を樂しむやうになる。知らずく善を爲し我と善と一體になるが善を樂しむの境地である。

親鸞が「念佛は最上善である。念佛に勝る善はなく、念佛を傷つける悪事は無い」というたのは、言やゝ奇矯であるが、其味は極めて深いものがある。「ナムアミダブツ」で救はれると悟つた法然や親鸞の頭脳には深遠な思想哲理が藏められてゐた。大衆は單純に教祖の人間を信じ「ナムアミダブツ」と唱へることによつて救はれた。今の世には親鸞がなく、念佛で救はれる單純な大衆もない。現代の人々は何を信仰し、何によつて救はれたらよいか。

子曰中人以上可^ニ以^テ語^ラ上也。中人以下不^レ可^ニ以^テ語^ラ上也。

「子曰く中人以上には以て上を語ぐべし。中人以下には以て上を語ぐべからず。」

大意。普通の理解力をもつた人間には高尚な道理を語つてもよいが、その力の無いものには、それ相應な指導をしなければならぬ。

思索。反省と批判力をもつた人間は向上を願ひ、聖賢の教を聞くことを好むものであるが、向上心の缺乏した人間は、これを厭ひ侮るがゆゑに、正面から聖賢の教をもつて導くことはむづかしい。人間の中には少數ではあるが、積極精神がなく、指導意識を缺いてゐるものがある。斯様な人々に對しては規律的な習慣と勞働を課する以外、説教は殆んど効果が無い。

樊遲問^フ知^ヲ。子曰務^メ民之義^ヲ。敬^シ鬼神^ヲ而遠^ク之^ヲ。可^レ謂^フ知^ト矣。問^フ仁^ヲ。曰仁者先^ニ難^キ而後^ニ獲^ル可^レ謂^フ仁^ト矣。

「樊遲知を問ふ。子曰く民の義を務め鬼神を敬して之を遠ざく知といふべし。仁を問ふ。曰く仁者は難きを先にし獲ることを後にす。仁といふべし。」

大意。弟子樊遲が知と仁について孔子に問うた。孔子は答へた。「人間の行ふべき義務を盡して奇蹟や神靈を敬遠すれば道を知ることができる。正しくて難かしい實行を先にして利益や快樂を後にすれば仁が獲られる。」

思索。人間最上の智慧は自己の爲すべきことを知つて之を行ふことによつて得られ、人間最高の徳——仁は人の爲め國の爲めに率先して力を盡すことによつて得られる。智慧を神や不思議に求め、仁を功利事業に求めやうとするは青年の陥り易い誤りである。けれども、神を侮り、功利を無視してはいけない。神は教を以て明らかに、功利は正義を以て成し遂げられる。

子曰知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂仁者壽。

「子曰く知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂しみ仁者は壽し。」
大意。道を行ひ徳を好むものは、よく自然の美を愛し活躍の元氣に充ちて、しかもその態度は悠々としてをる。故に天命を樂しんで天壽を全うすることができる。

思索。道を知つて行ふものが知者であり。道を樂しんで道と一體となつたものが仁者である。「水を樂しみ山を樂しむ」とは春夏秋冬、山水風物の美を愛好することである。「動く」とは内より發する

勇氣元氣に充ちて社會に立ち働らくことであり「靜かなり」とは活躍の中におのづから悠々超然として迫らざる態度のあることである。人の爲め世の爲に憂へ慮るけれども、究極に於て達觀樂視するがゆゑに、常に健康を保つてよく天年の壽命を全うすを得る。多くの人々は利己主義から陥る不攝生や煩悶のために天然の壽命を縮めてゐる。利慾を離れて道を樂しむものゝみ天壽を完全に保ち、更に之を延すことができる。

子曰齊一變至三於魯。魯一變至三於道。

「子曰く齊一變せば魯に至らん。魯一變せば道に至らん。」

大意。齊の國が一變して向上すれば魯の國となり。魯の國が一變して向上すれば道義の國になるであらう。

思索。齊は強國であり魯は弱國であるが道義の上から見れば、魯は齊に勝つてゐる。しかも魯には周公の遺風が存し之を繼承する孔子及び門下の徒がある。一變すれば道義國となることができる。孔子は魯の一變を冀ひ、魯を一變するを以て任ぜられた。しかも、魯は遂に孔子を用ひず、孔子は魯を去つて諸國を歴遊し、晩年魯に歸つて、道を後世に傳へた。爾來二千四百年、王道は支那歴代

の政治道として尊信され海を渡つて我日本の皇道に合流發展を遂げて、今や東亞新秩序の指導原理となり、萬國道義の淵源となりつゝある。一變の意味深遠といはねばならぬ。

子曰觚不_レ觚。觚哉_。觚哉_。

「子曰く觚觚ならず。觚ならんや觚ならんや。」

大意。今の觚（酒器）は名は觚であるが、昔の觚と全く異つてゐる。すべての方面が有名無實になつたのは嘆すべきである。

思索。名が立派であつて、實際の伴はない制度組織は死物である。革新とは名分を正しくし、名實を一致せしめることである。

宰我问曰仁者雖_レ告_レ之曰_レ井有_レ仁焉。其從_レ之。子曰何爲其然也。君子可_レ逝也。不可_レ陷也。可_レ欺也。不可_レ罔也。

「宰我问うて曰く、仁者は之に告げて井に仁ありといふと雖も、それ之に従はん。子曰く何爲れぞ、それ然らん。君子は逝かしむべし。陷るべからず。欺むべし罔ふべからざるなり。」

大意。宰我が問うた。「仁者もし人が偽つて、井の中に人が陥つてゐると告げれば、直ちに跳りこんで之を救はんとして共に溺れるやうなことはないでせうか」と。宰我は、仁者は人を愛するに急なるため、眞偽の判断をする餘裕がないと思つて此問を發した。孔子は答へられた「否。仁者は井端まで行くけれど、井の中に陥られるやうなことはない。道理ある言葉には欺かれるけれど、人の奸計にかゝることはない。仁者は利慾に離れた明智をそなへてゐるから、事に當つて人の誠偽を觀破することができる。」

思索。才は徳から生れ、智は愛から生れる。故に愛に充ちた仁者は必ず才智がそなはつてゐる。私利私慾は才を鈍らせ智をくらませる。故に才智のみの人間は往々人の奸策に陥ることがある。人を謀るものは人に謀られ、人を信ずるものは人之を欺くに忍びない。故に仁者は人の奸計に陥ることがない。

子曰君子博學_ニ於_レ文_。約_レ之以_レ禮_。亦可_ニ以_レ弗_レ畔_。矣_。夫_。

「子曰く君子博く文を學び之を約するに禮を以てせば亦以て畔かざるべきか。」

大意。博く聖賢の遺文を研究し之を要約して中心點を把握し敬虔の念を以て實行すれば道義にそむ

かない生活ができる。

思索。知識を博め経験を深め、聖賢の經書を尊信して之を尺度とし標準として内省し批判すれば道義至上、人格最高價値の自覺に到達せられる。

子見^ル南子^ヲ子路不^レ説^バ。夫子矢^{ツテ}之^ニ曰^ク。予所^レ否^{スル}者^ハ。天厭^レ之^ヲ。天厭^レ之^ヲ。

「子南子を見る。子路説はず。夫子之に矢つて曰く予が否とする所のものは天之を厭はん。天-之を厭はん。

大意。孔子が南子（衛の靈公の夫人）に會見されやうとした時、子路は之を悦ばなかつた。南子は品行良からぬ女であつた。そこで孔子は子路を諭された。「もし自分が爲してならぬ事は天が差止めて下さるから」と。

思索。南子が素行の治まらない女であることは萬人に知られてゐた。子路が孔子の會見を悦ばないのは常識から見て當然である。孔子が普通の説教家であつたならば、子路の反對を待たずして會見を拒んだに違ひない。南子は情に厚い女であつたであらう。數々過ちを侵したとはいへ、それを悔責する念も強く、道を求め、賢者を尊ぶの純情も働いてゐた。孔子は南子に會見して少しも自分を傷ふ憂ひがなく、必ず南子を改悟向上せしめるだけの信念をもつてゐる。故に「吾に天の命令あり」

というて子路の心を慰められた。孔子の盛徳が萬人の信を得てゐるでなければ、到底、斯様な離れ業をすることはできなかつたであらう。

子曰中庸之爲^ル德也。其至^レ矣乎^キ民鮮^キ久^ク矣。

「子曰く中庸の徳たる、それ至れるかな民鮮きこと久し。」

大意。中庸が人間最高の徳であることを知り、之を行ふものはない。

思索。中庸は中正にして偏せず、萬世不變の道である。それは人情自然にもとづく徳行であつて、形の上からいへば五倫（君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友）の道である。五倫は日常平凡の道であるが、之を全うすることは人間最高の生活である。人間は高遠な理論や不思議な教義をありがたがつて、平生凡常の裡に眞理の存することを知らない。孔子が之を慨いて、人間本性に基づき人間實生活に即した教を弘められた。これが即ち中庸の徳である。

子貢曰如有^シ三^ニ博^ク施^シ於^テ民^ニ而能^ク濟^ラ衆^ヲ何^レ如^ク。可^キ謂^フ仁^ト乎^カ。子曰何^レ事^ニ於^テ仁^ニ必^ヤ也^カ聖^カ乎^カ。堯^モ舜^モ其^レ猶^ホ病^レ諸^ヲ。夫^レ仁^者己^レ欲^シ立^テ而^レ立^テ人^己欲^シ達^ス而^レ達^ス人^能近^ク取^リ譬^フ。可^キ謂^フ仁^ニ之^レ方^ト已^ノ。

「子貢曰く、もし博く民に施して能く衆を濟ふあらばいかん、仁と謂ふべきか。子曰く何ぞ仁に事まらん。必ずや聖か。堯舜もそれなほ之を病めり。それ仁者は己れ立んと欲して人を立て己れ達せんと欲して人を達す。よ近く取りて譬ふ。仁の方といふべきのみ。」

大意。子貢が「もし博く徳を施して社會民衆を救ふことができたならば、仁といふことができますか」と問うたので、孔子は答へられた。「それは仁の極であり聖の事業である。堯舜のやうな聖者にして帝位に昇つた場合にさへ、なほ之を難しとして憂へられた。故に仁は斯様な一舉にして大衆を救済する如き目ざましい功業を建てることなく、自分が自覺自立を得ようとしては先づ人の自覺自立を促がし、自分が道德に達せんと欲しては先づ人を達せしめるといふやうに、能く自ら内に省みて人を察し人の幸福のために働らくことが、仁を求める第一の方法といふべきである。」

思索。社會を革新し一世を救済する功業は時勢と運命とに際會した特殊の場合に行はれるものであつて、一個人の意志によつて成し遂げられるものでない。一舉に大衆を救はうとするやうな志は、往々にして功利名譽慾の奴隸となる恐れがある。仁は己れに近き一步一步の實踐であつて、この一日一日の充實によつて得られねばならぬ。一人一人に對する眞心と親切の行を外にして人を善導し世を救ふ方法はない。才識の高遠な青年は常に目ざましい功業を志して日常の行爲を忽かせにし易

いものである。故に孔子は子貢に諭すに、日常の實徳を以てせられた。自己が正善でなければ人を正善ならしむることはできない。自己が信念を持たなければ人を信行せしむることはできない。好んで説教したり、社會改良を叫んだりするものは往々口才だけで反省の乏しいものである。人を指導せんとするものは深切な内省を第一の要件とせねばならぬ。しかし内省自修に凝つて自己完成に没頭したならば、生涯人の爲めにする時機は無いであらう。自己安心の小乗は一種の利己主義である。聖賢の經を本として高邁なる識見を養ひ、大道を履むことが肝要である。

述而第七

子曰述而不作。信而好古。竊比於我老彭。

「子曰く述べて作らず、信じて古へを好む。竊かに我が老彭に比す。」

大意。孔子曰く「私は傳へ述べて自ら創作しない。古道を學んで之を好み、ひそかに自らを殷の大
夫老彭に比べてゐる。」

思索。「仲尼、堯舜を祖述し、文武を憲章す」とある如く、孔子は堯舜古聖の道を述べ傳へ、文王武
王の制度禮法を明徴にするを以て自ら任ぜられた。周公の人と爲りを慕うて屢々周公を夢み、古道
を好み敏にして之を求むることを自分の學問とされた。古聖を標準として、博く學び、つまびら
かに問ひ、慎しんで思ひ、明らかに辨へ篤く行ふのが、その求道的態度であつた。古道に對する信仰
から出發して己れを虚しくし心を平らかにし萬人を師とし萬事を學として發憤食を忘れ、老の將に
至らんとするを知らないのが孔子の人と爲りであつた。老彭は當時は歴史的に名の知れた人物であ
つたであらう。孔子は自ら老彭に比して遂に萬世の師と仰がれるに至つた。

子曰默而識之。學而不厭。誨人不倦。何有於我哉。

「子曰く默して之を識り、學んで厭はず、人を誨へて倦まず何か我にあらんや。」

大意。孔子曰く「默して眞理に通じ、古聖の道を學んで厭ふことがなく、之を人に傳へて倦むこと
がない。これが自分の願ひであつて、他に何ものもない。」

思索。默識心通とは心に會得し身に體得する意味であつて、説明や理論の及ばない境地である。天
といひ神といひ、眞理といひ人格といふは皆この範圍である。孟子に「學んで厭はざるは知なり。
誨へて倦まざるは仁なり。仁知は即ち聖」とある。「知」は無限の充實であり、仁は無限の包容であ
る。仁知の極は天地萬物一體の境即ち聖である。

子曰德之不修。學之不講。義不能徙。不善不能改。是吾憂也。

「子曰く徳の修められざる、學の講ぜられざる、義を聞いて徙る能はざる、不善改むる能はざる、これ我憂なり。」

大意。孔子曰く「修養が眞剣でなく、學問が上達せず、正義に就くことができず、不善を改めるこ
とができない。これが私の憂ひである」

思索。人には各々求むるものがあり、求めて得られなければ憂ひが生ずる。常人の憂ひは名利權勢や安逸享樂の求めにあるけれど、孔子の憂ひは、修徳遷善の一途にあつた。「不善改むる能はざるこれ我憂ひなり」といふところに内省の深刻さが思はれる。

子之燕居申申如也夭夭如也。

「子の燕居、申々如たり、夭夭如たり。」

大意。孔子が無事で家に居られる時は、その態度は、ノビノビとしてをり、其顔色は和氣に満ちてゐた。

思索。「子温にして厲し威にして猛からず恭にして安し」とあり、又桓魋に逢うて「天徳を予に生ず桓魋それ予を如何せん」と豪語されたこと。顔回の死を悼み「哭して慟す」我を失ふに至つたこと及び此章の意を併せ考へて、その豁達の氣象を想ふべきである。

子曰甚矣吾衰也久矣。吾不復夢見周公。

「子曰く甚しいかな、吾衰へたるや久し。吾復た夢に周公を見ず。」

大意。「あゝ私は老衰して、久しく周公の夢を見ない」と孔子が嘆かれた。

思索。孔子は青壯年の時、周公の古制に則つて王道を復興するを以て自ら任じ、常に周公の容貌風采を想望し、屢々周公の夢を見られた。然るに老年に及んで自己の理想の到底現代に行はれ難いことを覺つて周公を夢みないやうになつた。「あゝ自分の氣力も最早や衰へたのであるか」と。時勢の非なるを慨かれた。「發憤して食を忘れ樂しんで憂ひを忘れ老の至るを知らざる」孔子は身體は老境に入つても精神は愈々明澄に氣力は益々旺盛であつた。「吾衰へたり」とは、時事を慨嘆された言葉である。

子曰志於道。據於徳。依於仁。游於藝。

「子曰く道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。」

大意。最高の理想に志し、人格を基礎とし、仁愛を主とし、技藝を研いて社會に立つべきである。思索。道は人間至上の理想即ち聖賢たらんとするの志を充實することである。徳は聖教を實踐して我身に體得することである。仁に據るとは愛情を擴充して萬人を包容することであり、藝に遊ぶとは個性を發揚し社會と融和し從容自得の生活に生きることである。

子曰自_レ行_ニ束脩_一以上_ハ。吾未_ダ嘗_テ無_ク誨_フ焉_{コト}。

「子曰く束脩を行ふより以上は吾未だ嘗て誨ふことなくばあらず。」

大意。束脩（乾肉の束ねたもの、至薄の禮物）を以て入門を請ふものには、何人にも教へることを厭はない。

思索。真心と禮儀とを以て教を請ふものは歡んで入門せしめる。孔子は門人を子の如く愛し、教育の効果を確信して、教育を以て人生の至樂と考へられた。思想が相通じ、理想が相同じく、精神が相合體すれば人類はすべて自分の親子兄弟であり、自我は永遠不滅の生命に生きる。人生の歡喜これに過ぐるものはない。こゝに教育の意義がある。

子曰不_レ憤_セ不_レ啓_セ。不_レ悱_セ不_レ發_セ。舉_ゲ一隅_ヲ不_レ下_テ以_テ三隅_ヲ反_セ。則_レ不_レ復_セ也_。

「子曰く憤せざれば啓せず。悱せざれば發せず。一隅を舉げて三隅を以て反せざれば則ち復せざるなり。」

大意。心に憤り口に發表できないほどの勉學努力をしなければ、ほんとうの道理を覺ることはできない。四隅のものゝ一隅だけを示して他の三隅は自分で發見するでなければ之を説明してやらぬの

が孔子の教授法である。

思索。努力苦修して自ら發明し自ら悟得せしめるのが孔子の教育方針であつた。此意味で孔子の教育は個性本位であり、啓發主義であり、鍛練道であるといへる。

子食_ニ於_レ有_ル喪_者之側_ニ未_ダ嘗_テ飽_カ也_。子於_ニ是_日哭_則不_レ歌_ハ。

「子喪あるもの側に食すれば未だ嘗て飽かざるなり。子は日に於て哭すれば則歌はず。」

大意。孔子は喪中のものゝ傍にあれば食に味がなかつた。又葬式に列した日には一日中歌はれなかつた。

思索。人の死を悲しむは人情であるが、喪にあるものゝ傍では食に味がなく、弔問の日には歌が歌へぬほど人の悲しみを哀しむことは常人の能くするところでない。これすべての人を自己の兄弟のやうに感ずる孔子の聖にして到り得る境地である。

子謂_ニ顔淵_ニ曰_フ用_レ之_則行_ヒ。舍_レ之_則藏_ス。惟_ト我_ト與_レ爾_有之_夫。子路曰_フ子行_ニ三軍_一則_レ誰_ト與_ニ。子曰_フ暴虎馮_レ河死_而無_レ悔_者。吾不_レ與_セ也_。必_ス也_臨事_而懼_。好_レ謀_而成_者也_。

「子顔淵に謂ひて曰く之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏す。たゞ我と爾とこれあるかな。子路曰く、子三軍を行はゞ則ち誰と共にせん。子曰く暴虎馮河死して悔なきものは吾與せざるなり。必ずや事に臨んで懼れ謀を好んで成さんものなり。」

大意。孔子が顔淵に向つて「用ひられたならば起つて國政を革新し、用ひられなければ、茅屋に隠退して悠々たるものは、たゞ我と汝と二人だけであらう」と言はれた。子路が傍にあつていふ「もし先生が大軍を率ゐて他國と戦争される如き場合あらば誰と共にせられますか」。孔子は曰はれた。「猛虎を手打ちにし大河を徒渉りするやうな蠻勇を奮ひ、死して悔いない人間とは、私は事を共にしない。必ずや、事に臨んで懼れ、慎重な謀を用ふるものに與するであらう。」

思索。「英雄首を回せば則ち神仙」といふ。眞に超凡脱俗の風格あるものでなければ、時代を革新する功業は建てられない。功利に徹底した手腕家には超俗の風韻がなく、脱俗超越の趣味をもつた人間には政治的才幹が缺けてゐる。横井小楠曰く「功利に走らず禪に流れず、大丈夫の心聖賢を希ふ」と此語味ふべきである。事に當つて懼れる敏感な神經をそなへ深謀遠慮の知識と果敢決行の膽勇とがあつて、之を聖雄と稱することが出来る。聖雄出で、始めて世界非常時を打開し得る。英雄の資質は萬人に求められないけれど、聖賢の道は萬人に責めなければならぬ。英雄の天賦を育成するに

聖賢の道を以てす。こゝに人類救済の使命が發祥されるであらう。

子曰富而可求也。雖執鞭之士、吾亦爲之。如不可求、吾從吾所好。

「子曰く富にして求むべくんば執鞭の士と雖も吾亦之を爲さん。もし求むべからずんば、吾は吾好むところに從はん。」

大意。孔子曰く「富が人間の求むべきものであつて必ず得られるものであれば、私は馬方のやうな勞役でも辭せないであらう。けれども富が運命であつて、人間の求むべきものでないとしたならば私は自分の好むところに従事するであらう」

思索。富は財貨であり、財貨を代表するものは金である。「地獄の沙汰も金次第」金があれば何でも出来る。金が無ければ何も出来ない。金は昔から人間の信仰の對象である。現代はいよいよこの信仰が擴大され、拜金宗が全人類を征服する有様となつた。すべての人間が意識的に無意識的に金を求めて奔走してゐる。この社會に立ちこの雰圍氣の中に生きていく現代人は到底この事實に眼を蓋ふことはできない。むしろこの深刻な事實に直面して解決の鍵を握るべきである。「金を得て金をよるこび金なくて悲しみのなき金を求めよ」金を得て喜び金無くして悲しまぬ工夫が現代の道徳であ

る。人々は大部分金にあこがれ、金に束縛され金を悪用しつゝある。金を得て益々金にあこがれ、いよ／＼束縛され、いよ／＼之を悪用する。無意識的に悪用し或は善用すと思ひながら、その實は皆悪用しつゝある。金を得ても眞の喜びを感じず、金を善用する方法を知らない。千を得ては萬を望み、萬を得ては億を望み、慾望は愈増長して満足することがない。萬の富を有するものは百を失うて悲しみなげき、千を失うては悲觀落膽するであらう。「一簞の食一瓢の飲陋巷にあつて」悠々其生を樂しむものは見られない。巨萬の金を得て一圓も之を悪用せぬ自信をもつ人間であつて、眞に金の喜びを解して金の悲しみを知らず、非常時局の財政經濟を擔ふ資格があるといへよう。

子之所_レ慎_レ齊_レ戰_レ疾_レ。

「子の慎しむところは齊、戰、疾。」

大意。孔子の特に慎しまれたのは齊（祭りの前に當つて身心を潔齊する儀式）と戰と疾（病）とであつた。

思索。齊は敬虔を極めて神に通ずる行事であり、戰は國家存亡の關する事件であり、疾は死生にかかはる出來ごとである。故に特に慎しみを加へられた。

子在_レ齊聞_レ韶。三月不知_レ肉味。曰_レ不_レ圖爲_レ樂之至_レ於斯_レ也。

大意。孔子が齊に居た時韶（舜の音樂）を聞いて三月の間、肉の味を知らなかつた。そして嘆じていふ。「音樂の美が斯くまでに至らうとは想はなかつた」

思索。音樂の美に感じて恍惚として三月の間肉の味を忘れたといふことは孔子が音樂の天分ゆたかなると共に「韶」がいかに高雅を極め善美を盡した音樂であつたかを物語るものである。韶がどんな音樂であつたかは今日傳はつてをらぬけれど、王道が禮樂を以て政治の要具としたのを見て、それが民衆の高尚優雅の情操を養ふ上に宗教的効果をもたらすものであつたことは明かである。「三月肉味を知らず」の「三月」は「三日」の誤りか。

冉有曰夫子爲_レ衛君_レ乎。子貢曰諾吾將_レ問_レ之。入曰伯夷叔齊何人也。曰古之賢人也。曰怨乎。曰求_レ仁而得_レ仁又何怨。出曰夫子不_レ爲_レ也。

「冉有曰く夫子衛の君を爲けんか。子貢曰く諾吾將に之を問はんとす。入りて曰く伯夷叔齊は何人ぞや曰く古の

賢人なり。曰く怨みたりや。曰く仁を求めて仁を得たり、又何ぞ怨みん。出て曰く夫子は爲けざるなり。」

大意。孔子が衛の國に居つた時、衛君は他國に出奔してゐた父と王位を争うて戦つた。そこで弟子冉有が子貢に向つて「先生は衛君の味方をされるであらうか」と問うた。子貢はこれをたしかめるために孔子の室に入つて「伯夷叔齊は如何なる人物でありますか」といふ質問をした。孔子は「古の賢人である」と答へられた。子貢は更に「彼等は世を怨み人を怨みはしませんでしたか(伯夷叔齊は時に用ひられず首陽山に餓死した)」と反問した。すると孔子は「否、彼等は仁を求めて仁を得た。何の怨むところがあらう」と答へられた。子貢は此問答によつて孔子の意向をたしかめることができたので、室を出て、冉有に言うた。「先生は衛君の味方をなされません」

思索。衛の靈公が世子蒯聵を逐うたので、蒯聵は晋に出奔した。蒯聵の子輒が立てられて世子となつた。たま／＼靈公が薨じ輒が衛君となつた。そこへ父蒯聵が王位を奪ふ目的を以て晋から歸つて來たので、父子の間に戦争が起つた。孔子は勿論輒に屬して蒯聵と戦ふやうな淺ましい群に投ずるわけではない。けれども衛に仕へてゐる孔子として衛君に味方することは當然の義務と考へられないでもなかつた。故に冉有はこの疑問を子貢に質した。子貢は孔子の心もちを想像してゐたので、直接此事件に觸れずに伯夷叔齊の事を問うた。そして自分の想像の誤らなかつたことを知つた。

子曰飯^ヒ疏^ニ食^ヲ飲^レ水^ヲ曲^レ肱^ヲ而^レ枕^之。樂^亦在^リ其中^ニ矣。不^ニ義^ニ而^レ富^且貴^於我^ニ如^ク浮^雲。

「子曰く疏食を飯ひ水を飲み肱を曲げて之を枕とす樂しみ亦其中にあり。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。」

大意。粗食をして水を飲み、肱を曲げて枕にするやうな生活でも楽しみはその中にある。不義によつて得たところの富や地位は自分にとつて、何の價値もない。何の幸福をも感ぜられない。

思索。徳行の結果として得たところの富や地位は當然貴い價値であり、自他の幸福である。しかし不義不徳の行爲によつて得た富や地位は禍の種であつて、却つて身を苦しめ人を惱ますばかりである。

子曰加^ヘ我^ニ數^ニ年^ヲ以^テ學^{バシ}易^ヲ可^シ以^テ無^ク大^ニ過^一矣。

「子曰く我に數年を加へて以て易を學ばしめば以て大過なかるべし——「五十」は「卒」の誤りならん。」

大意。孔子は晩年に易を研究していうた「私が今數年かゝつて易を學ぶことができたならば事に處して大なる過ちなきを得るであらう。」

思索。易は天人合一の哲理を述べたものである。即ち自然と人生との關係交渉を明らかにし、これによりて過ちを改めて善に遷り、禍を轉じて福となす處世哲學である。従つて人間の一舉一動。自己一念の微も、それが全宇宙と端的に連なつてゐることを覺り、恐懼戒慎の内生活を深刻ならしめる道德書である。「易簡にして天地の理を得る」は易の主眼であつて、複雑な人間生活を一貫する簡明な原則を發見するがその目的である。けれども文辭があまりに抽象的であり、象徴的である爲に相當難解であつて獨斷的に陥り易い。されども「神にして之を明らかにするは其人に存す」黙して之を識り、言はずして信なるは徳行に存す」とあるによつて、易は徳行の積集から得た信念にもとづく直感靈覺の一表現であると見れば大した間違ひは無い。易を單に吉凶を判斷し豫言する賣卜、占筮であると考へるのは脱線である。

子所ニ雅言ニ詩書執禮皆雅言也。

「子の雅に言ふ所、詩書執禮皆雅に言ふなり。」

大意。孔子は常に詩と書と禮とを語られた。

思索。詩は人情、風俗、博物の教養であり、書は王道政治の學問であり、禮は克己儉讓を本として

社會生活の親愛調和を打建てる作法制度である。人間は日常、詩、書、禮に就て語らなければ、必ず功利、權勢、享樂の雜談妄想に耽るものである。向上と墮落との岐路はこゝにある。

葉公問ニ孔子於子路。子路不レ對。子曰女奚不レ曰。其爲レ人也發レ憤忘レ食樂以忘レ憂。不レ知ニ老之將レ至云爾。

「葉公孔子を路に問ふ。對へず。子曰く汝奚ぞ曰はざる。其人と爲りや憤を發して食を忘れ、楽しんで以て憂ひを忘れ、老の將に至らんとするを知らずと。云爾。」

大意。葉公が孔子の人物を子路に問うた。けれど子路は答へなかつた。孔子が之を聞いて、子路に曰はれた「汝は何故に斯く答へなかつたか。彼の人と爲りは發憤勉學して食を忘れ、道を求め善を楽しんで世の憂ひを忘れ、老の至るを知らない人間である。」と。

思索。葉公は楚の縣令で、自ら僭して公と稱するやうな權勢と虚榮に固まつた人物である。子路は斯様な人間に孔子の人格を説明したところで分るものでないと考へて答へなかつたであらう。虚榮の強い人間は努力せず名聲をあげることに熱中するものである。それ故に孔子は子路に「發憤して食を忘れる」といふやうな努力精神を注告して葉公を反省自覺させたいと思はれたのである。如

何なる場合、何人に對しても、いさゝかにても、その人の向上奮起を促したいと念願して決して人を見棄てるに忍びないのが孔子の精神であつた。

堅忍不拔、向上前進して一時も倦怠なく、一日も停滞なく、死して後已むの覺悟をもつて聖學に従事するのが、孔子の偉大なる生涯であつた。

子曰我非^ズ生^レ而^レ知^レ之者^ニ好^シ古^ニ敏^ニ以求^レ之者^也也。

「子曰く我生れながらにして之を知るものに非ず。古を好み敏にして以て之を求めたる者なり。」

大意。孔子曰く、「私は生れながらに道を知つてゐるものでない。古聖の學を好み、敏捷に實踐して之を求めたものである。」

思索。當時世人は孔子を評して、生れながら道を知り徳を備へた聖者であるといふものがあつた。それで孔子は世人の批評を訂正して、古聖の教の信行を外にして道を知ることのできないのを明らかにされた。これは孔子の眞實の告白であると考へられる。もし孔子が生知の天才であると自ら思ひながら、この言葉を發したものとすれば教育者としての熱意は湧かなかつたであらう。聖賢の道は萬人の知らねばならぬものであり、萬人の知り得べきものであり、従つて萬人に責むべきものである。

あるといふのが孔子の信念であつた。こゝに萬世に向つて道德を宣揚した大勇猛心が發したのである。

子不^レ語^ラ怪^ニ力^ニ亂^ニ神^一。

「子怪力亂神を語らず。」

大意。孔子は怪と力と亂と神とを語らなかつた。

思索。當時の人々は好んで妖怪や暴力や争亂や鬼神の説をなしたが、孔子は教を害ふものとして之を語らなかつた。孔子の常に語るところは理義と徳行と政治と禮樂とであつた。

子曰三人行^ハ必有^シ我師^ニ焉^一。擇^ニ其善者^ヲ而從^レ之^ニ。其不善者^ニ而改^レ之^ヲ。

「子曰く三人行へば必ず吾師あり。其善きものを選んで之に従ひその不善なるものにして之を改む。」

大意。三人の行ひを觀察すれば必ず自分の師とすべきものがある。その善いものを選んで之を行ひ、その不善なるものを見ては反省して之を改めるがよい。

思索。人には各長所があり短所がある。謙虚な心を以て人の長所を採れば人は皆我師である。純眞

な眼を以て自我を内省すれば、そこには醜惡な利己意識があり、虚偽が潜んでをり、改むべき多くの不善のあることを見逃し得ないであらう。この現實をはつきりと認識することが貴い。そして驕氣と怠慢とを撃退するが肝要である。人を指導し人の師表たらんと欲する自尊心を否定するのでない。自尊心の根柢に嚴肅な自責の鞭を放たぬことが大切である。此意味でキリスト教の罪惡觀や他力佛敎の惡人成佛の思想は一面に於て人生の眞實を表はすものといへる。

子曰天生^ズ德^ヲ於^レ予^ニ。桓魋^レ其^レ如^レ予^ヲ何。

「子曰く天徳を予に生ず。桓魋それ予を如何。」

大意。徳行を積めば天祐の信念が生ずる。何ものも之に敵對することはできない。

思索。孔子が宋に在つて弟子と禮を大樹の下で講習してゐた時桓魋といふ暴人が徒黨を率ゐて來て孔子を殺さうとした。孔子は泰然として「吾は天の使命を受けてゐる。桓魋に何ができる」と豪語された。孔子の豪語は單なる豪語でない。信念の叫びである。天は人間生命の本源であり、人類意識の生長點である。聖賢の道は天の命令である。天の命令に従ふものに天祐のあるのは當然である。天は形體でなく想像でなく理論でなく觀念でない。機に觸れ縁に由つて内心に直感される實在

である。或は漠然と、或は明確に或は強く、或はほのかに。その感得せらるゝは、自己の思慮分別によるのでなく、たゞ機縁の觸發である。

「ありがたやおのが心に願ふこと、皆かなはんとふと思はるゝ」

子曰二三子以^テ我^ヲ爲^レ隱^ス乎。吾無^シ隱^ス乎爾^ニ。吾無^シ行^フ而不^レ與^ニ二三子^ト者^上是^レ丘也。

「子曰く二三子我を以て隠すとなすか。吾爾に隠すことなし。吾行ふとして二三子と與にせざるものなし。これ丘なり。」

大意。孔子が門人等にいはれた。「私は諸子に對して一點の隠すところもない。私はありのまゝの生活を諸子の前に公開してゐる。これが私の主義である。」

思索。孔子の訓へられるところは日常の人情、倫理、政治、經濟のことがらであつて、何の奇說異論もない。それ故に門人等は或は孔子が深遠な學問を隠して發表されないのではないかと疑うた。そこで孔子は我道は高遠不可思議な理論でなく、日用實徳の修積に外ならないといはれ、崇高な人格、偉大な聖業も不斷積善の結果であることを明かにされた。

子曰^テ曰^テ教^ヲ。文行忠信。

「子曰を以て教ふ。文行忠信。」

大意。孔子の教法は、聖賢の遺文を研め、之を行ひに移し、之に全力を盡し之を心に信ずるといふ四つの階段から成立つた。

思索。聖賢の遺文を熟讀すれば必ず之を實行する心もちになる。之を實行して心を盡し力を極めれば道に對する信仰が獲られる。信仰に發達があり段階がある。聖賢の經書は之を批評的に讀み又は字句の解釋に拘泥してはならぬ。最初から信仰實踐の覺悟を以て味讀すべきである。太上は天を師とし、其次は人を師とし、其次は經を師とす。直ちに天を以て師とするは聖賢である。世に聖賢賢者が存在すれば人を師とすることができる。聖賢の存在しない時代にあつては、聖賢の遺文經書を師とする以外、向上の道はない。經を師とするは、また天を師とする所以である。

子曰^バ聖人吾不^レ得^テ而見^レ之^ヲ矣。得^レ見^ル君子者^{ナリ}斯可^レ矣。子曰^バ善人吾不^レ得^テ而見^レ之^ヲ矣。得^レ見^ル有^レ恒^ル者^{ナリ}斯可^レ矣。亡^{クシテ}爲^レ有^レ虚^{クシテ}而爲^レ盈^ス。約^{クシテ}而爲^レ泰^ス。難^{クシテ}乎有^レ恒^ル矣。

「子曰く聖人は吾得て之を見ず。君子者を見ることを得ば、これ可なり。子曰く善人は吾得て之を見ず。恒ある

ものを見ることを得ばこれ可なり。亡くして有りとなし、虚しくして盈てりとなし、約にして泰となす。難いかな恒あること。」

大意。孔子曰く聖人には逢ふことができなくとも、聖賢を理想とする君子には逢ひたいものである。生れつき善を好む善人には逢へなくとも、せめて眞面目に善を爲さうと考へてゐる「恒ある者」にでも逢ひたいと思ふ。世の中には無いものを有りとし、空虚なものを充實と見せかけ、窮しながら富裕な態度を装ふやうな虚榮が多い。眞面目に善を行はんと努める人間も容易に見當らない。

思索。孔子は「聖と仁との如きは自分の及ぶところでない。自分はたゞ學んで厭はず人を教へて倦まぬものである」といひ又「君子の道を行ふことは自分には中々できない」というて仁と君子とを容易に許されなかつたけれど、他の一面に於ては「仁遠からんや、吾仁を欲すれば、こゝに仁至る」といひ、又門人子賤や衛の蓬伯玉を「君子なるかな」と稱揚されてゐる。吉田松陰は「聖賢企て難しと雖も吾志平昔にあり」というた。自ら聖賢を目標として切實に道を信行するもの即ち仁者であり君子であるとするのが孔子の訓へである。「善人」は天性善を好む人間であるが、未だ聖賢の道を信行するに至らないものである。道の信行は易きに似て容易でない。善人も機縁なければ生涯聖賢の道知らずして終るであらう。まして善人ならぬ人間は虚榮と功利に奔走して空しく朽ち果てる

外はない。孔子が「恒あるものを見るを得ば可なり」といはれたのは救世の念願痛切なる叫びであると思はれる。

子釣而不網。弋而不射宿。

「子釣して網せず、又して宿を射ず。」

大意。孔子は魚釣はされたけれど、大網を河に張つて一擧に漁るやうなことをせず、又矢に糸をつけて鳥を射取るとはされたけれど、宿鳥を射るやうなことはしなかつた。

思索。肉食を禁じ殺生を禁ずるやうなことは、ある特殊な宗教家でなければできないことである。全く魚も鳥も捕へなければ、人間生活の向上を妨げるであらう。中庸の道は極端なことを避けて不可能なことを人間に強いけない。魚鳥を食料としても、それが残忍にならないところに教の主旨がある。

子曰蓋有不知而作之者。我無之也。多聞擇其善者從之。多見而識之。知之次也。

「子曰く蓋し知らずして之を作るものあらん。我は是れ無きなり。多く聞いて其善きものを選んで之に従ふ。多く見て之を識るは知の次なり。」

大意。世の政治家には道知らずして獨斷的に法律制度を作るものがあるが、私は之を爲さない。多く聞いてその善きものを選んで之に従ふがよい。多くの善事を見て識見を高めるは道を知るの次と云へる。

思索。自ら是とし自ら高しとして獨斷を以て人に強いるものは道知らざる徒である。人の善を喜び衆善を探り用ふるのが智者であり仁者である。

互郷難與言。童子見。門人惑。子曰與其進。不與其退也。唯何甚。人潔己以進。與其潔。不保其往也。

「互郷與に言ひ難し。童子見ゆ。門人惑ふ。子曰く其進むを與す。其退くを與さず。唯何ぞ甚しき。人已れを潔くして以て進まば其潔きを與す。其往を保たざるなり。」

大意。互郷は風俗が醜惡で、共に語ることができない部落である。この地の少年が孔子を訪問したので取次の門人が之に惑うた。そこで孔子は言はれた。「訪問するものを拒むはよろしくない。どんな人間であらうとも、純な心もちで訪問するならば、歡んで之に與すべきである。過去や將來の行

爲に對しては、必ずしも追窮するに及ばない。」

思索。人間の本性は善である。どんな墮落した生活でも、良心の光りは失はれてゐない。醜惡な生活をしてゐる人間でも、純情を以て立向ふ態度は尊重すべきである。伯夷叔齊は人の舊惡を思はないから、怨みが無かつた。孔子は之を賞讃して、仁を求めて仁を得たりと評せられた。怨みなきは即ち徳である。初めから人を惡人視したり小人扱ひにするのは君子の態度でない。人の純眞な感情と向上の芽ばえとを、どこまでも助長するのが教育である。けれども、それは君子小人の差別なく之と親しむ意味でない。君子にも時には過惡があり小人の生活にも時には善美がある。君子を見ては心から推服し小人に對しては一善をも見棄てない宏量が肝要である。

子曰仁遠乎哉。我欲仁斯仁至矣。

「子曰く仁遠からんや。吾仁を欲すればこゝに仁至る。」

大意。仁は遠方にある目標でなく、すぐ脚下に一步／＼經驗される實感である。

思索。仁はもとより高遠の理想であり、人間至上の道であるが、それは同時に日常生活に一步一步實現される行動であり、自得でなければならぬ。一切の名利、權勢とは別な純眞な價值意識の上に

築かれる充實感が仁である。故に中心之を求むれば此一日、此今の今に於て到り得るところの境地であり樂地でなければならぬ。

陳司敗問昭公知禮乎。孔子曰知禮。孔子退揖巫馬期而進之曰吾聞君子不黨。君子亦黨乎。君取於吳爲同姓。謂之吳孟子。君而知禮孰不知禮。巫馬期以告。子曰丘也幸。苟有過人必知之。

「陳の司敗問ふ。昭公禮を知るか。孔子曰く禮を知れり。孔子退き巫馬期を揖して之を進めて曰く吾聞く君子は黨せずと。君子亦黨するか。君吳に取り同姓たり。之を吳孟子といふ。君にして禮を知らば孰か禮を知らざらん。巫馬期以て告ぐ。子曰く丘や幸なり。苟も過あれば人必ず之を知る。」

大意。陳の司敗が孔子に「魯の昭公は禮を知つてをられますか」と問うた。孔子は「知つてをられる」と答へた。司敗は孔子の弟子の巫馬期に向つて訴へた「君子は黨派を立て、惡を隠すやうなことをせぬ筈であるが、孔子の如き君子も亦黨派を立つるのであるか。昭公は夫人を吳から迎へた。吳は魯と同姓の國である。同姓から娶らないのは禮法である。もし昭公が禮を知るとすれば、世に禮を知らぬものは一人もないであらう。」巫馬期がこの言を孔子に傳へた。すると孔子はいはれた。

「ア、それは私の過ちであつた。しかし私は幸である過ちがあれば必ず人が知つて忠告してくれるから直に之を改めることができる。」

思索。陳の司敗が「昭公禮を知るか」と問うた時、孔子は昭公が禮儀作法に習熟してゐると思つて「禮を知れり」と答へられた。そして昭公が呉から夫人を娶つて「同姓に娶らず」といふ禮の大法を破つてをられることに氣づかなかつた。司敗が巫馬期に告げた言葉を聞くに及んで孔子は自分の答が過つてゐたことに氣がついた。孔子は勿論魯君昭公のために惡を隠して善を擧げたいと希うてをられたに違ひない。それが偶然、司敗に對して「禮を知れり」と答へる結果になつたであらう。司敗は心に昭公の夫人問題を意識しながら孔子に質問を試みたのである。孔子は殆んど無意識的に答へられた。もし孔子が此時昭公の夫人問題を意識してをられたなら必ず「知れり」と答へるには躊躇され「知らず」と答へるには忍びないところがあつて、困惑されたであらう。それが全く自然に平然と「知れり」と答へられ、しかもそれが直ちに過ちとして訂正されたところに孔子の從容迫らぬ公明な心境がうかがはれる。「過あれば必ず之を知る」とある「必」の一字に眼目が置かれねばならぬ。常人の過ちは過ち多きゆゑに人がその悉くを知らない。「君子の過は日月の蝕の如く過てば人皆之を見る。改むれば人之を仰ぐ。」人の忠告を感謝し喜んで自己の過ちを改め得るものは君子である。

子與人歌而善必使反之而後和之。

「子人と歌うて善ければ必ず之を反せしめて而して後に之に和す。」

大意。孔子は人の歌ふを聞いて感心すれば、再びそれを繰返させて、自分も一緒に歌はれた。

思索。人の美を美とし、人の善を善として一事一藝の末までも之を推奨してやまないのが、聖賢の心である。人と唱和して樂しむ。悠々徳に酔ふの境といふべきである。

子曰文莫如吾猶人也。躬行君子則吾未之有得。

「子曰く文は吾猶ほ人の如きことなからんや。躬君子を行ふは、則ち吾未だこれ得ることあらず。」

大意。孔子曰く「詩書禮樂の如き聖賢の遺文を研究することは敢て人に譲らないけれど、聖賢の道を実行することは、まだ／＼自分の及ばないところである。」

思索。記誦詞章の末に没頭して一生を終るは俗學の徒である。生命の根本を培養するのが君子の學である。

子曰若^{キハト}聖與^レ仁則吾豈敢^テ抑^セ爲^レ之^ヲ不^レ厭^ハ。誨^レ人不^レ倦^ニ。則可^レ謂^フ云^レ爾已矣。公西華曰^ク正唯弟子不^レ能^ハ學^ブ也。

「子曰く聖と仁との如きは則吾豈敢てせんや。抑も之を爲びて厭はず、人を誨へて倦まず、則ち爾かいふといふべきのみ。公西華曰く正に唯弟子學ぶこと能はざるなり。」

大意。聖人仁者といふやうな境地は到底自分の企て及ぶところでない。自分はたゞ聖賢の道を學んで厭ふことなく、之を人に傳へて倦むことなきものである」と孔子が告白された。弟子公西華が之を聞いて曰うた「それこそ先生の聖たる所以であつて、吾々門人の學ぶことのできない點である」と。

思索。孔子は聖と仁とを以て理想とされた。時人は孔子を目して聖人仁者とした。しかし孔子自身は「まだ君子の道を得ず」として、たゞ聖賢の教を傳習して倦まず厭はざるを以て自ら任ぜられた。けれども、弟子等から之を見れば、其德行に於て其學藝に於て、孔子は既に聖であり仁であると信ぜられた。日常親近してゐる門人からして斯やうな尊信を受けてゐるところに、孔子の偉大な人格と德行とが見られる。

子疾病子路請^フ禱^ス。子曰有^レ諸。子路對曰有^レ之。誅曰禱^ニ爾于上下神祇。子曰丘之禱久矣。

「子の疾病なり。子路禱らんと請ふ。子曰くこれありや。子路對へて曰くこれあり。誅に曰く上下の神祇に禱爾すと。子曰く丘の禱ること久し。」

大意。孔子の病が重態であつた時子路が神に禱らんと請うた。孔子が「どういふ心もちで祈るのか」と問はれると、子路は「天地の神々に御病平癒を祈願いたします」と答へた。すると孔子は曰はれた。「そうした意味ならば私は平素不斷に祈願してをつた。」

思索。孔子は神を敬ひ祭りを重じた。「神を祭ること神の在すが如し」祭りの前に飲食、衣服、居室を改め心身を潔淨ならしむる「齊」の儀式は最も嚴肅に行はれた。孔子は社會人生の一大事に當り、精神の決定統一のために神明に祈願することは必ずしも之を否定されなかつた。しかし「苦しい時の神頼み」といふやうな目前の功利的結果を期待する御利益宗の祈りは「義」に反き徳を害ふものとして之を斥けられた。

子曰奢則不遜。儉則固。與^ニ其不遜^一也。寧^ニ固^一。

「子曰く奢れば則ち不遜、儉なれば則ち固なり。其不遜ならんよりは寧ろ固なれ。」

大意。奢れば心が傲慢になり、儉なれば頑固になる。けれども傲慢よりも寧ろ頑固の方がよい。思索。奢りは悪徳であり、儉約は美德であるが人情の弱點として、俗世間は奢りを喜び儉約を卑しむ。従つて奢るものは其心が必ず傲慢に流れて自ら覺らない。又儉約なるものは頑固になり利己主義に陥るやうになる。しかし頑固の弊害は自分一人が小さくなるに止まるのであるが、傲慢は道義を無視して社會に大害を及ぼすに至る。故に孔子は特に此訓を述べられた。

子曰君子坦蕩蕩。小人長戚戚。

「子曰く君子は坦かにして蕩々たり。小人は長く戚々たり。」

大意。君子は 心が平和で態度がノビノビとしてをり小人は常にコセ／＼として煩悶してゐる。思索。君子は人間最高峰を目標として利慾權勢を超越するから心廣く悠々たる生活を送る。小人は享樂にあこがれて目前の利害權勢に没頭するがゆゑに生涯を憂愁煩惱の間に終らなければならぬ。

子温而厲。威而不猛。恭而安。

「子温にして厲し。威にして猛ならず。恭にして安し。」

大意。孔子は温和の中に毅然たるところがあり、威嚴あつて猛々しからず、恭謹であつて、おのづから禮節に合してをられた。

思索。人間の性格と氣象とは、一方に偏し易いものである。温和なものは柔弱であり、威嚴あるものは冷酷であり、恭謹なものは固ぐるしくなる。性格の偏を脱し氣象の癖を去つて中庸至正の域に達するものは聖人である。

泰伯第八

一七〇

子曰泰伯其可謂至德也已矣。三以天下讓民無得而稱焉。

「子曰く泰伯はそれ至徳といふべきのみ。三たび天下を以て讓る。民得て稱するなし。」

大意。泰伯は周の王室を嗣ぐ身分にあつて、天下萬民のために慮り、三度王位を讓つて蠻地に隱遁した。しかも後世の民は泰伯の心情を理解せず、その偉徳を知るものが無かつた。泰伯の徳は至極に達したものといへる。

思索。泰伯は周の祖先大王の長子である。次弟は仲雍、末弟は季歴といふ。季歴の子昌は聖徳を以て知られた。そこで泰伯は次弟仲雍と共に王位を季歴に讓ること三たび、遂に蠻地に逃れた。季歴が繼ぎ昌が立つて西伯となるに及び、天下三分の二を領し其子武王に至つて遂に天下を統一して周朝八百年の基礎を確立した。文王武王の聖業もその源は泰伯讓位の隱徳に由るのである。その後一千年、孔子出で、始めてその至徳が顯彰されるに至つた。口に社會國家を叫び心は權勢名利に燃えるものが多い。地下千尺に埋れて人類福祉の捨石となつて悔いなきものが至上の徳行である。

子曰恭而無禮則勞。慎而無禮則慙。勇而無禮則亂。直而無禮則絞。

「子曰く恭にして禮なければ則ち勞す。慎しんで禮なければ則ち慙る。勇にして禮なければ則ち亂る。直にして禮なければ則ち絞す。」

大意。恭しくして禮法に合はなければ人の感情を害ひ慎しんで禮法に合はなければ、臆病になり、勇があつて禮法に合はなければ亂暴になり、直であつて禮法に合はなければ冷酷になる。

思索。恭、慎、勇、直はいづれも美徳であるが、禮法に習熟しなければ中和を失つて美徳が却つて反對の結果を生ずるやうになる。人間の性質はそれ／＼長所があると共に短所がある。長所を發揮して短所を補ふためには禮法を習うて感情を洗練しなければならぬ。泣く眞似をすれば悲しくなり、笑ふ顔をすればをかしくなる。感情を陶冶するためには表出の上の鍛練としての禮法が大切である。

君子篤於親。則民興於仁。故舊不遺則民不偷。

「君子親に篤ければ則ち民仁に興る。故舊遺れざれば則ち民偷からず。」

一七一

大意。為政者が親戚に情を盡せば民衆は道德に感激するやうになり、舊知の人を疎かにしなければ人情風俗が純厚になる。

思索。為政者の行爲は民衆に影響するところ最も大である。小善も民衆の模範となり、小悪も民衆の模倣となつて、池の中に礫を投げ入れたやうに擴大され傳播されていく。指導的立場にあるものは殊に獨りを慎しみ言行一致を強要せねばならぬ。

曾子有疾召門弟子。曰啓予足。啓予手。詩云戰戰兢兢如臨深淵。如履薄冰。而今而後吾知免夫小子。

「曾子疾あり門弟子を召して曰く予足を啓け、予手を啓け、詩に云ふ。戦々兢兢々として深淵に臨むが如く薄氷を履むが如し、今にして後に吾免れたることを知るかな小子。」

大意。曾子が疾重き時、門人等を召んでいうた「私の足を開いて見よ。私の手を開いて見よ。少しも傷めた痕が無いであらう。詩に戦々兢兢々として深き淵に臨み、薄き氷を踏むが如しといはれてゐるやうに我一生を懼れ慎しんで、父母の遺した我身を大切に出来た。今生涯の終りに面して私は責任を免れた心安さを覚える。」

思索。曾子は孝道の理想をもつて攝生に注意し、修養に努め、父母の遺愛たる我心身を畏れ度しみ、養ひ鍛へて生涯怠らず、死の瞬間まで緊張を失はなかつた。「戦々兢兢々」として恐懼戒慎するは、いかにも窮屈であり不自由束縛のやうであるが、自覺して自己を檢束し鍛練することが内面生活を解放し眞の自由を開拓する唯一の道であるを知らねばならない。「其身に樂しみあらんよりは、其心に憂ひ無きにいづれぞ」の古語大によし。

曾子有疾。孟敬子問之。曾子曰。鳥將死其鳴也哀。人之將死其言也善。君子所貴乎道者三。動容貌。斯遠暴慢矣。正顏色。斯近信矣。出辭氣。斯遠鄙倍矣。籩豆之事則有司存。

「曾子疾あり孟敬子之を問ふ。曾子言て曰く鳥の將に死せんとす。其鳴や哀し。人の將に死せんとす其言ふや善し。君子道に貴ぶところの者三。容貌を動かして斯に暴慢を遠ざけ、顔色を正しくして斯に信に近づき、辭氣を出して斯に鄙倍を遠ざく。籩豆の事は則ち有司存す。」

大意。曾子が病氣の時孟敬子が見舞うた。曾子が言はるゝに「鳥の死なんとする時は其聲悲しく、人の死なんとする時其言葉は善である。政道に貴ぶところのものが三ヶ條ある。容貌を動かしては

暴慢を遠ざけ、顔色を正しくして信實に近づき、言葉を出しては鄙悖を遠ざける。この三つの修行が統治の任に當るものゝ根本要條である。禮器の取扱ひ等作法儀式の細則に至つては屬官に一任しておいて差支ない。

思索。「吾正を得て斃る」と叫んだ曾子。死に直面しながら、詢々として魯の大夫孟敬子に政道の要條を説く崇高な曾子の風貌髣髴たるものがある。「鳥の將に死なんとす、その聲悲し。動物は肉體以外に生命がない。故に生の執着が最も強い。人の將に死なんとする、その言善し」人間は肉體以外に生命がある。故に身後の身を想ふ。死に直面すれば私慾消えて本然の性が顯れるから其言は善である。容貌、顔色、言語が禮に合し義に中るは徳行の光りである。政道の根本は制度組織の末枝ではなく、人格威儀の力にあることを萬世の政治家に向つて遺言されたものは此章である。

曾子曰以能問於不能。以多問於寡。有若無實。若虛。犯而不校。昔者我友嘗從事於斯矣。

「曾子曰く能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが如く、實つれども虚しきが如く、犯せども校らず、昔吾友嘗て斯に従事す。」

大意。曾子が言うた。才能があつても、才能の無いものに問ひ、知識が多くても寡ないものに問ひ、功蹟があつても無き如く、徳が實ちても愚かなる如く、人が無道を敢てしても、之に抵抗しない。以前に吾々の仲間は斯様な態度で學業に従うた。

思索。自己の智能を人に示し、功蹟が社會から認識されるを願ふのは人情の常である。人と天分を競ひ名聲を争ふことは、修養の過程として免れない人情であるが、學問の第一義は此處を超越するにあることを忘れてはならぬ。「聖は天を希ひ賢は聖を希ふ」聖賢の道は天を法とし天に則るものである。天は萬物を包容し萬人を惠愛する。知識才能を以て人と争つたり功蹟や權力をもつて人に勝ち誇るは天心に反くものであつて聖賢の道でない。聖賢の道は人と對抗し人に勝ち誇る傲慢の心を去つて謙虚無我の一點から出發しなくてはならぬ。

曾子曰可以託六尺之孤。可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。君子人與。君子人也。

「曾子曰く以て六尺の孤を託すべく以て百里の命を寄すべし。大節に臨みて奪ふべからず。君子人か。君子人なり。」

大意。君侯の亡き後に幼少の君を擁護して、その國を治め、よく國家の使命を果し、死生の間に處して節操を失はない人間があつたならば、それこそ眞の君子というてよい。

思索。君侯が薨じ嗣子幼少の場合には奸臣がその隙に策謀して國家は危殆に陥るを免れない。此時にあつて、よく幼君を擁護していくことは智仁勇兼備の人物でなければできない。この大任を能くするものは國家の使命を遂行し死生の際に、その節義を全うすることができる。之を眞の君子といふ。君子に責むるところ重且大である。功利小成に甘んじ一身の安きを願ふものゝ能くすべきでない。昔加藤清正は晩年論語を愛讀して手に巻を放たなかつた。秀吉の没後その重臣の多くは皆徳川氏に附隨する間にあつて、獨り清正のみ豊臣氏の恩義を忘れず、終生秀頼を庇護して捨てなかつた。嘗て前田利家と語つて論語の此章を擧げ「今日に於て此意を忘れるものは人臣でない」と言うた。清正の如きは、よく論語を讀んだものというてよい。

曾子曰士不可^{カラ}以^テ不^ニ弘毅^{ナラ}。任重^{ウシテ}而道遠^シ。仁以爲^ニ己任^ト。不^ニ亦重^{カラ}乎。死而後已^ム。不^ニ亦遠^{カラ}乎。

「曾子曰く士以て弘毅ならざるべからず、任重うして道遠し、仁以て己れが任となす亦重ならずや。死して後已む

亦遠からずや。」

大意。國士たるものは弘量強毅でなければならぬ。任務重くして道は遠い。仁を以て己れの任となす、亦重くはないか。死の瞬間まで精進を止めない亦遠くはないか。

思索。士は國家社會を以て自ら任ずるものである。故に識見高く度量弘く毅然として強忍でなければならぬ。仁は即ち世界平和であり、東亞新秩序建設である。これ日本民族の使命であり、日本國民個々の理想である。東亞建設の聖業は堅忍持久一百年を要する。「死して後已む」のみならず「死してなほ已まず」の覺悟を以て子々孫々此志業を繼承するでなければ、之を達成せしめることはできなう。

子曰興^リ於詩^ニ。立^チ於禮^ニ。成^ル於樂^ニ。

「子曰く詩に興り禮に立ち樂に成る。」

大意。詩によつて善心を興起し、禮によつて社會に立ち、音樂によつて高雅な情操を養はねばならぬ。

思索。詩は自然と人情の美を歌つたものであるから、之を學べば良心を敏感にし善に對する感激性

を養ふことができる。禮は克己鍛練であり敬虔謙讓の修行であり、之を以て社會に立ち人と融和することができる。音樂は藝術の頂點に立つものであつて、之によつて高尚優雅な情操を陶冶することが出来る。詩は感情を主として知識を含み、禮は意志を主として知識を含み、樂は知と意とを超越した情操である。人生は情に始まつて情に終る。個人も社會も感情を中心として動いていく。人情の中正を基本とする聖賢の道の萬古不易な所以がこゝにある。

子曰民可使由之。不可使知之。

「子曰く民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず。」

大意。政治は民情を察して公正な制度を立て、民をして之に由らしむべきである。一一理論的に知らしめることはできない。

思索。傳統と民情を外にして、机上の理論で政治をすれば必ず失敗に終るものである。西洋の法理論を立前とする政黨政治の経験がそれである。普通選挙は理窟では正しいけれど實際に就て見れば不正に充ちてゐる。故に民衆を理論の型に入れようとしても、それは不可能である。指導者の人格と生活とに基づく民衆の信頼を外にして眞の政治はあり得ない。此章の意味を曲解して民衆を無智

愚昧にして専制政治を行ふのが儒教の思想であるといふものがある。果して然らば孔子は桀紂ネロを肯定するものといはなければならぬ。孔子が學習を尊重し、智仁勇を三達徳としたのを見ても民智の開發を急務とされたことは明らかである。

子曰好勇疾貧亂也。人而不仁疾之已甚亂也。

「子曰く勇を好んで貧しきを疾むは亂なり。人として不仁なる之を疾むこと甚しきは亂なり。」

大意。勇氣を好んで貧しきを惡むものは社會を亂す。不義不正な人間を極端に惡めば社會を亂す。思索。社會に亂の起る源は多くは勇を好む人間が貧困の境遇にある場合と、不正な人間が極度に壓迫される場合である。國家の治安、統制に當るものは、常に、この點に意を留めなければならぬ。

子曰如有周公之才之美。使驕且吝其餘不足觀也。

「子曰く如し周公の才の美なるも驕り且つ吝かならしめば其餘は觀るに足らざるなり。」

大意。周公のやうな天分豊かな才藝があつても、もし其性格が利己驕慢であつて人の爲め國家の爲めに盡す心がなかつたならば、その才能は貴ぶに足らない。

思索。才智藝能の天分あるものは多くは驕慢に流れ個人主義、利己主義に陥る傾向をもつてゐる。豊富な天分は之を人の爲め世の爲めに活用するところにその價值がある。もし人の爲めにする眞情が無かつたならば、その才能は悪用され濫用されて却つて人を害し世を亂し身を失ふを免れないであらう。

子曰三年學而不_レ至於_レ穀_ニ不_レ易_レ得也。

「子曰く三年學んで穀に至らざるは得易からざるなり。」

大意。三年の間聖賢の道を學んで功利的な考を出さない人間は容易に得られない。

思索。三年とは永久の意味である。人間が全く功利思想を離れて純粹に學問修道に精進することは容易なことでない。けれども、道德と功利とは兩立しない。道德を主とするでなければ遂に功利の奴隸となるを免れない。道德に徹して功利を使役するところに聖賢の訓がある。

子曰篤_ク信_ジ好_ミ學_ヲ。守_リ死_ヲ善_ク道_ヲ。危_ニ邦_ニ不_レ入_ラ。亂_ニ邦_ニ不_レ居_ラ天下有_レ道則見_{ハレ}。無_レ道則隱_ル。邦有_レ道貧且賤焉恥也邦無_レ道富且貴恥也。

「子曰く篤く信じて學を好み死を守りて道を善くす。危邦には入らず、亂邦には居らず、天下道あれば則ち見はれ、道無ければ則ち隠る。邦道有るに貧しく且賤しきは恥なり。邦道無きに富み且つ貴きは恥なり。」

大意。篤く信じて聖賢の學を好み、死の覺悟を以て道を弘むべきである。けれども危邦や亂邦に入つて、空しく身を失ふのは道でない。故に天下に道義が明かなれば顯れて政を行ひ、道義が暗ければ隠れて教化に従ふべきである。有道の社會にあつて貧賤なるは、己れに學徳なき爲めであり、無道の社會に富貴なるは不義不正を行つた結果であつて、此二つは共に恥辱である。

思索。いつ死んでも構はないだけの腹がでなければ道を説く資格はない。諸侯の對立した封建時代にあつては先づ道義の行はれ易い一國を根據として道を弘めるのが肝要である。初めから危邦亂邦に飛びこんでいけば、徒らに身を殺して道に益するところがない。才徳ある君子が地位と富とを得るは有道の社會であり、之に反するは無道の社會である。君子が上にあれば、君子が進んで仕へ、小人が上にあれば小人が地位を得るは自然の勢である。黄金で官位を買つて威福を張り、自ら恥ぢと思はず、人も見て之を賞讃する。爲すべき時に當つて身を献げることが知らず、現狀維持の安全地帯に居て恥としない。社會も亦斯の人を咎めないとすれば、國家は遂に衰頽の外なからう。

子曰不_レ在_二其位_一不_レ謀_二其政_一。

「子曰く其位にあらざれば其政を謀らず。」

大意。自分が其位置に立つでなければ、みだりに其政を批評すべきでない。

思索。政の局に當るものは賢才を登用し衆謀を統べることが急務であり、民間にあるものは當局者を尊信し、みだりに其政策に干渉しないのが王道の立前である。

子曰師摯之始關雎之亂。洋洋乎盈_レ耳哉。

「子曰く師摯の始め關雎の亂。洋々乎として耳に盈てるかな。」

大意。「魯の樂師摯の魯の樂官となつた當時、關雎の詩を奏した樂章の終りが恍惚として耳に滿つるやうに感ずる」というて孔子が音樂の美感を回想された。

思索。摯は魯の樂官の長であつて、後、魯の政が衰へたので齊に逃れ去つた。關雎は詩經の卷首にあつて愛の純情を詠うたものである。口に甘味の滿つるやうに耳に聲音の滿たされる孔子の美的生活が想はれる。

子曰狂而不_レ直。侗而不_レ愿。慥慥而不_レ信。吾不_レ知_レ之。

「子曰く狂として直ならず、侗として愿ならず、慥々として信ならずんば吾之を知らず。」

大意。野心大にして正直でなく、知識乏しくして眞面目でなく、能力なくして偽りをいふものは、どうすることもできない。

思索。人間の性格には矛盾した一面がある。短所の反面には、それを補ふやうな長長が與へられてゐる。故に日常反省して自己の缺點を知り之を矯正すると同時に自己の長所を發揮することを怠つてはならぬ。

子曰學如_レ不_レ及猶恐_レ失_レ之。

「子曰く學は及ばざるが如くす。猶ほ之を失はんを恐る。」

大意。學習は不斷に努力を加へるでなければ、忽ち退歩する恐れがある。

思索。「學問は坂に車を押す如し」である。しばらくも油斷をすれば、それだけ墮落である。人生は不斷の努力向上である。人間は一面享樂を好み安逸を喜ぶけれど、それでは眞の満足は得られない。努力奮闘の中のみ人生の快樂は味はれる。これ人間の運命である。

子曰巍巍乎。舜禹之有天下也而不與焉。

「子曰く巍巍乎たり舜禹の天下を有ちしや。而して與からず。」

大意。舜禹の天下を統治した有様は巍然として高大である。天下を視ること一家の如く、全く權勢や利害を超越してゐた。

思索。其徳なくして高き地位にあるものは、權勢利害の奴となつて不安煩悶の日を送らなければならぬ。高い木の枝に登つて風の吹くを恐れるやうなものである。しつかりと地に脚をつけてゐれば絶対に落ちる心配はない。脚下顧照が肝要である。

子曰大哉堯之爲君也。巍巍乎唯天爲大。唯堯則之。蕩蕩乎民無能名焉。巍巍乎其有成功煥乎其有文章。

「子曰く大なるかな堯の君たるや。巍巍乎として唯天を大となす、唯堯之に則る。蕩々乎として民能く名つくるなし。巍巍乎としてそれ成功あり煥乎としてそれ文章あり。」

大意。堯の帝王たる態度は巍巍として偉大であつた。唯天を大として天に則り蕩々として民衆は之

を形容する言葉を知らない。その治蹟は高大を極め、その文化は燦然たる光りを放つてゐる。

思索。萬物を生育する天心。萬民を子とする親心。八紘を一字とする皇道。孔子の祖述された堯舜の理想は現在我 天皇陛下の聖業として之を扶翼し奉る、我等日本國民個々の雙肩にかゝつてゐることを明らかに認識し信仰することが急要である。歴史は想像でなく、記録でなく、我脚下の地上に活躍しつゝある、この日々の現實であることを自覺せねばならぬ。

舜有臣五人而天下治。武王曰予有亂臣十人。孔子曰才難不其然乎。唐虞之際於斯爲盛有婦人九人而已。三分天下有其二以服事殷。周之德其可謂至德也已矣。

「舜、臣五人ありて天下治まる。武王曰く予に亂臣十人ありと。孔子曰く才難しと、それ然らずや。唐虞の際より斯に於て盛なりと爲す。婦人あり九人のみ。天下を三分して其二を有ちて以て殷に服事す。周の徳はそれ至徳といふべきのみ。」

大意。舜には賢臣五人あつて天下が治まつた。武王は「予に天下を治むるに足る賢才が十人ある」というた。孔子が言はるゝに「賢才はまことに得難いものである。堯舜よりこのかた周に至つて最